

海域アジア・オセアニア
NEWSLETTER

第4号 2026

目次

【調査報告】

パラオの表象	大宮萌恵 1
ロンドン郊外の「リトル香港」を探して	神宮寺航一.. 14
沖縄の宗教空間における雰囲気	郝 雅楠 27
景観の「原型」と「元」	侯 建衛 42
その場に集うものたちとともに料理する	笹本美和 57

【エッセイ】

資源化される中国広東省潮汕地域の食文化	横田浩一 68
台湾南部におけるアニマルフレンドリーに関する考察	蔡 妍歆 77
スナック菓子「乖乖」	河合洋尚 82
戦前沖縄の周縁地域からの出移民	大島崇彰 86
国頭村の共同店と泡盛	松岡竜大 91
社会人類学のフィールドに立つ	高井美緒 97
標示板と巡る昔日の首里	遠藤なつめ 101
島レモンと海域	横田浩一・河野正治・李婧 ... 107

【書評】

葉山博子著『南洋標本館』	河野正治 ... 113
--------------	--------------

【活動報告】

2025 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点研究会・活動報告	118
---	-----

パラオの表象

—染木煦と森田慶一の美術・建築・民族研究活動に刻まれた多層的な過去

大宮 萌恵

一 パラオを訪れた二人の人物

日もとっぷり暮れたある4月の夜、私達の乗る飛行機はパラオに着陸した。小ぢんまりとした入国審査の窓口を通過し、宿へと向かう車中から目を凝らすと、暗闇にかすかに浮き上がる植物は見慣れぬものなのかどうかとも識別できない。私の関心が建築・美術関係であることを伝えると、運転席と助手席から通過中の橋や観光名所についてぼつりぼつりとスタッフが説明してくれる。シャワーの下で翌日にまず訪れたい所を思い浮かべつつ、すぐに体を休めたいものの、数日前からの胃腸炎であらゆることに時間がかかる。1934年6月、染木煦も入港直前に胃腸を盛大に壊し、パラオ最初の数日を流動食と病院通いで過ごした偶然を思うも、この手の追体験は求めていなかったしやはり合点が行かない〔染木2008: 155-7〕。彼の場合は前夜の船内での饗宴、私の場合は居住地スイスからの旅路で立ち寄った日本のどこかでだろう。

私を今回パラオへと導いたのはこの染木、それに森田慶一という人物だ。「ドイツと日本の両方に順に統治された過去を持つ地域を建築家や美術家の視点から捉える」ことをテーマとする私の博士研究のうち後半部分の焦点となっている2名である。前者は絵画や彫刻を制作する美術家でありながらアマチュア民族学者としても精力的に活動し、後者は建築家であり大学で教鞭をとる建築理論学者でもあった。2人とも1930年代に「南洋群島」周遊の主要滞在先としてパラオを訪れている。第一次世界大戦後、旧ドイツ領南洋の島々のうち、赤道より北の地域が国際連盟からの委任統治領として、日本の管轄となって10年以上が経過した頃のできごとである。

彼らはいずれもこの地に何か足跡を残したような人物ではない。東京美術学校（現、東京藝術大学）を卒業し、大臣級の政治家や官僚ばかりの家庭で育った染木は、南洋周遊中も現地勤務の日本人役人や企業関係者達から手厚い待遇を受けている。7か月の滞在期間を通して数百点のスケッチや油絵を制作しては故郷に送り、東京で待つ妻への手紙という

形で詳細な日記を書き、そして各島で計約 500 点の様々な手工芸品や日用品等を収集して帰国した。現地に何かを残すどころか、もとあったものまで随分減らした当本人でさえある。森田は、東京帝国大学を卒業し、京都帝国大学で教鞭をとる、所謂エリート建築家であった。当時の日本の植民地、それも遠方の「南洋群島」に実際に建てる物を設計していたのは建築関係者の中でも技師や技手と呼ばれる、なかなか名前も記録されなかったような人物ばかりである [辻原 2022 : 43-55]。一方の帝国大学関係者で建築界に声を響かせるような人物達は、日本の「南進」に関する議論が急激に再活発化した 1930 年代後半以降も、座談会や学術誌の紙面で賑やかに意見を交わしていながら、実際に南方の領土、とりわけ「南洋群島」にまで足を運んだことのある人などほとんどいなかったのである。そのため森田は、南洋群島に設計者として滞在した建築家ではないが、建築界において発言力のある層の中では、実際に南洋を訪れ視察した経験を持つ建築家であったという点で、珍しい人物なのである。

二 ドイツそして日本による統治の過去

早朝 4 時、宿に窓も壁もないかのごとく蛙の大合唱が響き渡り、数楽章が歌い終えられたところで鶏の叫びが加わる。町が本格的に目を覚ますのを待ち、ひとまず国立博物館へと赴く。東側の舗装が少ない近道を選ぶと、この先に博物館が建っているとは想像できないうっそうとした木々の合間から民家の影と飼い犬に野犬、鶏が歩き回る空間が続く。奥まった入り口から館の敷地に入ると佇む数棟の建物の一つは、パイ（集会所）の複製（写真 1）である。かつての統治期にドイツ人・日本人の関心を集め続け、彼等の研究報告や紀行文、スケッチなど様々に取り上げられてきたこの建造物を初めて前にして、私はその規模や質感をようやく直接体験する。しかしこの棟も複製であり、近づくとその新しい塗りや絵柄と、写真や絵でのみ確認できる 100 年近く前のものの多くとの違いは明白である。皮肉なことに、ドイツ、ベルリンの民族学博物館に現在も展示されているもの（写真 2）が、現存する最古のパイであろう。20 世紀初頭に建物ごと移築された。工芸品や建物に関して、「本来其土地に置いて保護されなければ其の価値は半減されて了ふのであらう」[染木 1935 : 71] とは、染木が自覚し度々書き綴っていたことばであるが、このパイのドイツへの移送のことも知っていた彼はまた、「其の郷土の気候風土がこうした悪い状態にある場合それも亦免されるべき態度であると思ふ」[染木 1935 : 71] とも述べ、葛藤を露

にしている。



写真 1 国立博物館(パラオ、コロール)入り口横に佇むバイの複製

(2025年4月8日、筆者撮影)



写真 2 フンボルト=フォールム(ドイツ、ベルリン)、民族学博物館に展示されているパラオの

バイ (2025年7月27日、筆者撮影)

では世界に散り散りになっている旧植民地の美術作品、工芸品、日用品等々をどうするべきなのか。これは、各地で国際的な共同研究企画として近年増加している **Provenance Research** やそれにしばしば続く **Restoration Projects** に関わる多面的な議論を巻き込む問題である。こうした国際かつ学際研究企画の一環として現在博士研究とは別に私関わっているプロジェクトは、オーストラリア北部と日本、スイス、イギリス、ドイツが複雑に入り組んだ事象を対象としているが、はじめに立てるべき基礎的な問いは場所や民族に依らないものである。まず、どこかの一展示室あるいは収蔵庫の棚一つをとっても、どこで、誰により、誰のために、何のために、どのように、何を用いて作られたものなのかは、品目一つ一つで異なることが多い。さらに、誰の手によって収集されたのか、購入品なのか、略奪品なのか、盗品なのか、贈り物なのか、「拾い物」なのか、仲介者として他に誰の手に渡ったか、現在の収蔵場所に至る前にどこに保管され、取引されたか、取引の場合、何が引き換えとなったか、記録が全て辿れることなど滅多にない。様々な記録文書が見つかって、内容が不正確なことも多く、意図的な書き換えだけでなく、用途や収集地名・人名などは誤解が誤解を生んで誤った内容が記載されていることも少なくない。これら全ての問いに向き合い、もし、返還のプロセスが検討される場合には、100年を超えるような年月を経たものに対し、現在それを最も所有すべき人物あるいは組織を判別し決定する過程が伴うが、返す側にも返される側にも想像を超える複雑な事情がしばしば待ち受けている。例えば染木のコレクションは、記録が詳細かつ収集経路が比較的単純な方であろうが、それでもなお、500点にのぼるコレクションの一つずつに改めて上記の全ての問いを立て直すとするれば、先の見えない議論がいつまでも続くだろう。ドイツの各博物館に分散したパラオの様々な品に至っては、現在パラオに存在する全博物館・記念館と収蔵庫を埋め尽くしても収まらない豊富さだ。そして、このような目に見え手で触れられる形で残されているもの以外に、美術家や建築家の手によって図面やスケッチ、写真、絵画のみの形で記録された、マテリアルにはすでに不在のものはもっと多い。統治し搾取する側の国の人間として現地を訪れながら、こうした記録や作品を残した彼らは、どんな前提と期待を持って臨み、いざ現地の光景が想像通りであったりなかったりした時、何を自身のフレーム内に留め、何をフレームから外したのか、どんな視点をどう表象したのか、溢れる問いは止まらない。

国立博物館の展示エリアに入ると、最初の企画室に可愛いイラストや文字の溢れた

掲示板が立っていた。地域の小学生達の作品を貼り出したもので、ドイツから何かの公式訪問でもあったのだろう、どれもドイツがテーマとなっている。思い思いの言葉と国旗や人々の絵の中、ふと目に留まったのは、英語で丁寧に書かれた「パラオにはドイツが必要、ドイツにはパラオが必要」という一言だ。私は日本とドイツで地元の初等教育を受けてきたが、学校でパラオという単語を見聞きしたことはおそらく一度もないのではないか。後日この展示の話聞かせてみたドイツの知人友人達も毎度揃って、「ドイツの子供の中にパラオという国を知る子が何人いるか」、「はたまたドイツとの歴史上の関係に至っては、あなたから聞いて初めて認識したようなものだ」、と返ってくる。子供達による文字とイラストであるだけに一層鮮烈に迫ってきた、歴史認識のいびつさであった。

その後も、この博物館の図書室やエピソンミュージアム訪問、それにバベルダオブ島でのパイと遺跡巡りなどを通して各地で解説文を比較したり、地元の方々から説明を受けたりする機会に恵まれた。各展示では、パネルごとに、調査協力している研究員が現地パラオに加え、ドイツから、日本から、はたまたアメリカなど他の国からと（個人の国籍ではなく所属機関という点で）様々な背景で、それが解説内容にかなり判別できる形で表れていることが多かった。私が資料で読んできた情報と事情の説明が違ったり、ドイツ統治期に既にパラオに出入りしていた日本人に対するドイツ人からの視点が反映されていたり、同じできごとや人物に関しても描写や批判の角度が多様で、数行の解説文がいかに訪問者に全く異なる印象を残し得るかが実感できる。研究論文や書物となればなおさらである、と改めて自覚し、常に自らの言葉を一步引いて眺める心がけを、と気が引き締まる。

三 染木と森田がパラオに見たもの

建築・美術・民族学の学術誌に調査結果や論考を投稿した森田と染木であるが、視覚資料として現地で蓄積したものは、森田が主に図面と写真だったのに対し、染木はスケッチと油彩画であった。彼らはそれぞれパラオに何をみてどう表象したのか。先述した通り建築家の中でも特徴的だった森田の立ち位置に加え、彼の調査の手法に私が森田に注目している大きな理由が在る。写真と図面、そして発表論考からは、彼がドイツや日本が建設したものには関心を示さず、現地の伝統家屋の調査に注力していたことがうかがえる（写真3）。しかし彼の調査の特異な点はその関心対象ではなく、それら伝統家屋を調査する際にかつてドイツから依頼・派遣されて調査を行った研究団の出版物に常に依拠している点な

のである。ここには森田の本来の専門分野である古典ギリシャ・ローマ建築理論と近代ドイツ・フランス美術理論における理念が関わっている。彼自身多くの論文や著書で強調しているように、森田は一次資料を原典で読んで解釈することの重要性を説き続けた人物だ〔森田 1974 : 677〕。間に他言語のフィルターを入れないことで明快化する理解、これが彼の専門研究の理念であり、パラオでの調査においてもその姿勢を貫こうと試みたのだろう。しかし、パラオには現地の文字による記録はなく、ストーリーボード（写真 4）と呼ばれる絵柄や口頭での伝承、それも特定のコミュニティの中でもさらに許された者にしか伝えられない数々の語りが重要な役割を担う。彼のノートには各民族の言語を学ぶ努力の形跡はあるが、夏季のみの滞在で、複数の言語で理論や歴史を書き起こせる程の上達は到底望めない。彼にとって欠かせない原典としての文字資料は存在しない。そうした状況で森田が頼ったのが、ちょうど自身の得意とするドイツ語で書かれた、先代の統治者達であるところのドイツ人学者等による学術文献だった。¹ しかしここで生まれてしまった矛盾が、「依拠すべき文字資料」と「原典としての一次資料」が一致しなかった点である。自身の研究理念に忠実に調査に臨んだあまり、せっかく直接現地に赴いているにもかかわらず、観察や解釈がドイツというフィルターを通じたものとなってしまったことを、不満足な研究成果という形で彼自身も自覚していたようだ〔大宮 2024 : 571-3〕。滞在后数年間の論考投稿や講義・講演以降、彼がこの南洋調査に言及することはなかった。

¹ 森田がとりわけ頻繁に引用したのが以下である。Krämer, Augustin. 1917. *Palau: Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Friederichsen.; Kubary, Jan Stanislaus. 1889. *Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archipels*, Trap.

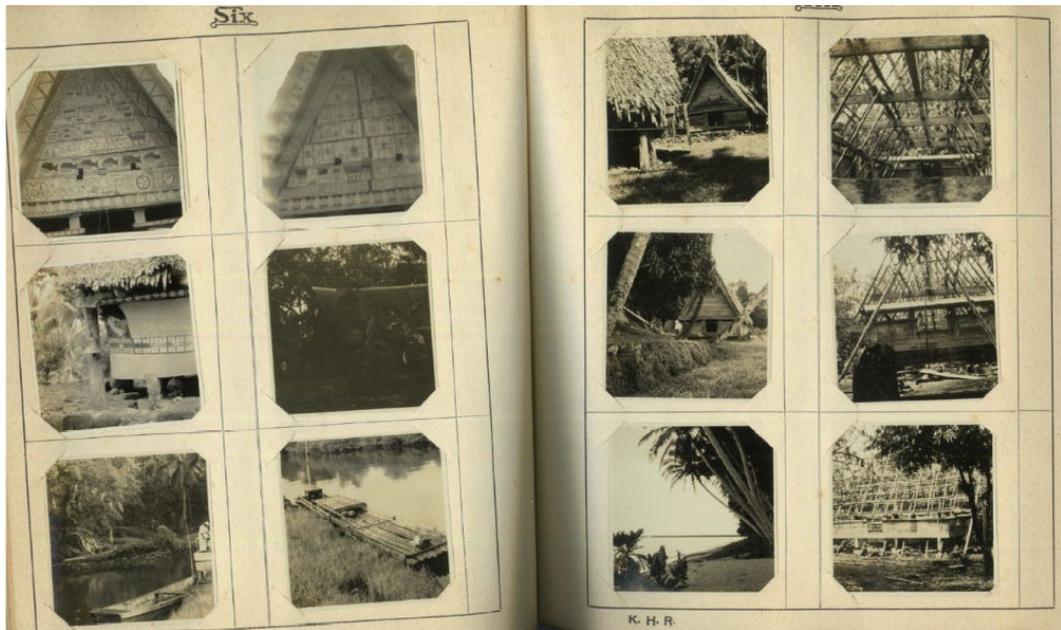


写真3 森田慶一のアルバムの一頁、京都大学建築学科にて

(2023年9月11日、筆者撮影)



写真4 パラオ、バベルダオブ島のバイ内部のストーリーボードの一例

(2025年4月7日、筆者撮影)

染木の南洋周遊に伴う活動にも複数の特徴があるが、中でも彼が他に 1930 年代前後に南洋を訪れた数十名の日本人美術家達と異なっていた点は、その民族学的調査・収集と、帰国数年後に南洋のモチーフを用いて描いたいくつかのモダニストな油彩画（写真 5）であろう。近年、南洋を描いた様々な美術家による作品が展示される企画が時折見受けられ、染木の作品の一部もそこに並ぶことがある。そうした場でもとりわけ異彩を放っているのは、たくさんのスケッチやそれを基にした版画などよりも、この技巧的な油絵の方だろう。シュルレアリスム、キュビズム、といった、ヨーロッパで同時期に流行した技法を明確に採り入れた数枚の油絵の中には、一見モチーフが何かはっきりしないものも多い。しかし、彼のスケッチ、メモ、日記、絵葉書などそれぞれ数百枚ずつに上る遺品を調査してゆくと、各作品内のほぼ全ての要素に基となっているものが特定できるのだ（写真 6）。² いつどこで見つけた何を採用したかのみならず、採用しなかったか、どう改変したかも細かく特定してゆくこの作業にはかなりの時間を要したが、そこから浮かび上がったのは、ただの「染木の油絵の元ネタ集」ではなく、彼が南洋で何を見たかったのか、そのうち何を帰国後に人々に見せたかったのか、何を作品に描き留めたかったのか、といった問いに繋がるものであった。いざ、パラオを訪れた私は、彼にそうした判断や選択をさせしめた光景を辿るべく、辺りに目を凝らす。

² 分析と考察の詳細は別稿にて近日発表予定。



(左) 写真 5 染木煦 『失題』 1936 年頃、油彩 (町田市立国際版画美術館蔵)

(右) 写真 6 染木煦の 1934 年南洋周遊時のスケッチより Shintel という植物

(個人蔵、林勲男大阪国立民族学博物館名誉教授によるスキャン)

しかし、森田や染木が訪れた頃とは当然大きく変わった町並みや人々の暮らしに対し、一見、安定した姿を保つ自然の風景が実はちっとも不変などではなかったことを最も突き付けられたのは、ペリリュー島訪問だった。水面付近を長年波にえぐられ特徴的なキノコ型となっている島々 (写真 7) をいくつも通過しながら、染木がその形と由来を妻、愛子への手紙で説明していた一節を思い出す [染木 2008 : 178-9]。自然のこうした姿は当時も今も、と呑気なことを考えつつ、水深や陽の向き風の向きによって鮮やかに色を変え輝く水面 (写真 8) の、難関といわれる航路を熟練の技で進むボートに身を任せる。初めて

見るあおやみどりの色の多彩さと、空の明るさ、そして徐々に近づく島の木々の色濃さに視覚の消化が追い付かない。しかしいざ上陸すると、うっそうとした高く色濃い植物に囲まれて、民家、商店、学校などの間々に現れるのは、手掘りの岩洞窟、地上や半地下のトーチカ、銃口および監視用の岩壁の穴、発電所跡、防空壕、破壊された水タンク、朽ち行く戦闘機に戦車（写真 9）。さらに、この数年になって急に米軍が道路舗装や飛行場建設に力を入れ始めたために真っ平らで太く整備された道や、テクノロジーやインフラとして日本が建設したものの使われ続けていない真新しい見た目の発電所が、この島の置かれている状況を映し出す。1945 年、パラオで最も戦禍を被った島の一つであるペリリューは、人工物の残骸と焼け野原となったその痕の上に 80 年の時を経て森と人間の暮らしが営まれる空間だ。遠くから見えた深緑の島、内側から見てもまるでずっとそこに生え続けているかのように静かに満ちる植物がつくる風景には、染木や森田が 1930 年代に眺め、切り取った時の風景（写真 10）のほんのひとかけらも含まれていない。



写真 7 染木煦も描き留めた、水面に触れる部分を波でえぐられたパラオの島々

（2025 年 4 月 5 日、筆者撮影）



写真 8 次々と色が変わる遠浅の海上をボートでペリリュー島に近づく

(2025年4月5日、筆者撮影)



写真 9 ペリリュー島の元日本空軍 HQ 附近、植物に覆われた戦跡

(2025年4月5日、筆者撮影)



写真 10 森田慶一のアルバムより、1938 年に撮影された「ペリリウ村」の一光景

(2023 年 9 月 11 日、筆者撮影)

四 再訪のために

帰りの空港で、同じ便を待つ観光帰りと思われる日本人搭乗者の数に驚いた。滞在した 10 日程を通して、ほぼそうした滞在者を見かけなかったためだ。観光客用のリゾートエリアは確かに敷地ごと囲われたようなところが多く、生活圏と分かれている印象ではあった。日頃から建築家や美術家を対象に研究をしていると、日常の町並み、建物、生活空間、それに食事や会話の体験が行く先々で重要であるが、次の機会には今回見かけなかった非日

常にも目を凝らしてみたい。ドイツと日本の統治を経験した地としてのパラオ、また、二人の人物の残した論考や作品を考察するために欠かせない土地としてのパラオに赴いたが、その目的に拘泥しすぎると、私自身もまた、彼らのフィルターを通したパラオを見ようとし、目の前に実際に見えているものを見ようとしなのではないか。これはどの土地に関わるどの人物や作品の研究に取り組む際にも恐れ、気に掛けている点である。今滞在では、彼らの足跡自体とは関わりのない活動も意識的に多く取り入れ、パラオの島々の近年の日常に近い部分を少しばかり経験できたことに感謝している。

参考文献

- 大宮萌恵 2024 「空白となった超越的なもの：森田慶一による 1938 年夏の南洋群島調査滞在」 『日本建築学会計画系論文集』 89 (817) : 568–77。
<https://doi.org/10.3130/aija.89.568>.
- 染木 煦 2008 『書簡に託した「染木煦のミクロネシア紀行」』 求龍堂。
—— 1935 「パラオを語る」 『美術』 10 (7) : 64–71.
- 辻原万規彦 2022 「別巻 2, 第一部『解題』, 第二部『解説』」 『復刻版：南洋庁公報』 ゆまに書房。
- 東京新聞社・町田市立国際版画美術館編 2008 『美術家たちの「南洋群島」』 東京新聞。
- 森田慶一 1941 「内南洋の建築」 『建築と社会』 25(8) : 1-7。
—— 1974 「ウィトルウィウス研究ならびに西洋古典学に基づく建築論形成への貢献」 『建築雑誌』 1083 : 677-9.
- Krämer, Augustin. 1917. *Palau: Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, Friederichsen.
- Kubary, Jan Stanislaus. 1889. *Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archipels*, Trap.

(おおみや・もえ チューリヒ大学)

ロンドン郊外の「リトル香港」を探して

神宮寺 航一

一 はじめに

1997年7月1日、香港の夜空を舞ったユニオンジャックは静かに降納され、代わりに紅い五星紅旗が天へと登った。式典でのその印象的な瞬間とともに、香港の主権は英国から中国へと引き渡された。あれから28年、英国では香港からの移民が急増している。本稿は、香港移民の集住が指摘されるロンドン郊外の複数地区について、筆者が2025年9月に実施した実地踏査に基づき、その現況を報告することを目的とする。

近年の英国への香港移民の急増は、香港の British National (Overseas)¹ (以下 BNO) 資格保持者とその家族を対象に2021年1月31日に開設された、通称 BNO ビザを用いた英国への移民ルートの存在に起因する。BNO ビザ保持者には英国での就労・就学を認められ、5年の継続居住後に無期限滞在を経て市民権申請へ進む道が制度化されている。英国内務省によると、この制度を通して、2025年6月までに16万人以上が英国へと到着した [Home Department 2025]。

「それならば、英国にリトル香港 (Little Hong Kong/ 小香港²) ができているに違いない！」

移民と華僑華人を専門とする研究者であると同時に重度の香港迷³ (香港のファン) である筆者は、このニュースを聞いたときそう思った。ここで言う「リトル香港」とは、香港以外に存在する、香港人が集中居住し、香港的な特性に彩られた都市空間を指し、コリ

¹ British National (Overseas)、通称 BNO とは、英領時代の香港において、中国への主権移譲の10年前から有資格者が登録することにより取得できた英国籍の一類型である。香港での出生など、香港と特別な繋がりのある者に登録資格があった。当該資格者は、その証明として BNO パスポートを保持することができる。一方で、通常の英国市民権と違い、BNO のステータスは英国本土での無条件での居住権を付随しない。1997年7月1日以降、この地位の新規取得は不可能であり、世代継承も認められていない [愛 2016 ; Home Department 2020]。英国内務省の推計では、2020年時点で290万人が BNO の地位を保有している [Home Department 2020]。なお、日本政府も現在に至るまで BNO パスポートを日本入国の際の正式な旅券として認めている。

² 以下、本文のルビは広東語読みを表す。広東語とは、香港・マカオおよび華南地域を中心に用いられてきた漢語の一方言群であり、音韻体系や語彙・文法において標準中国語と大きく異なる。

アタウンやリトル沖縄など同様の「エスニック都市空間」³と呼ばれるものの一つである。「リトル香港」といえば、1997年の主権移譲前の香港の移民ブームにより形成されたカナダやオーストラリアに存在するものが有名であり、それらは多くの研究のフィールドともされてきた。この時期以降の香港移民は、都市郊外の中高所得層向けの住宅街に集住する傾向があると言われている。筆者の経験上、郊外の「リトル香港」は異国情緒溢れる観光地というよりはむしろ、香港をパッキングしてそのまま外国に持ち込んだような街であった。カナダ・バンクーバー郊外のリッチモンド (Richmond) やトロント郊外のマーカム (Markham) では、香港で使われる繁体字中国語の看板や張り紙が溢れ、広東語が飛び交い、本場さながらの^{チャーツァンテン}茶餐廳 (カフェ) や^{サイベン}西餅 (パンやケーキ) の店が立ち並ぶという、到底ここが北米とはとても思えない光景が広がっていたことが印象に残っている。

2021年以降、香港関係の情報が多数を占める筆者の SNS アカウントのタイムライン、そして動画共有サイトのおすすめ動画には、英国の首都ロンドン郊外の「リトル香港」を紹介する投稿、そしてそれに関連するニュースが毎日のように飛び交う。今のロンドン郊外では、筆者がカナダでかつて見たような「リトル香港」を見ることができる。そう確信し、筆者はヒースロー空港へ降り立った。

二 ソーホーのチャイナタウン

ロンドンで香港移民の集まる街として最も有名なのは、都心ソーホー (Soho) 地区南端の「チャイナタウン (Chinatown)」と呼ばれるエリアである。本稿のテーマ「郊外」からは少し離れるが、ここを訪れないとロンドンの香港移民は語れないと思い、まずはチャイナタウンを目指してソーホーを歩く。筆者がまず覚えたのが、ここは西洋であるはずなのに、なぜか非常に香港に似ているという感覚であった。車は香港と同じく左側通行であるし、LOOK RIGHT と書かれた道路の路面標示や歩行者信号機の棒人間も香港のものと同様である。街の雰囲気も中環や半山區といった香港の欧米人の多いエリアに非常に似ており (写真 1)、筆者は多くの香港移民が英国に渡る理由の一つを垣間見た気がした。

³ 「エスニック都市空間」の学術的定義や研究の歴史については、地理学者である杉浦直による論考 [2007] に詳しい。杉浦によると、エスニック都市空間は学問分野によりエスニックゲッターやエスニックエンクレーブなどとも呼称される。 [杉浦 2007: 19]

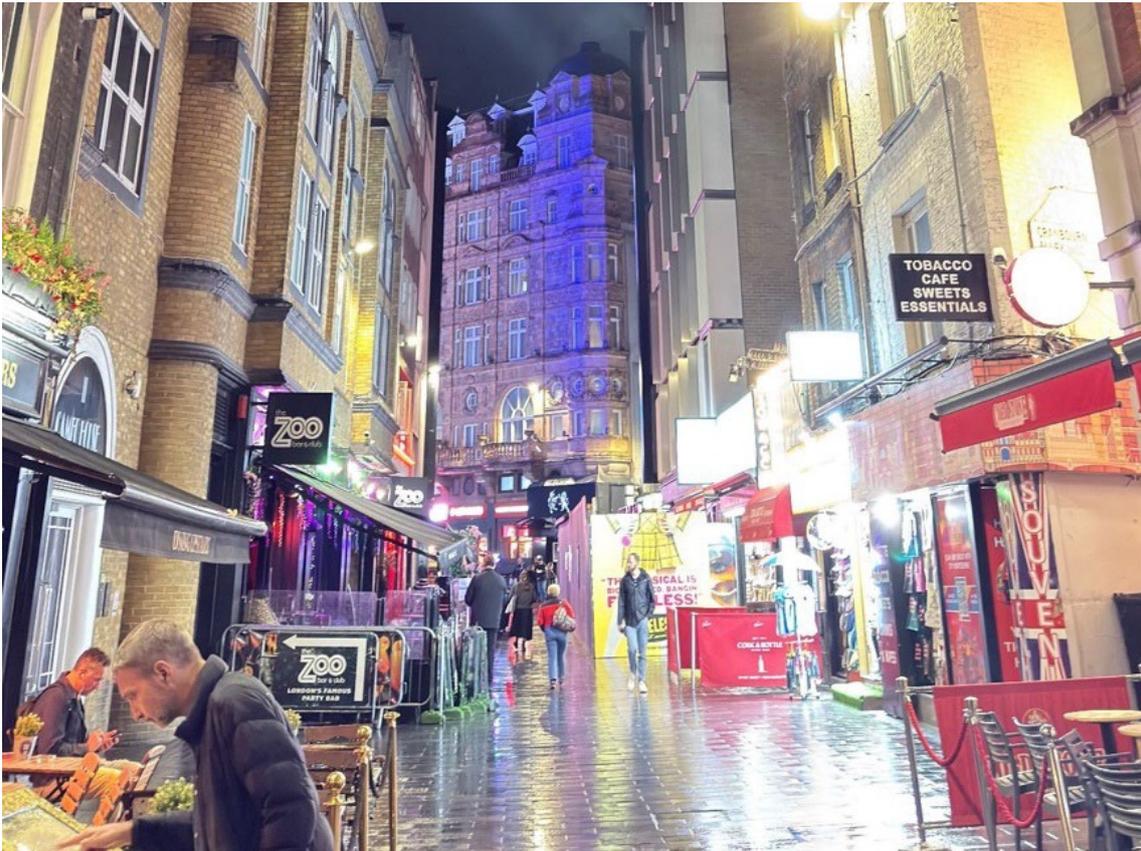


写真1 ソーホー地区の街並み（2025年9月10日、筆者撮影）

2016年に完成した中華風の門（写真2）がシンボルのチャイナタウンは、1960年代以降、香港移民が集住することにより形成された街と言われている〔王 2013〕。大通りには広東料理店が軒を連ねるが、現在では観光地の側面が強いようで、様々な国からの観光客で賑わっていた。そんな中、1985年に香港の旅行会社から送られたという2つの獅子像〔London Remembers 日付不詳〕が目を引く。地価の高い都心に位置するため、ここに居住している香港移民はさほど多くないと考えられるが、歴史的な香港との繋がりを感じられるエリアだった。

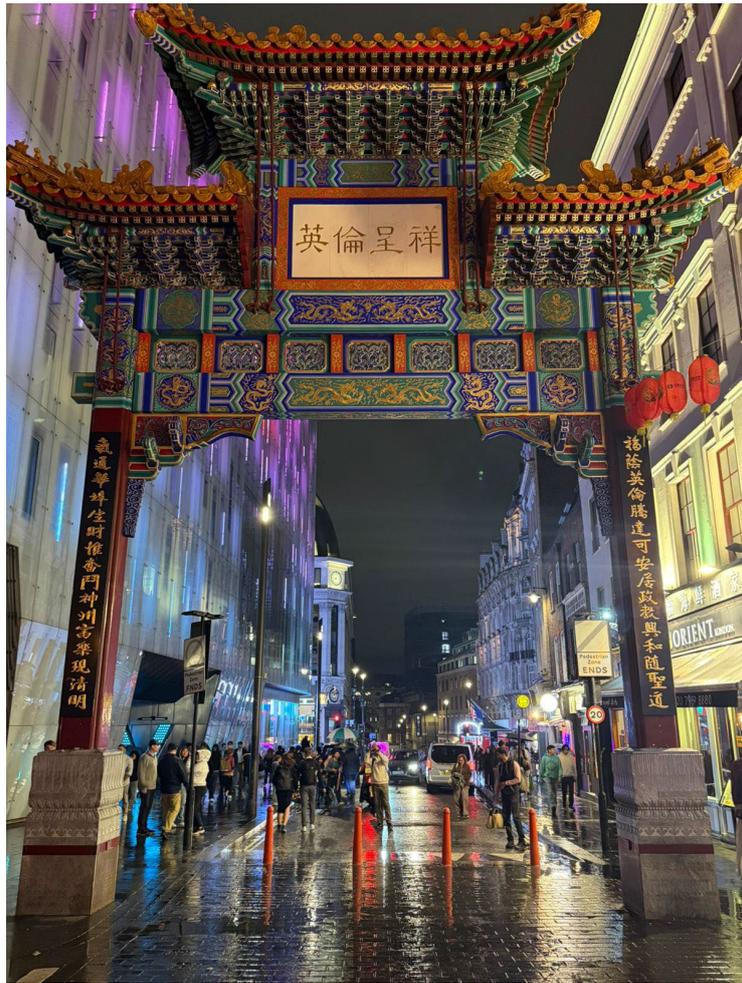


写真 2 チャイナタウンの樓門（2025年9月10日、筆者撮影）

三 コリンデイル地区

ロンドン北部のコリンデイル (Colindale) 地区は、歴史的に東アジア系の移民が多い街として知られる。BNO ビザ保持者の移住先としても人気があるようで、動画共有サイトにはここへの移住の情報の動画が多くアップロードされている他、SNS では香港移民コミュニティのグループもある。地下鉄コリンデイル駅を降り、中心部へのバスに乗る。自分以外の 3 グループの客は全員南方訛りのマンダリン（標準中国語）で話していた。

コリンデイル中心部にはアジア系の大きなフードコートがある（写真 3）。1990 年代には同じ場所に日系百貨店があったようだ。フードコートでは中華圏を中心にアジアの様々な国の料理が揃い、客家料理といった英国では珍しいジャンルの中国料理店もあった。筆者は香港の焼き物の店を選び、東アジア系の女性店員にマンダリンで三寶飯（焼豚、豚バ

ラとアヒル肉の井ぶり)を頼んだ(写真4)が、店員はマンダリンがあまり得意ではないようだ。その店員は筆者の後ろの客と流暢なブリティッシュイングリッシュで世間話をし、店員同士では広東語で会話していた。三寶飯は、昔の香港を感じさせられる非常に甘い味付けだった。



写真3 コリンデイルのアジア系フードコート(2025年9月13日、筆者撮影)



写真4 フードコートで頼んだ三寶飯(2025年9月13日、筆者撮影)

フードコートの手前には中華系チェーンの大きなスーパーがあり、中国大陸や香港、台湾だけでなく、日本や韓国、ベトナムから来た商品も多く陳列されていた。客が、おそらく顔見知りではない魚売り場の店員に「今日新鮮な魚はなに？」と自然に広東語で話しかけていた。もはや広東語はこの街の共通語の一つなのだろう。

コリンデイルの中心部を歩く。筆者が驚いたのは、道行く人々は広東語やマンダリンを話す人が多く、明らかに香港系を含む東アジア系が多い街であるのに、カナダの「リトル香港」とは違い、言語景観からはそれをほとんど感じさせないところであった。フードコートの近くの大型スーパーに入ってみても、客の半分以上が広義のアジア系であり、アジア各地の食材が揃っているにもかかわらず、陳列棚の表記は英語のみであるなど全体の雰囲気は普通の英国郊外のスーパーであり、筆者は必死に「多国籍」を隠しているかの印象を受けた。

2 時間ほどコリンデイルの街を歩いてみたが、中国語を用いた看板や張り紙は前述のフードコートと中華系スーパー以外では見ることはなかった。マンダリンを話す家族の間をすり抜け、街の真ん中にある大きな公園に入る。芝生が美しい英国らしい庭園風景のなか、大きな音楽をかけてヨガを行う 30 人ほどの集団がいた。数人を除いて全員東アジア系のような。筆者は思わず、音楽を流しながら中高年の人々がそろって体を動かす、中華圏の公園でよく見かける体操の集団を思い浮かべてしまった。

四 サットン地区

次に筆者は、ロンドン南部のサットン (Sutton) 地区を訪れた。サットンは、香港と英国双方のメディアで香港移民の集住が非常に注目されている街である⁴。動画共有サイトにはサットンへの移民を扱った動画が多く投稿され [YouTube 2025] (写真 5)、SNS の香港移民のグループに 1 万人近くが参加しているなど、BNO ビザ保持者の「移民熱」の中心地といえる場所であるようだ。ここに香港移民が集まる理由として、香港メディア Esquire Hong Kong [2021] は、交通の便の良さ、犯罪率の低さ、環境の良さ、平均収入や教育水準の高さ、そして簡単に香港や日本・韓国の食料品が手に入ることなどを挙げて

⁴ 例として大衆紙デイリー・メールは、ここを Little Hong Kong と称し、香港移民の実際の生活について解説する記事を報じている [Daily Mail 2025]。

いる。また 2025 年 4 月には、現地香港コミュニティのリーダーといえる人物がサットン区の区議選で当選している [Your Local Guardian 2025]。



写真 5 動画共有サイトのサットン「リトル香港」を扱った動画 [YouTube 2025]

これらのオンラインの事前調査で得た情報から、やっとカナダで見たような「リトル香港」を見られる。筆者はそう信じ、都心のビクトリア駅からサットン行きの電車に乗り込んだ。それから 30 分ほど、電車から見える景色は低層住宅が並ぶ英国の郊外の光景そのものだが、サットン駅に近づくとその田園都市的な風景に 2 つの真新しい高層マンションが見えた。この 2 つのマンションは特に香港からの移民に人気があるようで、香港のインターネットコミュニティでは「香港人ビル」と呼ばれている。そのビルの周囲も現在工事中で、今後この街の風景は激変していくのだろう。

駅を降りると、まず広東語で熱心に子供の教育の話をしている家族が目に入った。胸が高鳴り、サットンの中心部まで歩く。メインストリートは、意外にも典型的な英国の郊外の町並みと言った雰囲気の大通りだった。平日の昼間だったがそれなりの人通りがあり、街行く人の 1 割ほどが東アジア系といったところだ。中華系の小さなスーパーがいくつかあり、それらには広東語を話す人たちが多く訪れていた。また街のスーパーやショッピングモールでもロンドンの他のエリアよりは明確に東アジア系が多く、広東語も頻繁に聞こ

えた。一方で、中華系スーパー以外からは特に東アジアらしさや香港らしさを感じさせるものはなく、筆者は正直なところインターネット上での「リトル香港」との言説の乖離を感じた。

1 時間以上中心部を歩き、少し疲れた筆者は、小さなパブに入った。パブで食事を済ませ、エールを片手に長居していると、隣に東アジア系の男性とヨーロッパ系の男性の二人組が座った。二人はサイダー（英国のパブで定番の林檎酒）を注文すると、英語で何やら議論を始めた。男性は香港生まれのようで、酔いが回ってくるとともに自らのライフストーリーを語り始めた。自身がロンドンにきた経緯、ロンドンでの苦労、ここ数年の香港の変化、そして自らの現在の香港への感情を語る彼の話に、筆者は思わず聞き入ってしまった。British colony, One country, two systems, National Security Law—香港の過去と現在を象徴する英単語を発するたびに、彼の声に力が入る。最後に二人は「ロンドンは最高だ。俺達は自由だ。俺達には酒を飲む自由がある。チアーズ！」と言って乾杯していた。

お腹が満たされたところで、英メディアからも何度か取材されている有名な香港料理店を見に行く。この店のオーナーのカップルは、元々香港の^{ジャッキー・チュン}鰻魚涌でレストランを開いており、2021年にBNOビザで英国へ移民してきたようだ [Nunn 2024]。サットン駅から牧歌的な英国の郊外田園都市風景を20分ほど歩いたところに突如現れた香港的空間は、平日の昼過ぎにもかかわらず非常に多くの東アジア系の客で賑わっていた。

五 ブライトン市

最後に訪れたのは、ロンドンから1時間ほど電車に乗ったブライトン (Brighton) という海沿いの小さな街である。SNS上では複数の香港移民のコミュニティがあり、公民館で香港移民のための活動を行っている団体もあった。市中心部のジュビリー広場 (Jubilee Square) で、香港をテーマにした大きなイベントが開かれたこともあるようだ。事前調査の限りでは最も「リトル香港」の存在を期待できる場所であった。

駅を出て、メインストリートを歩く。小さな街であるので、2時間ほどかけて都心部を隅から隅まで歩いた。しかし、どこも英国の一般的な田舎街の風景で、数件の香港料理店以外は「香港らしさ」を感じさせるものは皆無だった。何かしらの団体の広告や張り紙が見られるかもしれないと思い、ジュビリー広場、公民館や美術館の隅々まで目を凝らしたが、香港移民の生活の痕跡すらも見ることはできなかった。

せめて最後に香港らしい物を食べて帰ろう、そう思って香港料理店の一つに足を運ぶ。香港の茶餐廳そっくりの店内に、「一位？」（一人？）「食咩呀？」（何を食べるの？）という広東語が響く。筆者は「一份撈麵同凍檸蜜（汁無し中華麵と蜂蜜レモン水）」と広東語で注文した。店内では多くの客が広東語で話している。昼過ぎだったので、鴛鴦（コーヒー紅茶）や凍檸茶（レモン入りアイスティー）といった香港独特のドリンクを注文し、カフェとして利用している客が多かった。料理は、驚くほど香港で食べるものと同じ味だった（写真 6）。本格的な香港料理を英国の郊外で食べられることに筆者は感動する。「リトル香港」を見つけることはできなかったが、どこか香港島を思わせる海岸線の道を歩きつつ、この街になぜ香港移民が集まるのかが理解できた気がした。



写真 6 香港料理店の汁無し中華麵と蜂蜜レモン水

（2025 年 9 月 16 日、筆者撮影）

六 おわりに

以上のように、筆者の「リトル香港」探しは、期待とは異なる結果となった。郊外における移民の集住は、1990年代後半以降の移民研究における主要な関心の一つとされてきた。Li [1998] は、郊外住宅地への集住は必ずしも現地社会の同化を意味しないことを論じ、Zelinsky & Lee [1998] は、郊外で居住の分散があったとしても、90年代以降に加速度的に進化した情報通信技術により同郷のコミュニティは維持されていくことを論じた。2020年代、SNS全盛期に「移民熱」を迎えたBNOビザ移民は、移住前のネットワーク形成から移住後の情報収集までが全てがインターネット上で完結するため、その集住が街の言語景観には現れにくいのかかもしれない。現在の英国で席卷する排外主義という要素も、集住の事実が言語景観に反映されにくいことと無関係ではないだろう。また郊外では移民の居住が分散傾向にある上に、移動も車が中心となり動線が広がるので、そもそも特定の地理的空間を指して「リトル香港」などと呼ぶのは適切ではないのかかもしれない。筆者のような^{ヒョンゴンマイ}香港迷は実際に英国まで行くより、日本からオンラインコミュニティに参加して香港移民のネットワークを体感したほうが満足度の高い経験が得られる可能性もある。

それでは、なぜ香港のインターネット空間では多くの「リトル香港」に関するポストや動画が投稿されているのか。SNSネットワークが全盛期の現代で、物理的な都市空間と密接に結びついた「リトル香港」に香港移民はなぜ興味を抱くのか。筆者には、今回の訪問で自分なりの答えを見つけ出す出来事があった。今回の滞在中、筆者は別の調査も並行して行い、6日間ロンドンとその周辺を歩き回った。ちょうど極右団体による外国人排斥の大規模なデモが行われ、英国滞在中はいつも経験することではあるが「ヘイ、チャイニーズガイ!」「ジャッキー・チェン!」などと幾度となく地元の若者に絡まれた。挙句の果てには、繁華街でスマートフォンをひったくられ、今回の調査で撮影した写真の大半を失ってしまった。スマートフォンの強奪はロンドンで激増している犯罪であり、香港のインターネット空間では「犯人たちはもっぱら東アジア人を狙っている」との言説で溢れていた。数々のロンドンの「洗礼」に遭い、調査終盤に心身ともに疲れていた筆者は、何かしら「自らの東アジアのルーツを肯定するもの」を欲し、本稿の冒頭で述べたソーホーのチャイナタウンへと引き寄せられた。ふと入った中国料理店で料理を待っていると、東アジア系の女性がパートナーと思われるヨーロッパ系の男性を連れ店に入ってきた。女性はおそらく学習を始めたばかりの広東語とマンダリンを用いて、「^{ガウジー}餃子...^{ジャオズ}餃子?^{ウオーヤオジャオズ}我要餃子?」⁵

⁵ 「餃子をください」の意。「ガウジー」は広東語であり、「ジャオズ」「ウオーヤオジャオズ」はマンダリン。

と中華系の店員に水餃子を注文していた。店員がマンダリンで「広東語もマンダリンも上手いね」というと、女性は英語で「私は香港で生まれてすぐにロンドンに来たから、香港の記憶はないし、広東語もマンダリンも全然話せないの」と笑顔で話し、店員からマンダリンを教えられていた。その後男女は時折、二人の将来に関する話をしていた。なぜ女性はその話の場所としてチャイナタウンを選んだのかは分からないが、この場所がロンドン都心で最も、広東語やマンダリン、そして香港系というルーツを肯定する場所であることは確かだろう。

少し前にカナダのブリティッシュコロンビア大学が開いた近年の香港移民に関するオンライン研究会に参加したとき、香港系の参加者から「東洋文化から西洋文化へのアダプトが難しい」「香港が恋しい」という声が続出していたのを覚えている。BNO ビザ所持者の中には、英国に馴染めず、日本など東洋の国に再移民する人もいるようだ。そんな香港移民にとって西洋の中の「リトル香港」——たとえ歴史的に重要な場所ではあるが今や香港移民は少なくとも、香港料理店が数件あるだけでも、香港移民以外にとっては普通の郊外の街だったとしても、インターネット上の言説の域を出ないのであったとしても——の存在は、大きな力となることに違いない。それが、香港移民たちがオンライン空間で「リトル香港」の言説を生み出す原動力の一つであると言えるのではないだろうか。

近年のエスニック都市空間研究では、特定のエスニック集団が集住すること自体が、その集団のエスニシティに彩られた都市空間を自動的に生み出すわけではないと考えられている。むしろ、ある都市空間に対して多様な主体が特定のエスニック集団を想起させるイメージを投影し、それが反復され固定化される過程を通じて、「そのエスニック集団の街」として表象される都市空間が成立するという理論的枠組みが、現在では主要なパラダイムとなっている⁶。これまでの研究では、行政が地区管理の正当化を目的として、当時ネガティブなイメージが強かった「中国らしさ」を投影した結果「チャイナタウン」が成立した19世紀のカナダの例 [Anderson 1989] や、再開発の主体がスラム排除を目的として「日本らしさ」を投影し、「ジャパントウン」を成立させた20世紀中頃のアメリカの例 [杉浦 2007] など、権力を持った主体がエスニック都市空間を成立させるメインアクターである事例が多かった。一方で本稿のロンドン郊外における事例は、少なくとも現地の言語景観と一致するわけではない「香港らしさ」のイメージを、英国への移住に関する不安

⁶ エスニック都市空間の成立と移民の集住状況が必ずしも一致しないことは、Ealham [2005] が示した中国人が一人もいない地区にチャイナタウンが成立した例に端的に示される。

を少なからず有する香港移民たち自身がインターネット上で拡散し、草の根からの投影で「リトル香港」を成立させているケースであるのかもしれない。

ふと、サットンのパブに居た男を思い出す。彼の大演説もまた、「リトル香港」の賜物なのだろうか。

参照文献

愛みち子 2016 「国籍——香港をめぐる国際関係と国籍ショッピング」 吉川雅之・倉田徹 編『香港を知るための60章』明石書店、pp.93-97。

王維 2013 「ロンドン・チャイナタウンの文化空間——他の地域との比較の視点から」『香川大学経済論叢』85(4) : 103-150。

杉浦 直 2007 「サンフランシスコ・ジャパントウン——再開発の構造と建造環境の変容活動主体間関係に着目して」『季刊地理学』59 : 1-23。

Anderson, K. J. 1987 The Idea of Chinatown: The Power Place and Institutional Practice in the Making of a Racial Category. *Annals of the Association of American Geographers* 77(4): 580-598.

Daily Mail. 2025. Little Hong Kong in the West Midlands: How thousands of families are flocking to Solihull... and why it's sending house prices SOARING. <https://www.dailymail.co.uk/news/article-14247751/Little-Hong-Kong-West-Midlands-thousands-families-flocking-Solihull-sending-house-prices-SOARING.html> (2025年11月7日閲覧) .

Ealham, C. 2005 An Imagined Geography: Ideology, Urban Space, and Protest in the Creation of Barcelona's 'Chinatown', c.1835-1936. *International Review of Social History* 50(3):373-397.

Esquire Hong Kong. 2021. 移民英國——熱門移民地點倫敦南部 Sutton 真係幾乎無得輸？移民決定務必留意的事情 <https://www.esquirehk.com/money-investment/move-to-uk-london-sutton> (2026年1月19日閲覧) .

Nunn, J. 2024. Vittles Reviews: A Restaurant in Diaspora. <https://www.vittlesmagazine.com/p/vittles-reviews-a-restaurant-in-diaspora> (2025年11月7日閲覧) .

Home Department. 2020. Hong Kong British National (Overseas) Visa policy

statement (plain text version).

<https://www.gov.uk/government/publications/hong-kong-bno-visa-policy-statement/hong-kong-british-national-overseas-visa-policy-statement-plain-text-version> (2025年11月7日閲覧) .

—— 2025. How many people come to the UK via safe and legal (humanitarian) routes? <https://www.gov.uk/government/statistics/immigration-system-statistics-year-ending-june-2025/how-many-people-come-to-the-uk-via-safe-and-legal-humanitarian-routes> (2025年11月7日閲覧) .

Li, W. 1998. Anatomy of a New Ethnic Settlement: The Chinese Ethnoburb in Los Angeles. *Urban Studies* 35(3): 479–501.

London Remembers. 日付不詳 Chinese lions.

<https://www.londonremembers.com/memorials/chinese-lions> (2025年11月7日閲覧) .

Your Local Guardian. 2025. Sutton ‘history’ by electing first ever councillor from Hong Kong. <https://www.yourlocalguardian.co.uk/news/25088372.sutton-history-electing-first-ever-councillor-hong-kong/> (2026年1月19日閲覧) .

YouTube. 2025. Sutton 香港.

https://www.youtube.com/results?search_query=sutton+%E9%A6%99%E6%B8%AF (2025年11月7日閲覧) .

Zelinsky, W. & Lee, B. A. 1998. Heterolocalism: An Alternative Model of the Sociospatial Behaviour of Immigrant Ethnic Communities. *International Journal of Population Geography* 4(4): 281–298.

備考：本稿は JSPS 科研費 JP24KJ1856 の助成を受けたものです。

(じんぐうじ・こういち 東京都立大学大学院)

沖縄の宗教空間における雰囲気

—天尊廟を事例として

郝 雅楠

一 はじめに

本稿は、2025年2月に沖縄県那覇市の天尊廟を訪れた際の巡検における観察と、関連する文献資料の検討をもとに、その空間のあり方について考察するものである¹。天尊廟は、中国由来の神々を祀る場として知られているが、実際に訪ねると、線香の匂いや参拝の賑わいは乏しく感じられ、極めて静かな空間として立ち現れる。近年の宗教人類学では、宗教を信仰や教義の体系としてではなく、身体や物質、空間を通じて経験される雰囲気として捉える視点が重視されている [e.g. Engelke 2012 ; Gregersen 2021, 2024]。本稿ではこの視点に立ち、天尊廟という場において、物の配置や管理のあり方が、訪問者にどのような宗教的理解をもたらしているのかを検討する。とくに、台湾および中国大陸からの来訪者の語りに注目しながら、同じ神像が異なる神として理解される状況を手がかりに、宗教的雰囲気のある方について初歩的に考察したい。

二 天尊廟の歴史と位置づけ

天尊廟（天妃宮・関帝廟・龍王殿）は、沖縄県那覇市若狭地区に位置し、中国系移民の歴史と深く結びついた宗教空間である。天尊廟は、琉球王国期に中国の明の永楽年間（1403–1424年）の福建地方から渡来した久米三十六姓の人々が中国で信仰していた神を祀った廟である。天尊廟に祀られている九天応元雷声普化天尊²は、このような中国由来の道

¹ 本稿は、2025年2月に海域アジア・オセアニア研究プロジェクト経費で実施した、沖縄への訪問の成果によるものである。2025年2月2日から7日にかけて、河合洋尚、郝雅楠、侯建衛、遠藤なつめの4人で、沖縄県を訪問した。

² 九天応元雷声普化天尊は、一切の雷関係の神のうちで最高位に位置している。そのため、三清境に住み、九鳳丹霞の衣をまとい、金光明の如意をもっている。ある説によれば玉清真王の化身ともいわれている。そして、生あるものすべての父であり、万霊の師であるから、天の災難や幸福、人間たちの生殺をつかさどり、生成のかぎを握っている。したがって、上は天の皇帝から下は地獄の長官にいたるまで、九天応元雷声普化天尊の承認がなければ政令を執り行なうことができない [窪 1996 : 150-151]。

教的宇宙観において、雷部を統轄し、生死・禍福・政令の最終的承認権を持つ高位神である。1897年の琉球併合（沖縄県設置）後には、境内に上天妃廟、下天妃廟、関帝廟、龍王殿の神像が合祀された。1910年天尊廟は社寺と同様に沖縄県から久米村人有志39名に無償で下付された。その後は久米村の有志で管理されると記載された〔伊良波 2024：6〕。当時の天尊廟について、1920年代、伊東忠太と鎌倉芳太郎により、天尊廟に対する建築および美術調査が行われた。



図1 戦前の天尊廟の神壇（鎌倉芳太郎撮影〔伊良波 2024：7〕）

図1で示したように、戦前の天尊廟の神像配置について、伊東は以下のように記録した。

内部の奥に、中央に天尊、その右に天妃、左に関帝が祀つてある。天尊は中心に本尊、左右は脇侍、前に左右相對して二対の侍神が立って居り、合計七軀が一群をなして壇上に安置される。壇の下に雷公が天尊に向かって立ち、一對の麒麟が狛犬の位置に据ゑられて居る。賽者が運命を占ふ為に用ふる木瓜もある。総ての調子が全然支那式で、自分は今や漢土に居るやうな気分である〔伊東 1942：101-102〕。

また、伊東は天尊廟で調査した時、当時の参拝者の姿も記録した。

三人の土地の婦人が参詣に来た。〔中略〕やがてその中の一人が、一束の線香に火を

点じ、何やら口の中で唱へながら線香を上下左右に静かに動かすと、他の二人は之に従って黙禱を捧げるかのやうに見へる。〔中略〕私は支那でしばしば廟祀に祈禱を捧げる者を見たが、その作法は彼此よく似て居るやうに思ふ〔伊東 1942 : 104-105〕。

伊東の記述が伝えているのは、単なる神像配置と参拝行為の情報ではない。そこから浮かび上がるのは、戦前の天尊廟が、視覚的および空間的にきわめて強い宗教的雰囲気を用意した場であったという点である。天尊を中心に複数の神々が一体の群として配置され、その前で線香を焚き、身体の動きとともに祈りが行われていたことは、視覚、匂い、動作が重なり合うことで、参拝者を自然に宗教的な感覚へと導く環境が整えられていたことを示している。伊東が「今や漢土に居るやうな気分」と表現したのも、このような配置が、視覚、匂い、象徴的秩序を通じて、中国由来の道教を即座に体感させる雰囲気を生み出していたことを示している。すなわち、戦前の天尊廟においては、神々の位階や意味が説明されなくとも、空間と行為そのものが「ここは拝む場べきである」という感覚を来訪者に共有させていたのである。

しかし、沖縄戦の影響を受け、天尊廟での神像がすべて焼失した。1975年、久米崇聖会によって旧来の地に天尊廟が再建された。その後、再建された廟は老朽化のために取り壊された。2014年から天尊廟は境内にある旧孔子廟の建物に安置されている。現在、九天応元雷声普化天尊に加えて、天尊廟には関聖帝君³（関帝）、天上聖母（媽祖）⁴、龍王といった中国系の神々が同時に祀られており、その神格配置自体が、東アジア海域世界における航海・商業・軍事・救済といった複合的实践と対応している。那覇市文化財保護専任主事を務めた伊良波賢弥は、近代天尊廟の空間と神像の変遷を考察する時、はっきり天尊廟は

³ 山西省運城市生まれの関羽は、字を雲長、神号を関聖帝君、略称関帝とする。関帝爺、山西夫子、伏魔大帝などともよばれる。関帝は武神であり、儒教神でもある。そのほか、財神、商売繁盛の神であるとともに、また、災難を予知する神、無礼を許さない神、誠をもって祈れば死者を蘇生させる神、地獄の長官、天神の南大門の守護神などさまざまな真神位でもある。東南アジアでは童乩（タンキー）に次ぐ神として信仰が厚い〔窪 1996 : 219-220〕。

⁴ 媽祖と通称されている天上聖母は、福建省莆田県の林愿の六女で、生まれても口をきかないので黙と名づけたが、道士がきて道を授けられ、それから神異をあらわした。莆田県地区には、船員や航海業者が多かったが、かれらはかれらなりの航海守護神をもっていた。ところが、かれらのなかに媽祖信仰がふえるとともに、その守護神と媽祖とが合体して、ついに媽祖が航海守護神とされるようになった。それからは、ますます媽祖についての伝記や伝説の内容が豊富になり、13世紀の後半ごろまでには中国の広い範囲に信仰が及ぶようになり、各地に媽祖廟が建てられた。福建の人々が海外に移住するにつれて、媽祖信仰もアジア各地に伝播していった。現在、日本や台湾などの媽祖信仰はそのころ伝えられた名残りである〔窪 1996 : 231-234〕。

「道教の神をまつわる廟」と定義した〔伊良波 2024、2025〕。

しかし、天尊廟の現代的な位置づけは、この道教的体系だけでは十分に説明できない。沖縄における天尊廟は、戦争による焼失と戦後の再建を経るなかで、宗教施設としての機能のみならず、民俗的聖地や中国系移民の記憶を表象する場としても再編成されてきた。先述した伊良波のような行政的な言説においては、天尊廟は道教の廟として説明されることが多いが、宗教研究および民俗学研究では、長年にわたる地域社会との関係のなかで、天尊廟は沖縄の土着信仰と中国由来の信仰が混濁した聖地へと変容してきたと理解されている〔e.g. 窪 1981；稲福 2021〕。窪徳忠は、沖縄における道教的神々への信仰について、それらが中国から伝来したものであることは確かであるものの、伝来以降今日に至るまで、道士が沖縄に定住して布教活動を行った事実はなく、道教の教団も形成されず、また中国本土のような道観が建立されたこともなかったと指摘する〔窪 1981：21-23〕。さらに、沖縄の天尊信仰についても「時代が下るとともに道教色はますます薄れ」と指摘する〔窪 1981：206-207〕。このような背景にもかかわらず、沖縄では中国的な習俗が見られると、それらを一様に道教と結びつけて理解してしまう傾向がいささか強すぎるのではないかと、窪は指摘している〔窪 1981：22〕。

そのほか、稲福政齊は天尊廟での参詣者の具体的な作法を以下のように記していた。

参詣者は、ほぼ例外なくヒラウコー（沖縄独特の黒い板状の線香）やビンシー（酒、米などをおさめた箱型の祭祀道具）などを供え祈願を行うが、これは中国の道教や儒教の祭祀とは全く異なる、純然たる沖縄の民間信仰の供物の形であり、この点から見ても、一般の人々は天尊廟や天妃宮に対して、古くからの久米村の民間信仰の聖地という程度の認識しかなく、道教という特定の宗教施設とは考えていないことが十分うかがえる〔稲福 2021：36-37〕。

さらに、管理主体である久米崇聖会の実践も、この曖昧な位置づけを強化している。まず、久米崇聖会自体は古くからの久米村人の子孫によって構成され、特定の宗教を奉ずる宗教的な組織とは考えられていない一般組織であると指摘される〔稲福 2021：37〕。同会は天尊廟を宗教施設として維持する一方で、周年行事や地域的記念行事の場としても活用しており、太鼓の演奏や地元小学校の合唱など、宗教色の薄い催しがここで行われるこ

ともある⁵。こうした運用は、天尊廟を単なる信仰の場ではなく、中国系移民の歴史と地域の記憶を交差する文化的拠点として位置づける実践であると同時に、宗教的实践を制度的に希薄化させる効果も持つ。

このように、天尊廟は、①道教的体系に基づく宗教施設、②沖縄の土着信仰と中国由来信仰が交差する民俗的聖地、③地域史を表象する文化遺産的空間という三つの枠組みのあいだに置かれている。この重層的かつ不安定な位置づけこそが、後述するように、天尊廟における宗教的雰囲気生成を困難にし、来訪者の宗教的理解を分岐させる制度的条件となっている。

三 空間の設えと雰囲気

筆者は、2025年2月5日から7日にかけて、沖縄県那覇市に所在する天尊廟を訪れ、巡検を行った。天尊廟が所在する若狭地区は、多様な宗教的空間が集中する地域である。波上宮や護国寺と並んで位置する天尊廟は、比較的特別な存在である。天尊廟は午前9時から午後5時まで無料で開放されている。写真1および写真3が示すように、天尊廟の正門や石垣には首里城にも見られる沖縄の建築様式が用いられている。また、写真2の配置図に提示したように、境内には天尊廟のほか、程順則頌徳碑、蔡温頌徳碑、ならびに久米崇聖会の事務所が設けられている。



写真1 波の上通り沿いにある天尊廟の正門（2025年2月5日、筆者撮影）

⁵ 久米崇聖会ホームページ「天尊廟・天妃宮 600年祭のご案内」<https://kumesouseikai.or.jp/news/205>
2025年12月30日最終閲覧



写真2 天尊廟の境内の配置図 (2025年2月5日、筆者撮影)



写真3 天尊廟正門にある紹介欄 (2025年2月5日、筆者撮影)



写真4 天尊廟敷地内の全体の様子（2025年2月5日、筆者撮影）

写真4のように、天尊廟に足を踏み入れたとき、まず印象づけられるのは、その静けさと空間的な広がりである。正門をくぐると、広い芝生の空間が現れ、その中央に赤い屋根を持つ建物がぼつんと建っている。これは旧孔子廟の建物であり、今は天尊廟・天妃宮・関帝廟・龍王殿が中に安置されている。この建物は周囲の空地から切り離されるように配置されており、参拝者が自然に引き寄せられる境内というよりも、むしろ広い空間の中に展示物として置かれているかのような印象を与える。

建物の内部に入ると、その空間的な印象はいっそう顕著に感じられる。図2に示したように、正面に本尊として天尊が祀られ、左側には関帝と龍王、右側には天上聖母が配置されており、それぞれに小さな神像が安置されている。しかし、これらの神像はいずれも高い柵によって囲われており、参拝者が神像に近づくことができない。柵の外側から身を乗り出して覗き込まなければ、神像の表情を観察することは困難であり、身体的な距離がそのまま神との距離として経験される構造になっている。

また、それぞれの神像の前には供え台が設けられ、蝋燭や香炉が置かれているものの、いずれも火は灯されておらず、線香も焚かれていない。

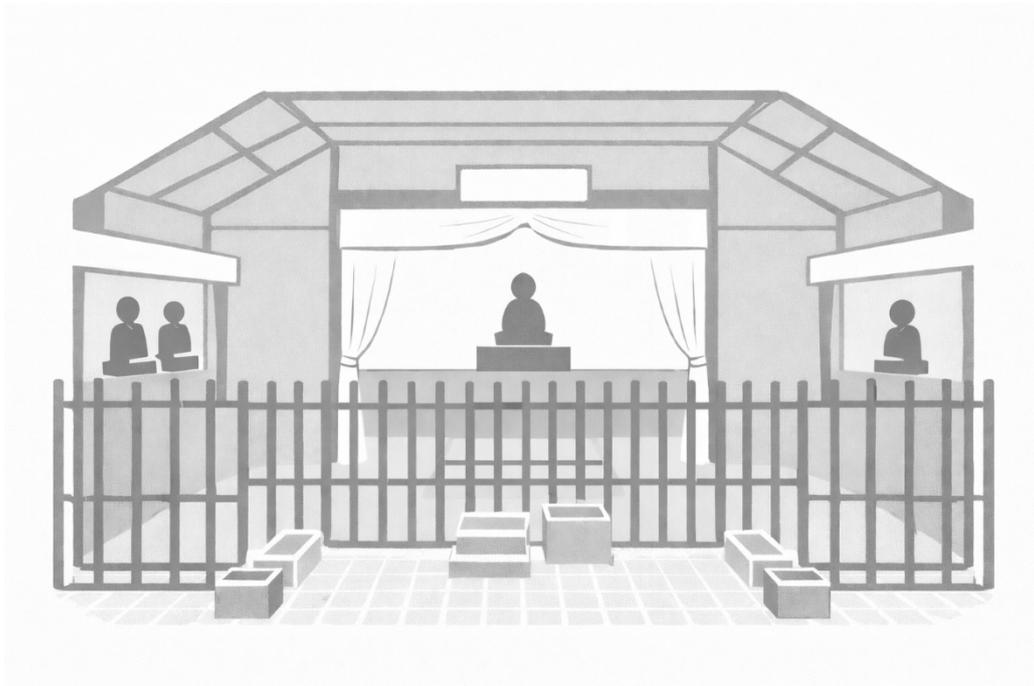


図2 建物の内部のイメージ図（筆者作成）

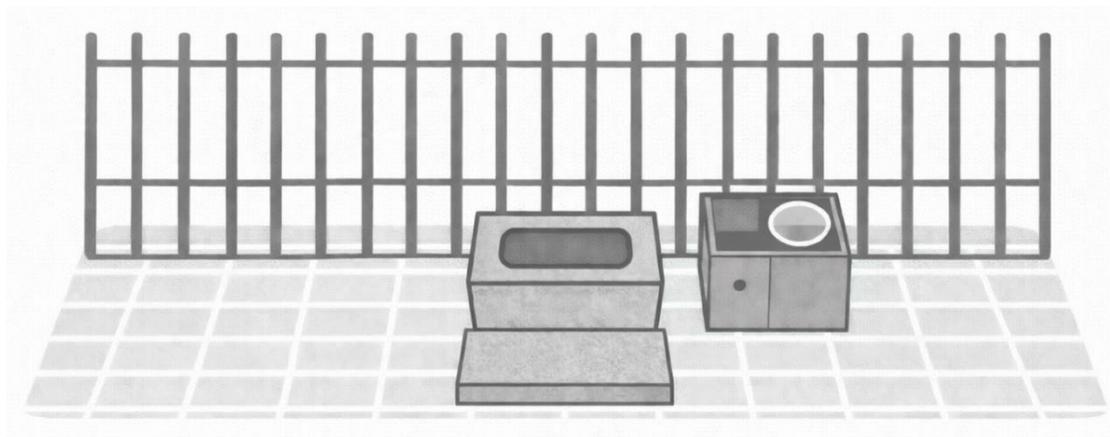


図3 石の線香台と沖縄式の賽銭箱（筆者作成）

また、図3のように、高い柵の外にも石製の線香台と沖縄式の賽銭箱を設ける。しかし、同時に火気厳禁と書かれた標識もある。そのため、一般的な中国系の廟に特徴的な香の匂いや煙の揺らぎは存在せず、空気は無臭で、ひんやりと静止している。この無臭で静的な空間は、祈りや供養によって立ち上がるはずの宗教的な雰囲気をも弱め、むしろ展示空間や資料室のような感覚を来訪者に与える。

筆者が2月7日午前、巡検の際に久米崇聖会事務所の関係者から受けた説明によれば、柵の外側に設置されている香炉台は、線香に火を点けずに、そのまま整えて香炉の上に置いて参拝するためのものであるという。一般的な日本線香と沖縄式線香（ヒラウコー）のいずれも使用可能とされている。また、隣に設置された賽銭箱の右側には、米や酒を供えて参拝することができるようになっている。

さらに、この廟には、どの神が祀られているのか、どのような順序で拝むべきかといった点を示す具体的な説明や案内はほとんど見当たらない。参拝方法や神の由来が可視化されていないため、この場所が拝む場なのか、それとも見る場なのか、その性格は曖昧なまま来訪者に委ねられている。このような情報の欠如もまた、宗教的雰囲気を支える枠組みを不安定なものにしている。

以上のように、天尊廟の空間は、柵、無火の蠟燭、線香の不在、そして説明の欠如といった物質的・制度的な設えによって構成されている。これらの要素は単なる管理上の細部ではなく、来訪者がこの場所をどのような宗教空間として感じ取り、理解するのかを方向づける重要な条件として機能しているのである。

四 久米崇聖会と観光客の認識ずれ

前節で見たような空間の設えのもとで、来訪者はそれぞれの宗教的記憶や経験を手がかりに、この場を解釈しようとする。以下では、台湾および中国大陸からの来訪者の語りを通じて、そうした認識のずれがどのように生じているのかを検討する。



写真 5 中国大陸からの観光客が天尊の前に祈る（2025 年 2 月 6 日、筆者撮影）

2025 年 2 月 5 日、台北在住の L さん（60 代、男性）が柵の前で立ち止まり、神像を見つめていた。L さんは、柵越しに神像を見ながら、どの神に、どの順番で拝めばよいのかわからない様子でもあった。しばらくして彼は両手を合わせ、まず天尊の神像に向かって目を閉じて拝礼した。続いて身体を左に向け、関帝の前で再び目を閉じて拝み、さらにすぐに右へと向きを変えて天上聖母に礼拝した。最後にもう一度向きを変え、龍王の前で拝礼を行った。筆者は、L さんがこのような順番で参拝を行ったことに着目し、本人にその理由を尋ねた。すると L さんは、台湾では神々の位階には輪番制のような考え方があり、その年ごとに中心となる神が変わるという見方があると説明した。たとえば 2025 年は関帝⁶の年であるため、中央の玉皇大帝に拝礼した後、まず関帝を拝み、その後に媽祖や龍王を拝むのだという。すなわち、神々の身分に応じて参拝の順序を決めているのである。

L さんの事例からは、天尊廟内に祀られている神の身分や神格についての説明や位牌がほとんど提示されていないために、L さんが天尊を玉皇大帝として誤認していたことが分かる。この点について窪は、現在の台湾では、五雷元帥、雷神爺などとよばれている雷公を主尊とする廟はあっても、九天応元雷声普化天尊を主尊とする廟はみあたらない。その職能が、それぞれ他の神々に分化されてしまった結果かもしれないと述べる [窪 1996 :

⁶ 台湾や香港の一部では、玉皇について関帝が最高位の神になったと信ぜられている [窪 1983 : 59]。

150-151]。また、参拝の順序についての案内も存在しないため、Lさんは台湾における参拝習慣にもとづいて、この天尊廟の空間を解釈しながら拝礼を行っていたのである。

その後、筆者は続いて訪れたLさんの妻に対しても、天尊廟について聞き取りを行った。しばらく沈黙した後、Lさんの妻、Cさん（60代、女性）は首をかしげながら次のように語った。

正直に言うと、ここの廟は、台湾の廟とはまったく雰囲気（*fenwei*）が違いますね。台湾の廟には、このように高い柵が設けられていることはありません。このような柵があったら、どのように神様に近づけばよいのでしょうか。線香も焚けませんし、匂いもありません。座布団もありません。ここは「廟」という名前が付いていますが、廟らしい感じがまったくしません。

このような印象はCさん一人に限られるものではない。巡検中に筆者は台湾出身者に加え、中国大陸からの来訪者にも短時間の聞き取りを行い、とくに、天尊廟の雰囲気についておおむね同様の評価を示していた。

また、「この空間に祀られている神々は誰だと理解しているのか」という点に関して、2025年2月6日、筆者が話を聞いた中国大陸からの観光客の多くも、Lさんの事例と同様に、天尊廟の中心に祀られている天尊を、道教の玉皇大帝として理解していた。さらに、北方出身の中国大陸からの来訪者の間では、右側に祀られている天上聖母を王母娘娘⁷として捉える例が多く見られた。

例えば、2月6日の午後、北京から観光で訪れていた40代の女性Mさんは、同行者とともに天尊廟に足を踏み入れると、まず各神像の上方に掲げられている扁額を見上げた。彼女は、中央に掲げられた「天尊廟」と書かれた扁額と、右側に掲げられた「天上聖母」と記された扁額を指さしながら、同行者に向かって「この天尊はおそらく玉皇大帝でしょう。天上聖母はきっと王母娘娘ですね」と語った。

このような理解は、来訪者の側の知識や宗教経験のみによって生じているわけではない。二階堂善弘は、現在天尊廟に祀られている天尊像について、戦前の天尊像や明清時代中国

⁷ 「王母娘娘」は民間において親しみを込めて用いられる俗称であり、正式には西王母と称される。また、九靈太妙龜山金母、太靈九光龜台金母、瑤池金母などの別名を持ち、金母元君とも呼ばれる。男仙を司る東王父に対置される存在として、女仙を統括し、龜山の崑崙玄圃にある宮殿に住むとされている〔窪 1996 : 147-148〕。

における道教神像との比較を通じて、「やや普化天尊としての特色が見えにくい面があるかもしれない。現在の像を玉皇大帝あるいは東華帝君と称しても、違和感が無いほどである」と指摘している〔二階堂 2008:30〕。また、媽祖信仰についても、中国北方では比較的影が薄く、主に南方の沿岸地域に廟が集中している一方で、南中国一帯では最も広く知られた神の一つであることが指摘されている〔二階堂 2008:28〕。この点を踏まえると、北方出身の来訪者が天尊廟における天上聖母を王母娘娘として理解する傾向も、地域的な信仰経験の差異にもとづく理解の延長として捉えることができる。

このような語りが見えるように、神格や機能を示す説明が廟内にほとんど掲示されていないため、来訪者は神像の位置や外見、そして自らの知識にもとづいて、神を読み替えていると考えられる。

天尊廟では、このように同じ神像が台湾出身者と中国大陸出身者とで異なる神として理解されている。しかし、本稿の事例が示唆しているのは、このずれを単に知識の違いとして理解するだけでは十分ではない、という点である。柵によって隔てられ、香も焚かれず、説明も与えられないこの空間においては、どの神が誰であるのかを共有するための感覚的・実践的な枠組みがこの空間では十分に形成されていない。その結果、来訪者はそれぞれの宗教的経験にもとづいて、この場を解釈し直すほかなくなっているのである。

五 考察

前節で見たように、天尊廟では、中国大陸出身者と台湾出身者が、同じ神像を前にしながらも、それを異なる神として理解していた。このずれは、一見すると知識や宗教伝統の違いに由来するよう見える。しかし、本稿で取り上げた事例が示しているのは、こうした認識の分岐は、来訪者の側だけに帰されるものではなく、少なくとも本稿の事例からは、天尊廟という空間の雰囲気はその理解のあり方に一定の影響を与えている可能性が示唆される。

近年の宗教人類学においては、宗教は教義や信仰体系として存在するのではなく、光、音、匂い、身体の動き、物の配置といった感覚的・物質的要素の編成を通じて経験される環境として立ち上がると考えられている。たとえば、グレガーセンの夜間教会の雰囲気をめぐる研究では、薄暗い照明、響く音楽といった要素が、信仰を持たない人びともにも宗教的な感覚を喚起する媒介として機能していることが示されている〔Gregersen

2021, 2024]。そこでは、宗教的な意味は説明される以前に、まず雰囲気として身体に働きかけるものとして経験されている。

これに対して、天尊廟の空間は、柵によって神像と来訪者が物理的に隔てられ、線香の匂いもなく、参拝の動線や順番を示す手がかりも欠いた状態にある。その結果、この場にはここで何が宗教として行われているのかを共有する感覚的な枠組みが、この空間では十分に形成されていない。宗教的雰囲気が十分に立ち上がらない空間においては、神の存在もまた自明なものとして感じ取られることがなく、来訪者は自らの記憶や知識にもとづいて神像を解釈し直すことになる。この意味で、天尊廟における神の誤認は、単なる理解の誤りではなく、雰囲気が十分に立ち上がらないことによって生じている現象として捉えることができる。台湾の来訪者が台湾の廟の実践を基準にこの場を読み取り、中国大陸からの来訪者が玉皇大帝や王母娘娘という既存のイメージを当てはめるのは、天尊廟が宗教的意味を感覚的に方向づける環境を十分に提供していないからにほかならない。

さらに、この雰囲気的不安定さは、天尊廟の制度的な位置づけの曖昧さとも深く結びついている。前節で述べたように、天尊廟は、宗教施設、民俗的聖地、文化遺産的展示空間という複数の枠組みのあいだに置かれており、管理主体もまた、この場を一義的に拝む場として整備しているわけではない。その結果、宗教的实践を支える物質的・感覚的装置が顕在化されず、空間は展示空間としての性格を部分的に帯びた状態にある。このように見ると、天尊廟で生じている宗教的理解の分岐は、個々の来訪者の文化的差異だけではなく、宗教的雰囲気が一義的に定まらない空間編成の帰結として理解することも可能である。雰囲気が共有されないうち、神もまた共有されず、それぞれの想像のなかで別々の姿をとるのである。

六 おわりに

本稿では、沖縄県那覇市の天尊廟を事例に、この場の雰囲気が来訪者の宗教的理解にどのように関わっているのかを見てきた。天尊廟は、中国由来の神々を祀る場でありながら、柵や無火の蠟燭、香の不在、説明の欠如といった空間の設えによって、中華圏の一般的な廟宇に見られるような参拝の感覚が立ち上がりにくい場所となっている。その結果、この場を訪れる人びとは、台湾や中国大陸での宗教的経験をもとに、それぞれ異なる神の姿をこの空間に読み取ることになる。同じ神像の前に立ちながらも、そこに見える神は一つで

はなく、むしろ雰囲気十分に共有されないことによって分岐していく。

天尊廟は、宗教施設であると同時に、民俗的聖地や中国系移民の記憶を表象する場所としても維持されている。その多義的な位置づけのなかで、この場は拝む場と見る場のあいだにとどまり続けている。静かに感じられるこの空間のあり方そのものが、天尊廟が置かれている現在の状況をよく物語っていると言えるだろう。

ただし、本稿では主として中国大陆および台湾出身の来訪者の経験に焦点を当てたため、沖縄在地の参拝者がこの空間をどのような宗教的雰囲気として経験しているのかについては十分に扱うことができなかった。今後はその視点を含めた比較的検討を進めることで、天尊廟をめぐる雰囲気の多層性をより立体的に描き出していきたい。

謝辞

本稿は、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの研究経費による巡検および文献資料の検討を通じて得られた知見をもとに執筆したものである。現地の巡検および見学に際しては、久米崇聖会の方々より多大なご協力を賜り、天尊廟に関する基本的なご説明をいただいた。ここに記して、心より感謝申し上げたい。

参考文献

- Gregersen, A. M. 2021 Exploring the Atmosphere Inside a Liturgical Laboratory. *Material Religion* 17 (5): 627–650.
- 2024. Religion as Atmosphere: The Material Mediation and Aesthetical Ambiguity of a Contemporary Night Church Atmosphere. *Material Religion* 34 (3): 348–372.
- 伊東忠太 1942『琉球 建築文化』東峰書房。
- 伊良波賢弥 2024「近代の天尊廟と神像の移徙」『チーシンブー』12 : 3-15。
- 2025 「近代沖縄における道教廟の合祀と祭具の変遷」『歴史民俗資料学』2 : 92-110。
- 稲福政斉 2021「久米至聖廟、久米崇聖会とその活動に対する一般的な認識について—主として民俗学的見地から」『チーシンブー』10 : 30-40。
- 2024a「沖縄における天妃信仰—上下両天妃宮とその祭祀の変遷を中心に」『チーシンブー』12 : 17-32。

—— 2024b 「沖縄における関帝信仰—関帝廟とその祭祀の変遷および民間における関帝信仰をめぐって」『チーシンブー』12 : 33-49。

—— 2024c 「沖縄における龍王信仰—龍王殿とその祭祀の変遷を中心に」『チーシンブー』12 : 51-63。

窪 徳忠 1981 『中国文化と南島』第一書房。

—— 1983 『道教百話—仙人へのあこがれ』世界聖典刊行協会。

—— 1996 『道教の神々』講談社。

久米崇聖会 100 周年記念史編集委員会編 2014 『久米崇聖会 100 周年記念史』一般社団法人久米崇聖会。

二階堂善弘 2008 「那覇久米村の天尊廟について」『アジア文化交流研究』3 : 25-32。

(かく・がなん 東京都立大学大学院)

景観の「原型」と「元」

—久米孔子廟の変遷について

侯 建衛

一 はじめに

私が沖縄に関心を抱くようになった契機は、泰山石敢当である。泰山石敢当とは、風水の実践であり、悪い「気」から人びとの生活空間を守護し、改善するために設置される石碑である（写真 1）。私は幼少期を中国河南省の農村で過ごしたが、建物の角や道の分岐点などに「泰山石敢当」と刻まれた石が置かれている光景を日常的に目にしてきた。そうした経験を背景に、約十年前、建築史家・郭湖生（1931–2008、東南大学元教授）が、文化・文明間の交流に鑑み、中国建築をよりよく理解するため、国境にとどまらない「東方建築史」という研究視座を提示した論考において、私は海を越えた沖縄にも泰山石敢当が存在することを知った〔郭 1992〕。その時、私はいつか沖縄を訪れ、現地での考察を行いたいと考えようになった。



写真1 沖縄の石敢当（2025年2月4日、筆者撮影）

さらに、2023年10月にオンラインで開催された石垣直氏による講演「琉球・沖縄における孔子廟・積奠の歴史と現在——東シナ海に浮かぶ『境界』という視点から」¹を拝聴したことをきっかけに、琉球王国／沖縄と明清王朝／中国との深い歴史的関係、ならびにそれが孔子廟をはじめとする景観形成に及ぼした影響に、いっそう関心を持つようになった。

2025年2月初頭²、私は「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」の一環として、那覇市において資料採取を行う機会を得た。期間が限られていたため、私は主に那覇市内の文化的景観——孔子廟、天尊廟、波上宮、福州園、首里城——を考察し、なかでも孔子廟（久米至聖廟）の景観的変遷に焦点を当てた。あわせて、那覇市歴史博物館、沖縄県立博物館、沖縄県立図書館を訪問し、関連資料の収集を行った。

私は『久米崇聖会100周年記念史』を閲覧する中で、「元の場所」「往時の規模」「曲阜と同じデザイン」「かつて久米の地にあった孔子廟を久米の地に」などの表現に強い関心を抱いた〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会（編） 2014：26-36〕。これらの言説が反復的に喚起する、時間的・空間的・文化的な意味での「元」とは何を指し、それはいかなる意義をもつのかを、改めて探究したいと考えるようになった。

本稿の目的は、久米孔子廟の景観的変遷を整理するとともに、現地の人びとが様式的な「原型」を通じて、歴史的・理念的な「元」にいかにかかわってきたのかを明らかにし、その意味を検討することにある。以下では、まず久米孔子廟の景観的変遷を概観したうえで、久米村の祖先およびその末裔による「元の配置」、「元の位置」、「元の景観要素」へのこだわりを類型化し、考察を行う。

二 久米孔子廟の変遷

まず、石垣直氏の関連論文〔石垣 2019、2020a、2020b〕ならびに那覇市歴史博物館および沖縄県立博物館の展示資料をもとに、日本・中国・琉球／沖縄の歴史的展開に即して孔子廟の歴史を整理すると、図1のようにまとめることができる。

¹ 参照：<https://www.maps.jinsha.tmu.ac.jp/activity/2023%E5%B9%B410%E6%9C%8827%E6%97%A5>
2025年12月21日閲覧

² 2025年2月2日から7日にかけて、河合洋尚、郝雅楠、遠藤なつめと私の4人で、各自が各々の関心テーマを持って沖縄で短期調査を行なった。

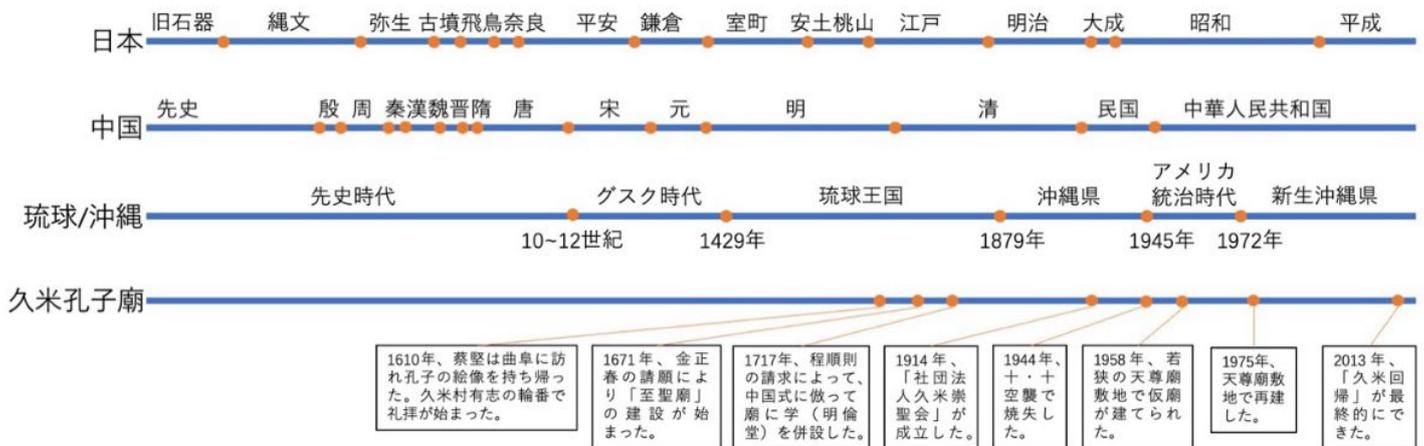


図1 中国、日本、琉球/沖縄と久米孔子廟の歴史の併置（筆者作成）

1368年に明王朝が成立し、1372年には明と琉球との間に正式な朝貢関係が確立された。1392年には、琉球側が明の首都（現在の南京）に置かれていた中央官学である太学（その隣に孔子廟が所在する）へ留学生を派遣するとともに、明に対して職能集団の琉球への移住を申請し、その許可を得た。同年、明の洪武帝の命により、いわゆる「久米三十六姓」が主として現在の福建省一帯から久米村地域へ渡来し、以後、両国間の外交や貿易などに従事することとなった。³

明にルーツを持つ「久米三十六姓」の末裔が、儒教に対して強い憧憬を抱いていたことは容易に想像される。1610年には、その末裔である蔡堅が明に朝貢した際、孔子像を持ち帰り、久米村士族が輪番でこれを祀っていた。1644年には、満洲族が明王朝を滅ぼして清王朝を成立させた。久米村に孔子廟が創建される契機となったのは、1671年に金正春が琉球国王に対して行った請願である。さらに、中国における「廟学一体」という伝統にならい、廟に学校（明倫堂）を併設する構想が実現したのは、1717年に程順則が行った請願によるものであった〔石垣 2019〕。

1879年、明治政府による廃藩置県によって琉球王国は沖縄県となり、久米孔子廟（至聖廟・明倫堂）も、動乱期を迎えることとなった。1914年には「社団法人久米崇聖会」が設立され、以後、久米孔子廟の日常的な管理および祭典の執行を担ってきた。1939年秋以降、東京の湯島聖堂に倣い、積奠は従来の中国式から「神式」へと改められた。1944年には、

³ 参照：
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B9%85%E7%B1%B3%E4%B8%89%E5%8D%81%E5%85%AD%E5%A7%93> 2025年12月21日閲覧

いわゆる十・十空襲によって久米孔子廟は全焼した。戦後は道路整備の影響により、旧地における孔子廟の再建は不可能となった。1958年には、廃墟となっていた天尊廟の敷地において、孔子廟の仮廟（正面幅2m・高さ1.5m・奥行1m）が、天尊廟および天妃宮の仮廟とともに建設された〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会（編）2014：43〕。1972年には、沖縄におけるアメリカ統治が終了した。1974年末には、旧天尊廟の敷地において、孔子廟が天尊廟および天妃宮とともに再建された。さらに、旧久米郵便局の移転を契機として、2013年には孔子廟が再び「久米の地」へと回帰することとなった〔石垣2019〕。

以上の整理から、久米孔子廟の位置（図2）および形態（図3）の変遷の脈絡が明らかとなる。



図2 久米孔子廟の位置変遷（Google map より筆者加工）

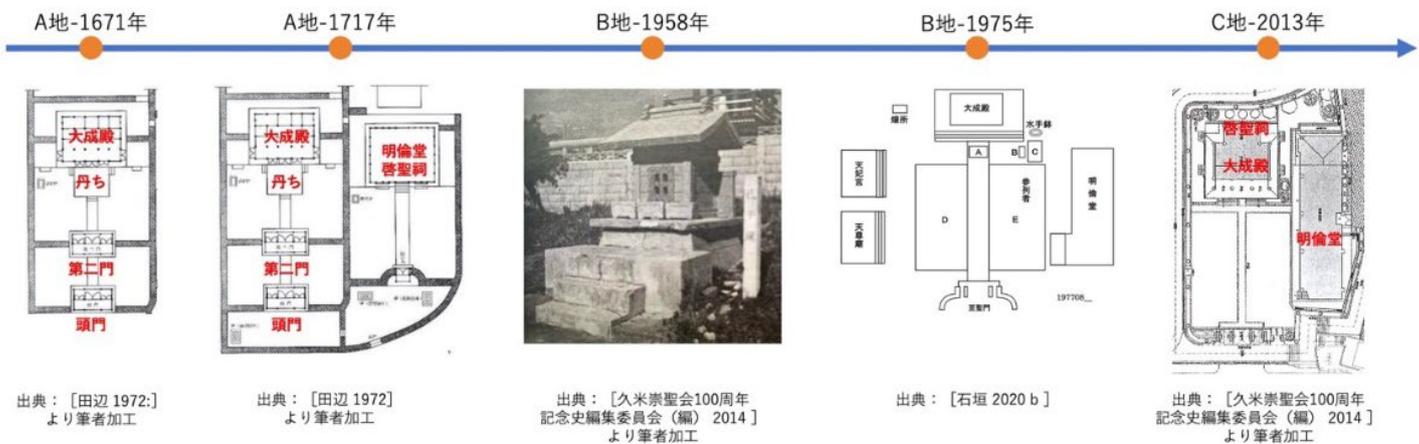


図3 久米孔子廟の形態変遷 (筆者作成)

三 久米孔子廟の「原型」と「元」

第二節では久米孔子廟の景観の変遷を整理したが、その形成要因については、なお十分に解明されているとは言い難い。すなわち、なぜ孔子の絵像を祀る状況から、国王への請願を通じて至聖廟の建立へと至ったのか、また、なぜ廟には必ず明倫堂という学校施設が併設されたのかという点である。さらに、戦後において「久米回帰」への強い希求が生じた背景はいかなるものであったのか、あるいは、至聖廟の大成殿に二本の龍柱を配し、その前方に「丹ち」という空間を明確に設けたのはなぜなのか、といった点も重要な問いとして残されている。河合洋尚は、このような「物的形態」をめぐる問いこそが、人類学において「景観」という概念を用いる最大の意義であると指摘する。そして、そうした景観の形成要因に迫るためには、微視的な行為主体中心のアプローチと、巨視的でグローバルな政治経済構造や視覚的イメージを統合した研究視点が必要であると提唱している [河合 2022]。

そこで以下では、配置・位置・景観要素という三つの側面から、久米孔子廟の景観的変遷を検討し、その過程において久米士族およびその末裔が、様式的な「原型」を通じて歴史的・理念的な「元」にいかにかかわってきたのかを分析する。

1 「元」の配置

1671年に創建された至聖廟は、大成殿を中心とする「廟」のみから構成されていた(図3)。では、この「二進院」と呼びうる二重構成の中庭型平面配置の原型は、いかなるところに求められるのであろうか。

1644年、中国では清王朝による統治が開始された。後に孔子廟の創建請願者となる金正春は、1646年に明の残存勢力である南明政権が福州に成立したことを慶賀するため、琉球使者として朝貢に赴いたが、滞在中に南明を制圧した清軍によって北京へ連行された。その後、金は数回にわたって清に朝貢しており、その際に北京の「国子監」(孔子廟と太学から成る教育・儀礼施設)を訪問した可能性が高いと考えられる。少なくとも、1421年に明の首都が南京から北京へ遷都して以降、琉球側はたびたび国子監へ留学生を派遣しており、1671年に孔子廟が建立される以前の段階で、過去の留学生たちはすでに国子監の平面的配置を十分に把握していたとみられる。1683年に来琉した清朝の冊封使・汪楫が「なぜ琉球に孔子廟が存在するのか」と問いかけたのに対し、久米村の人びとは、1669年に琉球使者が清朝へ朝貢した際、現地の孔子廟を訪れ、深い感銘を受けたことがその契機であると答えた[伊藤 2010]。一方、明朝から清朝にかけて、首都北京の国子監は一貫して「廟学一体」の構成をとり、その内部における孔子廟の配置も、常に「二進院」の形式を維持していた(図4)[沈 2010]。以上を踏まえると、久米至聖廟の創建に際しては、北京国子監の配置が、少なからず参照されたと推測することができよう。

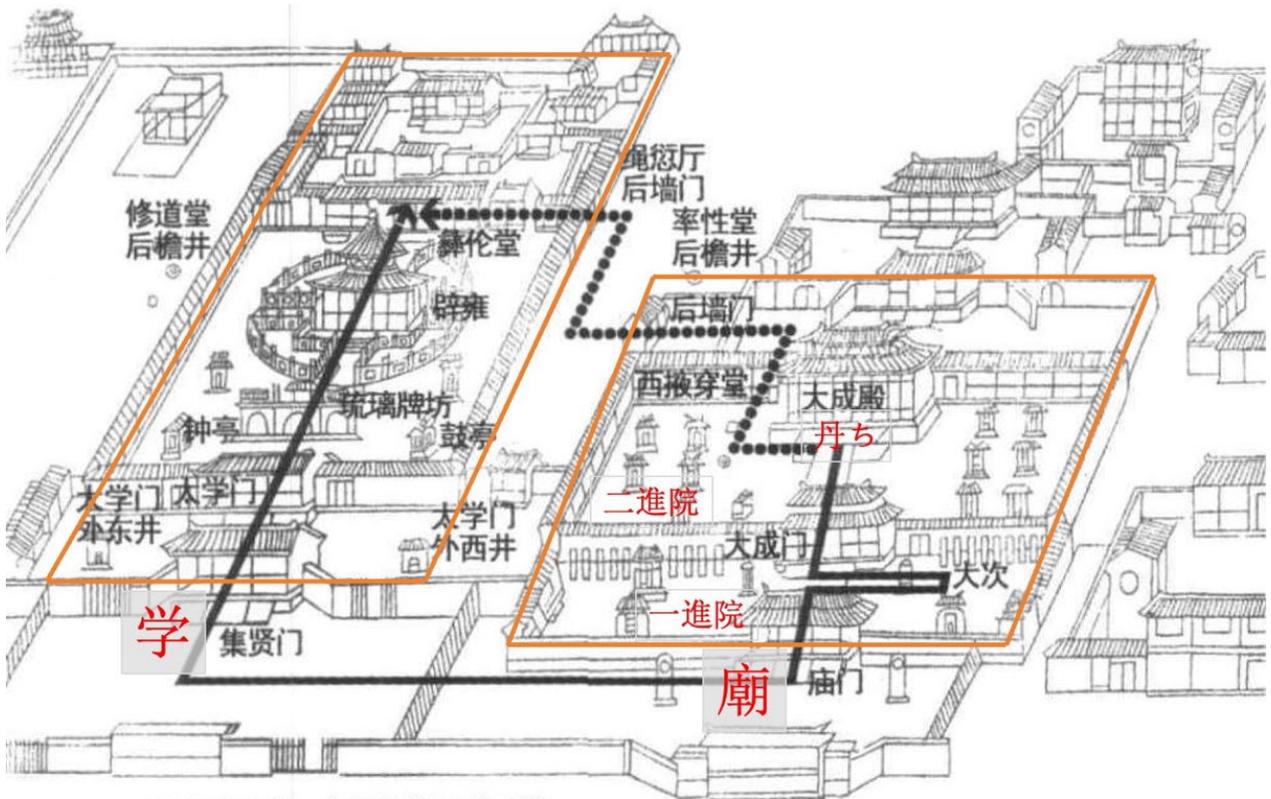


図4 清朝の北京国子監の配置（〔沈 2010〕より筆者加工）

では、1717年に至聖廟に学校が併設されるに至った要因は何であったのか。

その契機は、1683年に来琉した清朝冊封使・汪楫による提案に求められる。汪楫は海を越えた島嶼社会に孔子廟が存在することを不思議に思った一方で、そこに琉球の「中国化」、すなわち清朝天子の「徳化」が及んでいることに深い感銘を受けた。汪楫は、琉球におけるさらなる「徳化」を促進するためには、中国の伝統である「廟学一体」に倣い、孔子廟に学校を併設し、「礼制」（中央政権が規定する儀礼の制度）を完備することが必要であると提議した。その後、次回の冊封使の渡来までの間、清朝側に対して琉球の「徳化」の成果を示し、良好な朝貢関係を維持し政治的・経済的利益を獲得するため、1717年、程順則の請願によって、至聖廟の隣に「明倫堂」が設置された（図3）。これは、琉球における最初期の公立学校施設であった〔伊藤 2010〕。

戦後、仮廟期を除けば、孔子廟は二度にわたって再建されているが、そのいずれにおいても「廟学一体」という伝統的な配置は継承されてきた。ただし、図3に示すように、戦前には廟と学が二つの院に分かれて配置されていたのに対し、戦後の再建では、廟と学という二

つの殿堂が一つの院内に統合される形へと変化している。また、2013年に再建された孔子廟において啓聖祠が付設されたのは、2008年12月に崇聖会の理事らが台湾の台北および台中の孔子廟を視察し、大成殿の背後に啓聖祠が配置されている点を重視した緊急提言を行ったことが契機であった。しかしながら、台湾や中国大陸の孔子廟に見られるように、啓聖祠が独立した建物として大成殿の背後に設置されるという配置的「原型」と比較すると、久米孔子廟における啓聖祠の扱いは一貫して異なっている。すなわち、戦前の久米孔子廟では啓聖祠が明倫堂内部に設けられていたのに対し、現在の孔子廟では、その空間が大成殿の後ろに併設される形をとっている。

さらに、「丹ち」と呼ばれる空間も、形態を変えながら存続している。孔子および諸賢を祀る釈奠などの儀礼のため、中国では早くから大成殿の前面に「丹ち」と呼ばれる台状の空間が設けられてきた(図4にも丹ちを確認できる)。旧久米孔子廟においても、この伝統に倣って丹ちが設けられていた(写真2)。一見すると、現在の大成殿前には丹ちが存在しないように見える(写真3)。しかし、設計配置図(図5)を見ると、大成殿前の限られた空間が明確に「丹ち」と表記されており、私はこのことに違和感を覚えた。この空間は、建築学的には「軒下空間」と呼ばれるものである。にもかかわらず、配置図においては「丹ち」と表記されている。この表記の選択は、久米崇聖会の人々が共有する心象、あるいは「元」への強いこだわりを反映したものと言えらるだろう。



写真2 釈奠時の旧孔子廟の大成殿と丹ち (那覇市歴史博物館 提供)



写真3 現在の孔子廟（2025年2月3日、筆者撮影）

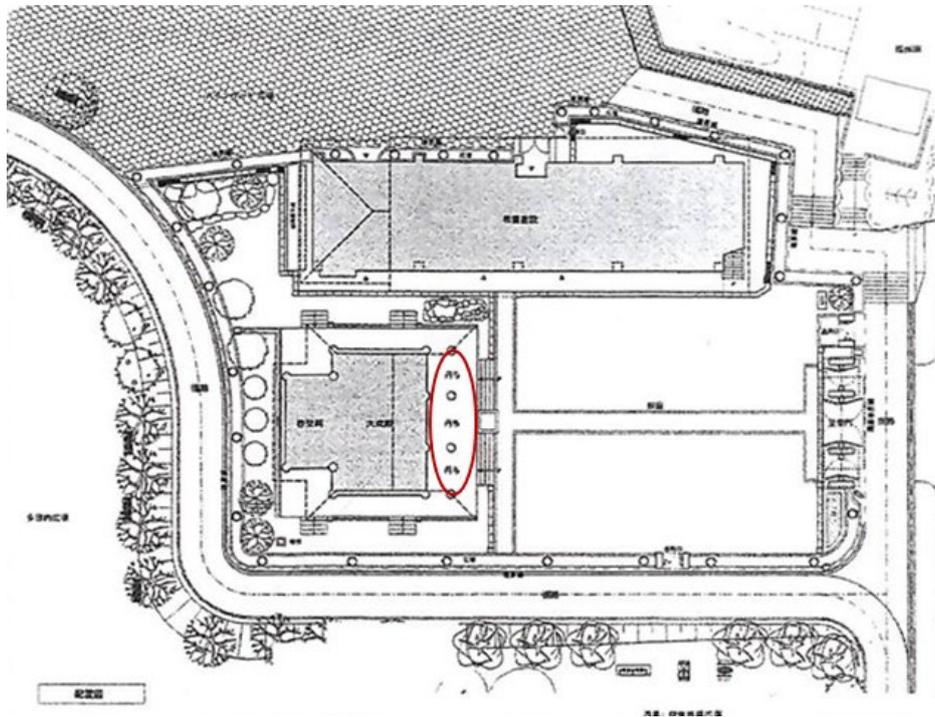


図5 「丹ち」という表記

（〔久米崇聖会 100周年記念史編集委員会編 2014：33〕より筆者加工）

厳密に言えば、かつての久米士族にせよ、今日の崇聖会にせよ、彼らが堅持してきたのは様式的な「原型」そのものではなく、「廟学一体」や「礼制完備」といった歴史的・理念的な「元」であったと言える。彼らによって建設されてきた孔子廟の平面的配置は、参照対象となった中国の伝統的配置をそのまま再現したものではなく、それと位相的な関係にあるものとして理解すべきであろう。

2 「元」の位置

図2に示すように、旧久米孔子廟（A地点）は、戦争や戦後の道路建設により、同一地点での再建が不可能となった。そこで、1963年の崇聖会理事会において、若狭に位置する天尊廟の敷地（B地点）での再建が計画され、1975年に落成した。しかしながら、道教施設である天尊廟および媽祖信仰の天妃宮との併存は必ずしも望ましいものとは受け止められておらず、加えて海岸に近い立地条件から建物の腐食が進みやすいという懸念もあった。そのため、久米の長老たちや関係者の間では、将来に「久米の地」への回帰が模索され続けていた〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会編 2014：26〕。

1999年、旧久米郵便局が他所へ移転した。その跡地は国有地であったが、歴史的には「久米の地」に属していた場所である。崇聖会はこれを「またとない機会」と捉え、「久米回帰」を実現するための動きを積極的に進めていった。最初に提出された要請書では、都市における自然環境や公園空間の必要性を訴えるとともに、「旧久米村を象徴する歴史的景観を有する都市公園」の拡張・整備が求められていた〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会編 2014：27〕。

では、なぜ「久米回帰」という特定集団の強い希求が、全市民を対象とする都市公園整備という形へと置き換えられたのだろうか。その背景には、当該跡地の土地所有権の問題があった。2000年から2010年にかけての約10年間、崇聖会、那覇市の行政部門、那覇市議会議員、さらには国の沖縄総合事務局財務部など、複数の主体のあいだで継続的な意見交換と調整が行われてきた。その過程において、作業の大きな部分を占めていたのが、土地の所有関係をめぐる調整であった。概略を述べれば、まず那覇市が国から当該地の所有権を取得し、これを都市公園用地へと転用したうえで、松尾公園の一部として当該地を位置づけた。その後、崇聖会は孔子廟を「教養施設」と位置づけ、当該地の無償使用を申請した。こうした一連の協議において、当初から繰り返し議論されてきたのは、孔子廟が宗教施設に該当するの

か否か、当該地の無償使用が妥当であるかという点であった [久米崇聖会 100 周年記念史編集委員会編 2014 : 27-32] 。

しかし、慎重に進められてきた土地の政治的・経済的関係をめぐる調整の紆余曲折の背景として、土地がもつ感情的・象徴的な意味を軽視することはできない。崇聖会の人びとにとって、孔子廟が回帰すべき「久米の地」とは、必ずしも歴史的な原点である A 地点に限定されるものではない。久米村への帰属意識、すなわちアイデンティティが共有されている限りにおいて、C 地点もまた「元」の地となりうるのである。

3 「元」の景観要素

琉球時代には朝貢や留学を通じて、また戦後以降は交流や祖先の痕跡をたどる営みを通じて、久米士族およびその末裔は、中国へと繰り返し足を運んできた。1610 年に蔡堅が孔子の絵像を持ち帰った事例に象徴されるように、現在の孔子廟においても、中国に由来する「元」の景観要素が、伝統的・正統的なものとして随所に取り入れられている。

たとえば、大成殿正面に立つ二本の龍柱や、正面階段中央に設けられた龍陛は、崇聖会の代表者が孔子の故郷である曲阜を視察し、曲阜孔子廟と同一のデザインおよび石材を採用したものである (写真 4)。積奠などの祭礼に用いられる重要な器具の多くも、中国大陸や台湾から調達されたものである。また、境内の一隅には一本の楷の木が植えられているが、その種子は曲阜の孔子廟に由来するものであると有意に伝えられている (写真 5)。その木の隣には、修復不能となった程順則揮毫の「中山孔子廟碑」が、残存する拓本や古文書をもとに復元され、設置されている。その石碑の側面には、以上の経緯が説明されている (写真 6) [久米崇聖会 100 周年記念史編集委員会編 2014] 。



写真4 大成殿正面の龍柱と龍陛 (2025年2月3日、筆者撮影)



写真5 曲阜の種子から生えた木 (2025年2月3日、筆者撮影)

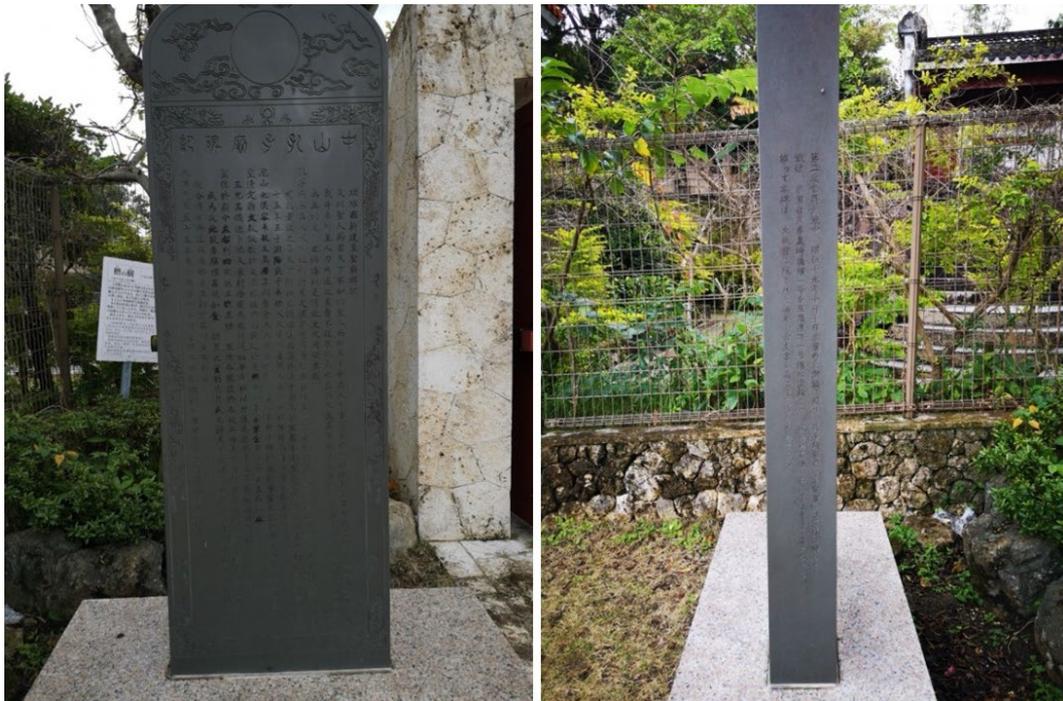


写真6 孔子廟碑の正面と復元の経緯を説明する側面（2025年2月3日、筆者撮影）

崇聖会の人々が、龍柱や龍陛、祭礼用器具、楷の木の種子といった景観要素を、あえて中国から輸入した背景には、儒教の「源」あるいは「元」への強いこだわりがあると考えられる。また、すでに消失した石碑をあらためて復元する行為も、久米孔子廟自身の歴史的な「元」を顕彰しようとする実践であると、筆者は捉えている。

四 おわりに：「元」とは何か

久米孔子廟の事例から明らかになるのは、現地の人びとが、単なる様式的な「原型」ではなく、歴史的・理念的な「元」へのこだわりを通じて、自らのアイデンティティを構築し、表明し、さらには強化してきたという点である。様式としての「原型」は、具体的な歴史的・社会的条件に応じて絶えず変化してきたが、歴史的・理念的な「元」が体现する「正統」や「伝統」への志向は、長期にわたって持続してきた。実際、建築史から見れば、中国における孔子廟の様式自体も、決して固定的なものではなく、時代ごとに変容を重ねてきたことが分かる。そこには中央と地方のあいだ、あるいは地方相互のあいだにおける差異も存在する。

しかしながら、「廟学一体」や「礼制完備」といった理念は、今日に至るまで一貫して影響力を持ち続けている。本稿において「元」というのは、まさにこのような理念的次元である。

波上宮や国際通りが多く観光客によって賑わいを見せるのに対し、孔子廟は相対的に静謐な空間である。このことは、「久米三十六姓」の末裔にとって、孔子廟の存在意義が観光資源としての価値にあるのではなく、「元」へのこだわりそのものにあることを示していると考えられる。その背景には、孔子および儒教に対する尊敬の感情が一貫して共有されてきたことに加え、歴史的には、中国側に対して「徳化」を示すことで政治的・経済的利益を獲得するという現実的要請が存在していたことが挙げられる。さらに戦後以降においては、久米村の祖先たちが築き上げた輝かしい歴史や、独自の孔子尊敬の伝統に対する誇りが、久米村人としてのアイデンティティ形成を強く支えてきたと考えられる。

本稿は、河合洋尚が提示する景観の「物的形態」の総合的形成要因を探究するアプローチに依拠し、久米孔子廟の変遷に焦点を当てて考察を行った。その結果、本研究は、郭湖生が提唱する「東方建築史」の問題意識にも一定程度応答するものになったと考えられる。今後は、関連する古文書や崇聖会に残された豊富な文字資料をさらに検討することにより、久米孔子廟の景観的変遷について、より詳細な議論を行っていきたい。

参考文献

- 石垣 直 2019「琉球・沖縄における積奠の歴史と現在——久米・至聖廟の事例を中心に」『南島文化』41：17-50。
- 2020a「戦後沖縄における久米・至聖廟再建と中華民国——1975年前後の協力・寄贈品とその政治・文化的背景への注目から」『南島文化』42：127-152。
- 2020b「戦後沖縄における積奠復興——『具志堅以徳収集文書』他にみる台北市孔廟からの影響」『南島文化』43：17-41。
- 伊藤陽寿 2010「久米村孔子廟創建の歴史的意義——十七世紀後半の政治的視点から」『沖縄文化研究』36：101-135。
- 河合洋尚 2022「なぜいま人類学が景観を論じるのか——景観人類学のマテリアル・ターンを再考する」『社会人類学年報』48：21-47。
- 久米崇聖会 100周年記念史編集委員会編 2014『久米崇聖会 100周年記念史』一般社団法人久米崇聖会。
- 郭 湖生 1992「我們為什麼要研究東方建築——『東方建築研究』前言」『建築師』8：46-

48。

沈 陽 2011 「明清北京国子監孔廟的空間格局演變」 『建築学報』 S1: 55-61。

(こう・けんえい 東京都立大学大学院)

その場に集うものたちとともに料理する

——パプアニューギニアからの留学生のアイギルづくりを事例に

笹本 美和

一 はじめに

国を越えて移動する人々の故郷の料理は、現住地においてどのようにつくられるのだろうか。本稿では、パプアニューギニアから国際大学（新潟県南魚沼市にある大学院大学）に留学する学生¹の *Aigir*（以下、アイギル）づくりを事例に、この問いについて考えたい。

アイギルとは、パプアニューギニア 東ニューブリテン州のトーライの人々の料理である。サツマイモをはじめとする根菜や青菜、鶏肉などの具材とともに焼き石を鍋に入れ、香味野菜やチキンストックキューブなどで味付けされたココナッツミルクを注ぎ、蓋をして蒸し焼きにするものだ。筆者は、修士課程在籍中²に、国際大学の太平洋諸島の留学生が主催する卒業生のための送別会 *Oceania Gathering* を訪れた。会場となったバーベキューサイトには、卒業生 5 人を含む太平洋諸島の留学生 11 人と 30 名ほどのゲスト（アフリカや東南アジア、中央アジアの留学生および国際大学の教員）が集っていた。この *Oceania Gathering* の場においてゲストをもてなすメイン料理としてつくられたのがアイギルである。

¹ 2025 年 5 月 1 日時点において、国際大学には 391 名が在学し [国際大学 2025a]、そのうち 368 名を留学生が占めている [国際大学 2025b]。留学生の国籍は 65 カ国にのぼり [国際大学 2025a]、太平洋諸島からの留学生は、パプアニューギニア独立国 6 名、ソロモン諸島 5 名、トンガ王国 5 名、バヌアツ共和国 3 名が在籍している [国際大学 2025b]。太平洋諸島からの留学生の多くは、政府機関で勤務する 20 代後半から 30 代後半の職員であり、JICA の SDGs Global Leader Program という長期研修制度のもとで来日している。彼らは、外交政策、国家財政、教員の育成、インフラ整備、森林管理、漁業開発、食糧問題、移民問題など、彼ら自身の業務に関連するテーマを大学院で研究し、修士号や博士号を取得することで、所属機関でのキャリアアップを目指している。大半の学生は、国際大学の学生寮で日常生活を送っており、寮内では料理をつくって学生間で分けあったり、ビリヤードを楽しんだりしている。そうした生活のなかで、太平洋諸島を出身とする留学生のコミュニティができ、彼らによって新入生歓迎会やバーベキュー会、遠足などのイベントが企画されている。

² 国際大学に在籍する太平洋諸島出身留学生の母数が少なく、調査にご協力いただいた個人を特定できてしまう可能性があるため、調査協力者のプライバシー保護の観点から調査期間および写真の撮影日の公表を差し控える。

アイギルづくりの中心を担ったのは、パプアニューギニア ニューブリテン島を出身とする学生だった。彼に話をきくと、「Oceania Gathering でつくられたアイギルは、故郷でつくられるアイギルとは全然違った」という。このように彼が指摘する Oceania Gathering でつくられたアイギルと彼の故郷でつくられるアイギルとの差異は、どのようなものであったのだろうか。また、これらのアイギルの差異はどのようにして生まれていたのだろうか。

本稿では、現住地に存在するものと留学生との出会いに光を当て、今回の Oceania Gathering の場におけるアイギルづくりの過程を辿ることで、どのように留学生の故郷のアイギルとは異なるアイギルが生まれていったのかを探る。

二 Oceania Gathering

浦佐駅のホームに降り立つと、夏の初めの蒸し暑い空気が私を包んだ。Oceania Gathering を主催する太平洋諸島の留学生から、パーティーの前日準備をすると聞き、国際大学へ向かっているのだった。駅の南口から 1 時間に 1 本走る国際大学行きのバスで街中を抜けると、窓の向こうに高い山々と広大な水田が広がった。太平洋諸島からの留学生を多数受け入れる国際大学は、そうした緑あふれる地域のなかにあった。

夕方になると、明日の Oceania Gathering の料理を準備するため、太平洋諸島の女子学生たちは JA の運営する農産物直売所へ、男子学生たちは地元の精肉店へ買い出しに出かけていった。今回のメイン料理であるアイギルを郷土料理とするニューブリテン島出身の留学生によると、彼の故郷のアイギルは、生姜、ニンニク、人参、玉ねぎ、スプリングオニオン、トマト、鶏肉、料理用バナナ、青唐辛子、*Aibika* (以下、アイビカ)、塩、チキンストックキューブ、搾りたてのココナッツミルクからつくられるそうだ。ただ、彼の現住地である国際大学の周辺では、アイビカという青菜や料理用バナナを見つけることは難しい。そのため、今回は JA の農産物直売所に並んでいたほうれん草や小松菜、サツマイモやジャガイモがアイギルづくりに参加することになった。また、彼の故郷では、個人や農場から生きている鶏が買われてアイギルづくりの場へとやってくるが、今回のアイギルづくりには、留学生たちが地元の精肉店でみつけた冷凍の鶏肉が加わった。さらに、彼の故郷では、とれたてのココナッツの実が削られ、水と一緒に絞られることで、アイギルの味の決め手となるココナッツミルクがつくられるが、冬には雪に覆われるこの地域ではココヤシの木は育たない。

そうしたことから、今回は近くのスーパーマーケットで売られている精製済みのココナッツミルクが学生寮のキッチンへとやってきた。

23時15分頃、料理の下準備をするために、キッチンには4人の男子学生と4人の女子学生が集まっていた。男子学生たちはアイギルづくりのために鶏肉を解凍し、バーベキューをするために牛肉に下味をつけていた。女子学生たちは、片手に包丁をもち、大量のサツマイモとジャガイモがのったテーブルを囲んで、土で手が黒くなるまでひたすら皮剥きをしていた。パプアニューギニアの女子学生の1人は、芋の皮を剥きながら、「これがやりたかったんだ！故郷でいつもやっていることだからね。パプアニューギニアでは、お母さんはずっとキッチンにいて、私たちは一緒に芋の皮剥きをするんだよ。私たちにとってこの作業は日常で、故郷にいるように感じられてリラックスできるんだ」と私に語った。また、「故郷にはね、タロイモ、キャッサバ、バナナなど、色々な食べ物があるけれど、日本では手に入らないものもあるから、今回はジャガイモとサツマイモなんだよ」と教えてくれた。こうした作業は1時間半ほど続き、準備が終わる頃にはすっかり夜が更けていた。

翌朝になると、Oceania Gatheringのコーディネーターをつとめるパプアニューギニアの留学生は、5時半頃から学生寮のキッチンに立った。彼女は、数週間前からパーティーの献立についてアイデアを巡らせ、メイン料理のアイギルに加えて、ターメリックココナッツライス³、コーンやグリーンピース入りのピラフ、スパイスの効いた魚のスープ⁴、牛肉のバーベキュー、ポテトサラダ、コールスロー、スイカを振る舞おうと考えていた。キッチンのコンロの上では、大きな鍋にたっぷりに入った水が沸かされ、皮の剥かれた大量のサツマイモとジャガイモが茹でられていった。7時を過ぎると、太平洋諸島のほかの学生たちも続々とキッチンに集まり、女子学生たちは、ご飯ものやスープ、サラダの準備に取りかかった（写真1、2、3、4）。

³ ターメリック、ココナッツミルク、塩、水、米を3.5合炊きの炊飯器に入れて炊く。

⁴ 赤身魚のアラを入れた鍋を火にかけ、ココナッツミルク、ターメリック、ニンニク、唐辛子、玉ねぎ、生姜、マジックソルト、トマトを加えて作る。



写真1 茹でられたサツマイモ (筆者撮影)



写真2 茹でられたジャガイモ (筆者撮影)



写真3 ターメリックココナッツライスづくり (筆者撮影)



写真4 魚のスープづくり (筆者撮影)

男子学生たちは、学生寮の外に広がる草地の一角にあるバーベキューサイトに集まっていた。バーベキューサイトの隅には東屋があり、料理が並べられるテーブルの上には、黒色のビニールシートが敷かれていた。東屋の柱は、ハイビスカスの造花やパプアニューギニア独立国とソロモン諸島、バヌアツ共和国の国旗で飾られていた。東屋の隣にあるバーベキューコンロでは、男子学生たちがアイギルづくりと焼肉をするための炭火を熾していた（写真5）。アイギルは、パプアニューギニアのなかでも島嶼地域の料理であるため、同国の高地地域で暮らしてきた学生たちは、アイギルのつくり方を知らなかった。そうした事情から、ニューブリテン島出身の学生をほかの地域出身の学生たちがサポートするようにしてアイギルづくりが進められていった。



写真5 会場となったバーベキューサイト（筆者撮影）

アイギルづくりに欠かせない役割を果たすのが焼き石である（写真6）。今回は、男子学生たちが大学から20分ほど歩いたところにある水無川の河原で石を拾い集めてきた。水無川の下流にあたるその場所には、ごろごろと様々な大きさの石が転がっている。筆者がニューブリテン島出身の学生に話を聞くと、彼の故郷では、海と川の水が混ざる汽水域で、角の取れたディスク状の石を拾うそうだ。汽水域にある黒い石は熱に強く、焼き石に向いているの



写真6 焼き石となった石（筆者撮影）

だという。焼き石の大きさは、火を通したいものによって異なり、例えば、魚や鶏などの柔らかくて小さなものを料理する際には小さな石が、豚や牛などの硬くて大きなものを料理する際には大きな石が焼き石になるそうだ。今回、彼らが訪れた水無川の河原は汽水域ではなく、そこには黒い石はなかったため、丸みを帯びた手のひらサイズのディスク状の白い石が集められた（写真7）。



写真7 石が拾われた水無川の河原 (筆者撮影)

Oceania Gathering の場へと持ち込まれたそれらの石は、11 時頃から 2 時間ほどバーベキューサイトのコンロの炭火で熱せられた。13 時頃になると、男子学生たちは Tongue を片手に、炭火のなかから石を掴みだし、コンロのそばに置かれたバケツの水に一度くぐらせてから、空の鍋のなかへと入れていった。その上に、細かくした生姜やニンニクを散らして鶏肉をのせ、焼き石をさらに入れてながら、サツマイモやジャガイモを鍋いっぱい詰めていった。そして、刻んだ生姜、九条ネギ、玉ねぎ、人参、チキンストックキューブが混ざったココナッツミルクを鍋に注ぎ込む。すると、ジュウっという音を立てて湯気がたちのぼる。さらにその上に小松菜、ほうれん草、長ネギを鍋からあふれるほど山盛りに積み重ね、それらをアルミホイルで包むようにして覆う。そこに鍋の蓋をのせ、蓋の上に重石を置いたら、蒸し上がるまで 1 時間ほど待つのだ。こうしたアイギルづくりの様子を見ていたゲストの 1 人が、パプアニューギニアの男子学生に「どうして鍋に石を入れるの？」と聞いた。質問された彼は、「焼き石がこれを料理するんだよ。普通に茹でると比べて味が違うんだ。実際にそう思うかどうか、君も食べて試してみて」と答えた (写真 8、9、10)。



写真8 鍋に詰め込まれる焼き石と鶏肉とサツマイモとジャガイモ (筆者撮影)



写真9 山盛り積みあがる野菜 (筆者撮影)



写真10 アイギルの蒸しあがりを待つ (筆者撮影)

15 時過ぎに Oceania Gathering のプログラムが始まった。太平洋諸島の女子学生は、*Laplap* (ラブラブ) というカラフルな布を腰に巻き、フレンチパニーやハイビスカスの造花を髪にさしておしゃれをしている。会場に到着したゲストには、歓迎のしるしとして、主催者の太平洋諸島の学生たちから色とりどりの花の首飾り *Lei* (レイ) がかけられた。プログラムの始まりに司会を担当する在学生在が挨拶をすると、コーディネーター役の学生によってキリストへの祈りの言葉が捧げられた。そして、ゲストや卒業生に乾杯ドリンクとして *Kava* (カヴァ)⁵が配られ、司会が乾杯の音頭をとった。DJ を担当する学生はスマートフォンをスピーカーに繋ぐと、太平洋諸島で人気のレゲエ音楽⁶をかけ始めた。参加者たちは

⁵ バヌアツ出身の留学生が、バヌアツから訪日した友人に分けてもらった *Kava* の粉末を溶いて作った。

⁶ Oceania Gathering の会場で流れた BGM のなかでも、特に盛りあがった曲は、以下の曲目である。Black Rose の Raude、Blad P2A (feat. Khazin) の Ukulele、Daniel Bilip の Sina、Jaro Local の Dakini Tangarareh、Koffi Olomidé の Loi、Lista Serum の Longpela Rot、Onetox の Everything、Onetox & Stanley T の La'u Pele、Radaaz (feat. Anslom) の Sharp Resa、Saba の Ten Dollar

東屋のテーブルに並んだ食事を皿にとりながら歓談し、それぞれのお気に入りの曲が流れるとダンスをするなどして自由に時間を過ごした。16時半頃に、卒業生への記念品贈呈や在校生・卒業生からの言葉、記念撮影などがあり、プログラムを終えてからも、多くの参加者が会場に残った。彼らの多くは、バーベキューサイト前の草地でサッカーやバレーボールなどのゲームを楽しみ、太平洋諸島の学生たちの心がこもった Oceania Gathering の料理は、日が暮れた後も、会場を訪れる人々をもてなし続けたのだった。⁷ (写真 11)。



写真 11 ポテトサラダ、ターメリックココナッツライス、アイギル、
コールスローサラダ、ピラフ、魚のスープ (筆者撮影)

ここまで、Oceania Gathering の準備から終わりまでの出来事を追いかけてながら、アイギルがつくられる過程を辿ってきた。今回のイベントを終えて、ニューブリテン島出身の学生は、Oceania Gathering の場で振る舞われたアイギルは、故郷でつくられるアイギルとは全然違ったと筆者に語る。今回の Oceania Gathering のアイギルは、どのように彼の故郷のアイギルとは異なったのだろうか。また、そうした故郷とは異なるアイギルは、この Oceania

Beach、Tiësto の In My Memory (V-One Remix: feat. Nicola Hitchcock) 、Tom Lari の Ambai Sendio、Tonton Malele (feat. Jayrex Suisui) の Eloï、Tonton Malele (feat. Jayrex Suisui) の Legu Ranga、Tonton Malele (feat. Nene Morus & Jayrex Suisui) の Pikinini Niu Ailan。

⁷ 蒸しあがったアイギルは銀皿に盛りつけられ、マジックソルトがふりかけられた後にテーブルに並べられた。

Gathering の場においてどのように生まれたのだろうか。以下では、この問いについて考えてみたい。

三 アイギルをつくるものたち

彼の故郷でのアイギルづくりと Oceania Gathering でのアイギルづくりにかかわるものたちは、どのように違うだろうか。ニューブリテン島出身の学生から、彼の故郷でおこなわれるアイギルづくりについて話を聞き、彼の故郷と Oceania Gathering でのアイギルづくりにかかわる主なものの差異を表 1 にまとめた。

表 1 留学生の故郷と Oceania Gathering におけるアイギルをつくるものの差異

アイギルづくりに かかわる主なもの		留学生の故郷	Oceania Gathering
火入れに かかわる もの	焼き石	河口付近の汽水域にある角のないディスク状の黒い石	塩水の混ざらない河原にある角のないディスク状の白い石
	鍋と覆い	鍋の内側にバナナの葉を敷き、食材や焼き石を入れ、バナナの葉で包むように閉じる	食材と焼き石を入れた鍋の上部をアルミホイルで覆う
野菜、肉、調味料		料理用バナナ、アイビカ、生姜、ニンニク、人参、玉ねぎ、スプリングオニオン、青唐辛子、トマト、生きていた鶏、チキンストックキューブ、搾りたてのココナッツミルク、塩	サツマイモ、ジャガイモ、小松菜、ほうれん草、生姜、ニンニク、人参、玉ねぎ、長ネギ、九条ネギ、冷凍鶏肉、チキンストックキューブ、精製済みのココナッツミルク、マジックソルト

ここから、彼の故郷と Oceania Gathering の場におけるアイギルづくりの間には、火入れにかかわる石の性質や覆いの素材、食材の包み方などに差異があることがわかる。また、アイギルをつくる野菜や肉、調味料の種類にも違いがみられる。

ニューブリテン島出身の学生は、今回の **Oceania Gathering** の場でアイギルをつくる際に、「故郷とは違うアイギルをつくりたい」と意図したわけではなかった。彼が現住地にある河原や商店を訪れ、この地域に存在するさまざまなものたちと出会うなかで、**Oceania Gathering** のアイギルづくりに参加するものが決まっていた。こうして今回のアイギルづくりの場集ったもののなかには、ニューブリテン島出身の学生にとって、あまり馴染みがないものも含まれていた。例えば、水無川の河原にある白い石は、彼の故郷の汽水域にある黒い石とは異なるものであり、その石の性質は火入れにどのようにかわるのか、彼にとって未知のものであった。また、故郷のアイギルはバナナの葉で包まれるようにして蒸されるが、ここではバナナの葉ではなくアルミホイルが鍋の上部を覆った。こうした蒸気を閉じ込める素材やその素材に応じてされる包み方の差異は、熱の通り方を変化させるかもしれない。今回のアイギルづくりに加わったほうれん草は独特の苦味をもち、小松菜はあっさりとした風味をもっている。これらの青菜は、茹でられるとしんなりとした食感になる。こうした風味や食感は、彼の故郷の青菜であるアイビカの風味や食感とはまた違うものであり、彼の知っているアイギルとは異なる味や食感を生み出していく。それだけではなく、今回のアイギルづくりに参加した、さらっとした状態の精製されたココナッツミルクは、ココナッツの実から絞られたばかりの脂味のある生のミルクとは違う風味をアイギルに与える。このように、今回の **Oceania Gathering** においてアイギルづくりに参加したものは、彼の意図していなかった風味や食感を生み出し、彼の故郷でつくられるアイギルとは異なるアイギルを形づくっていく。

一見すると、料理というものは、人間によって、そこに存在するさまざまな“もの”が寄せ集められ形づくられるブリコラージュ [レヴィ=ストロース 1976:22] のようにもみえる。しかし、これまで暮らしていた土地を離れ、故郷とは違う場所で暮らす人々が、作り慣れた故郷の料理を現住地でつくろうとするとき、私たちは、人間の意図・アイデア・行為のみで料理がつくりだされるのではないことに気づかされる⁸。実際にできあがった料理の味や形が、つくる人の想像していなかったものになることもあるのだ。そのような人間の意図を超えた味や形が生みだされるのは、料理に参加している作り手が人間だけではないからだろう。私たちは、料理の道具や材料と呼ばれるものたちを、自分の意図のもとで使っているよ

⁸ Stengers, I.は、*The Challenge of Ontological Politics* において、これまで「私たちは、私たちが動かす（人間以外のものたちの）力をそのものの力として認めず、敬意を払ってこなかった」 [Stengers 2018: 104, 108.（）内は筆者による補足] と指摘している。本稿の立場もこのような問題意識に基づいている。

うに感じるかもしれない。しかし、Oceania Gathering のアイギルづくりの事例から考えてみると、料理の道具や材料と呼ばれるものたちは、単に人間の都合にあわせて使われ、人間の意図の範囲のなかでのみ働くようなものではなく、人間とともに料理の味や形を変えていく存在なのである。そうしたものたちとの出会いは、私たちがまだ知らない料理を彼らとともに生み出していく豊かな可能性に満ちている。料理は、料理づくりに参加する人々とその場に集うさまざまなものたちとの出会いのなかで、人間だけではない他者とともにつくられているのである。

謝辞

本稿は、筆者の修士論文「“いまここ”を形づくるものたち：パプアニューギニアから日本に留学する人々の住まうランドスケープ」の一部をもとに執筆した。調査にあたっては、千葉大学卓越大学院プログラム「アジアユーラシア・グローバルリーダー養成のための臨床人文学教育プログラム」から多くのご支援をいただいた。そして何より、これまでの調査に快くご協力くださったパプアニューギニアからの留学生をはじめとする太平洋諸島の留学生のみなさんに、心からの感謝を伝えたい。

参考文献

国際大学 2025a 「大学基本情報」 2025 年 5 月 1 日

<https://www.iuj.ac.jp/about/basic-statistics/> 2025 年 12 月 23 日最終閲覧

国際大学 2025b 「外国人学生の受け入れ」 2025 年 5 月 1 日

https://www.iuj.ac.jp/about-f/info_release/11-a-i.pdf 2025 年 12 月 23 日最終閲覧

レヴィ=ストロース, C. 1976 『野生の思考』 大橋保夫訳、みすず書房。

(Lévi-Strauss, C. 1962. *LA PENSÉE SAUVAGE*. Librairie Plon.)

Stengers, I. 2018 The Challenge of Ontological Politics. In de la Cadena, M. & Blaser, M.(eds) *A World of Many Worlds*, pp.83-111. Duke University Press.

(ささもと・みわ 千葉大学大学院)

資源化される中国広東省潮汕地域の食文化

横田浩一

2025年9月、筆者は中国広東省潮汕地域に赴いた。潮汕地域とは、潮州と汕頭というこの地域を代表する二大都市の頭文字から取った地域名称であり、広東省東部に位置している。この地域は、広東省の中で広府系、客家系とともに広東三大民系を構成する潮汕民系の居住地であり¹、工芸や刺繍、彫刻などが代表的な文化とされている。なかでも、近年は食文化に大きな注目が集まっており、潮汕地域的美食を求めて主に中国国内からの観光客が増加している。ここでは、かつて潮州市に居住していた筆者の目線から2025年の潮汕地域における食文化の展示について述べていきたい。

筆者は2010年から2013年まで、およそ2年半、潮州に居住していた。その頃の潮州には観光客は少なく、潮州旧市街の「牌坊街」(写真1、2)と呼ばれる門がいくつも連なる通りは修復されていたが、ほとんどがテナント募集中の空き店舗で、週末でも人影がまばらであった。当時、潮州市内を観光客が訪れるスポットは開元寺(写真3)や湘子橋(広濟橋)(写真4)など限られており、観光客の多くは東南アジア各国に居住する潮州系華人だと言われていた。しかし、2025年9月初旬には週末でもないのに多くの人が牌坊街に繰り出していた。また通りの店舗は土産物屋、軽食を提供する店、ミルクティーなどを提供するドリンク店、レストランなどで埋まっており、空き店舗は皆無に近い状態だった。観光客の多くが中国語話者であり、印象的だったのは北方アクセントの話者の割合が多いことだった。筆者が居住していた頃には、潮州市内で北方アクセントの中国語を話す人、つまり中国北部から来た人を目にすることは考えられないことだった²。

¹ 広東地域では、日常的に話す言語区分に基づいて漢族のサブ・エスニック・グループを区別することが多く、この三つの社会集団は広く認知されている。

² 広東省内では潮汕地域の料理がおいしいことはよく知られていたが、全国的な知名度があったわけではなかった。



写真1、2 牌坊街（2025年9月3日、筆者撮影）



写真3 開元寺。境内は修復中だった（2025年9月4日、筆者撮影）

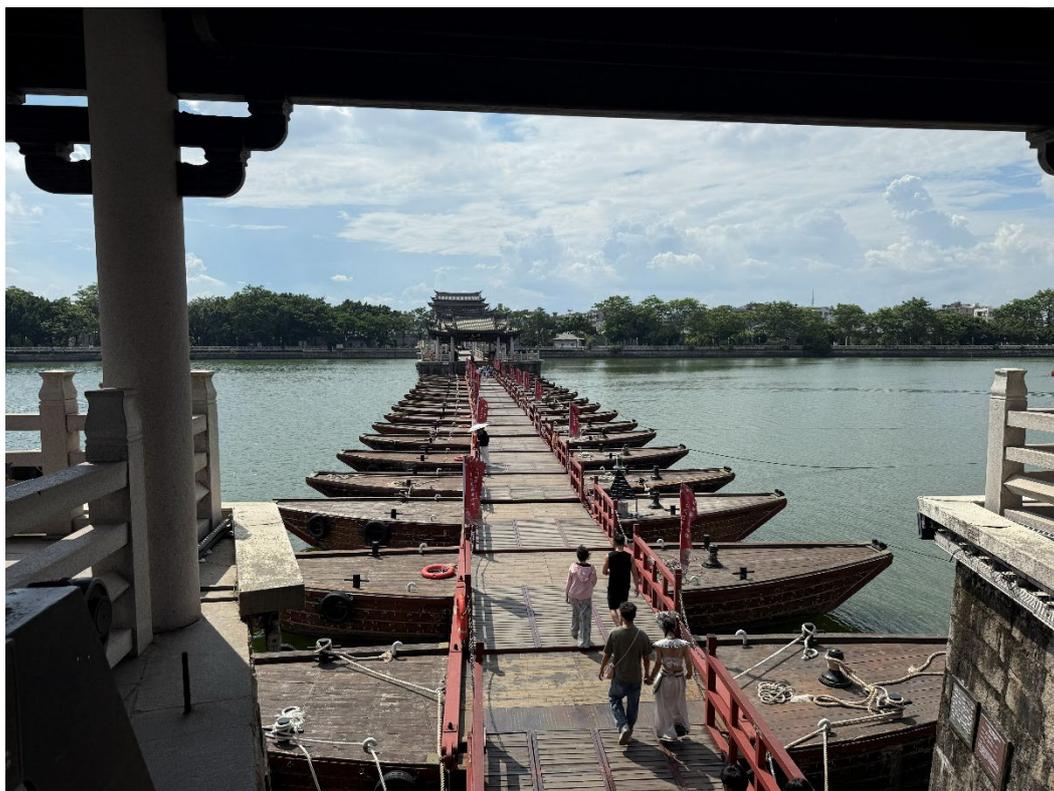


写真 4 湘子橋(広濟橋) (2025 年 9 月 3 日、筆者撮影)

このように現在の潮州は、中国国内の旅行客を吸引しており、わざわざ潮州を観光するために遠距離から訪れる人もいるようである。なかでも多くの人を引きつける魅力となっているのが潮州の食文化である。現在の中国では、「非遺（無形文化遺産）」が注目されており、これが潮州の食文化に正統性を与えている。「非遺」とは、中国語で「非物質文化遺産」（写真 5）の略称であり、この略称が中国では人口に膾炙している（写真 6、7）。潮州は 2023 年に UNESCO の食文化創造都市に選ばれている。中国国内では成都、順徳、マカオ、揚州、淮安に続き 6 番目に認定された都市になる。UNESCO の食文化創造都市とは、ユネスコが創設した「創造都市ネットワーク」の一つで、豊かな食文化を持つ都市が加盟し、食文化を地域振興や持続可能な発展に活かすことを目的としている。また加盟都市は相互に連携・交流し、食の多様性の保護や次世代への継承、食関係産業の活性化などを図ることを目的としている [UNESCO]。潮州の食文化のうち、工夫茶と呼ばれる喫茶文化（正式名称は「潮州工夫茶藝」）は、2022 年に登録された「中国の伝統的製茶技術とその関連習俗」のユネスコ無形文化遺産の構成要素の一つとなっている。これらから分かるように、現在の潮州では「非遺」がキーワードになって観光化が進められてい

る。UNESCO の無形文化遺産だけではなく、中国国内には国家級、省級、市級などさまざまな「非遺」があり、潮汕地域の伝統的食文化のほとんどはいずれかのレベルの「非遺」と認定されている。この「非遺」としての食文化が、観光客を潮州に引きつける吸引力になっていると現地では考えられているようである³。

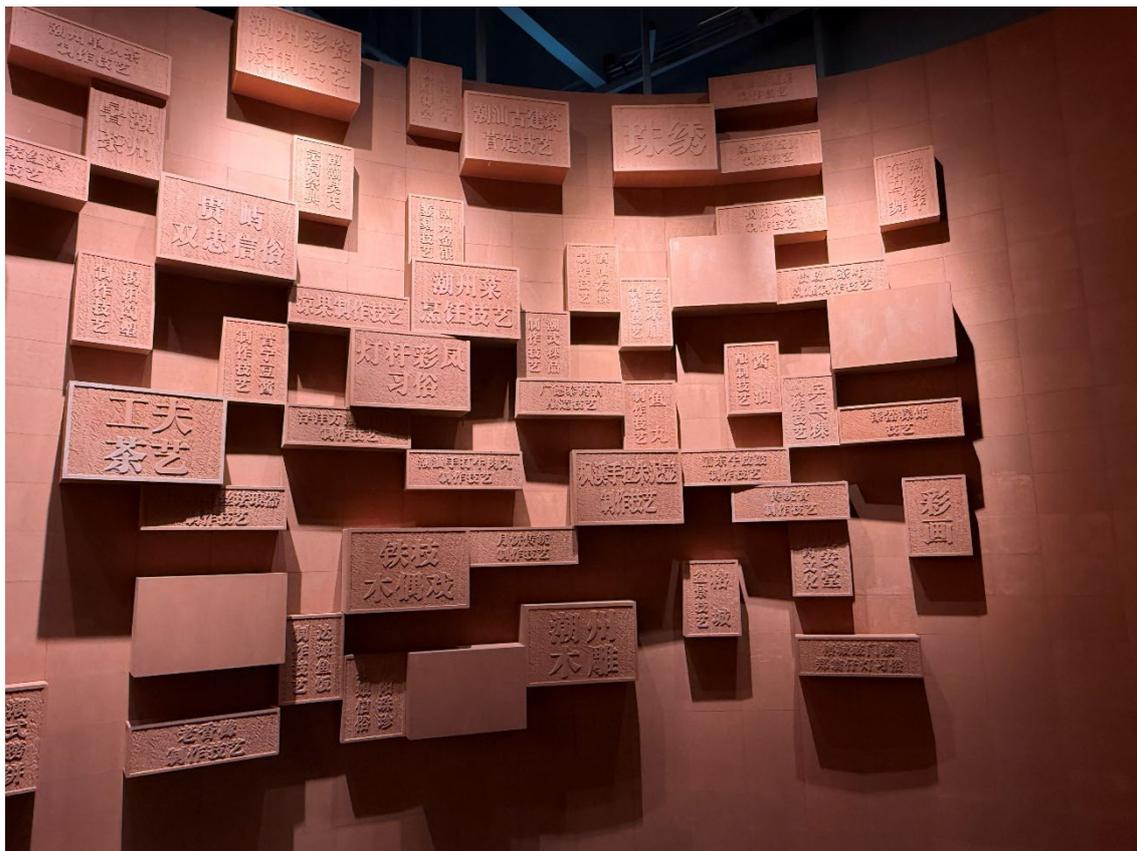


写真 5 潮汕歴史文化博物館ではブロックにして様々な無形文化遺産を視角化している

(2025 年 9 月 6 日、筆者撮影)

³ 実際には「非遺」だけではなく、潮汕地域の食文化に関するドキュメンタリーシリーズの放映、中国における個人旅行者の増加、かれらによる SNS での発信、潮汕地域への高速鉄道の開通（2015 年）など、複数の要素が潮汕地域の食文化への注目や観光客の誘引、資源化と関わっていると思われる。これらの問題については、別稿にて議論を行うことを予定している。



写真6 無形文化遺産の青草茶(ハーブティー) (2025年9月3日、筆者撮影)



写真7 汕头市無形文化遺産のガチョウ肉 (2025年9月7日、筆者撮影)

では、どのような食文化が潮州市内で視角化されて展示されていたのか。潮州市内で観光客が多く集まるのは、牌坊街のある旧市街である。ここは王朝時代に行政府が置かれた場所であり、明清時代に建設された建物が多く残っている。現在では、観光客向けの店舗が軒を連ねている。土産物屋や軽食、ドリンク店以外で目立つレストランは、「牛肉火鍋」(写真8)と「魚生」(写真9)である。牛肉火鍋とは、牛骨と南姜(ショウガ科の植物)をベースとした透き通ったスープに新鮮な牛肉の様々な部位をしゃぶしゃぶのように火を通し、サテソース(「沙茶醬」)で食べる料理である。一方の「魚生」は、川魚(一般にソウギョが使われる)を薄くスライスしてショウガ、ニンニク、パクチー、タマネギなどの香味野菜とともに食べる。中国では珍しい生魚を使った料理である。



写真8 潮州市内の牛肉火鍋屋 (2025年9月3日、筆者撮影)



写真9 潮州市内の魚生のレストラン（2025年9月3日、筆者撮影）

この2種類の料理が潮州の名物として受け入れられている背景には、二つの要因があると思う。第一に、中国の他の地域ではあまり食べられない料理であるという点である。潮汕地域には他にも名物料理とされるものがあるが、この2つの料理は他の地域と比較して珍しい料理だと言える。中国で広く食べられる肉は通常、豚や鶏、アヒルや羊であり、牛肉を使った料理が名物となっているのはそれほど多くない。また、生の魚を食べる習慣も広東などの一部地域にはあるものも現在の中国料理にはあまりない。そのため、これら食材を用いた料理が親しまれているという点で潮汕地域の食文化における顕著な特徴とみなされていると考えられる。その背景として、牛肉については西洋料理、生魚については日本料理を通して親しんだ層が現在の中国には多くおり、それらの人々が牛肉や生魚といった潮汕地域の食文化を抵抗なく受け入れているのではないかと推測できる。

第二に、どちらも食味において優れているという点である。何をもっておいしいと感じるのかは個人の好みによる部分もあるが、これら2つの料理はどちらもおいしいと思われる。「名物にうまいものなし」という言葉もあり、その地域で有名な食べものや評判の良い食べものでも意外においしくないということがある。それはおそらく、その地域の特有の

調味料や調理法を用いて作った料理であったり、あるいは観光客向けにアレンジされて実際にはおいしさよりも見た目の新しさを売りにしたりしていることも関係しているためだろう。潮汕地域の名物の中には、昔ながらの伝統的食文化もあり、それらの一部には現代の味覚からすると保存を優先させて油分や塩分が多く、香辛料の香りが強いものもある。しかし、これら2つの料理は食材の新鮮さを売りにしており、現代の味覚からしても違和感を生むことが少ないのではないかと考えられる。

このように、「牛肉火鍋」と「魚生」は潮州で観光客に親しまれる料理となっている。しかしこれらは元々広く潮州で親しまれ、どこでも気軽に食べられる料理ではなかった。「牛肉火鍋」は潮州市内にいくつか店舗があり、特に有名店には週末になると多くの人が新鮮な牛肉に舌鼓を打っていた。しかし、街中のそこら中に牛肉火鍋店がある現在の様相をかつては想像できないほどであった⁴。さらに「魚生」については、潮州市内に専門店はほとんどなかった。「魚生」は官塘という潮州市中心部から南東に10キロ離れた地域の名物であり、潮州中心部の誰もが年に何度も食べるものではなかった。だが、現在では潮州市内の牌坊街を中心に「魚生」を看板に掲げた飲食店が数多くある。

これらから分かるように、現在の潮州における食文化の資源化は二つの方向性が相互に関わり合いながら進んでいる。一つ目は、伝統的な食文化の無形文化遺産化である。さまざまな行政レベルで個別の食文化を無形文化遺産に登録し、それを継承し、観光業の活性化につなげようとしている。二つ目は、潮汕地域内の一部地域における食文化の普遍化である。「牛肉火鍋」と「魚生」はともに潮汕地域内における食文化の一つであったが、必ずしも地域内のどこでも食べられるものではなかった。「牛肉火鍋」の方は近年の文化資源化が開始する以前からそれを口にする店舗が潮州市内にもいくつかあったが、「魚生」の店舗は珍しかった。それは、官塘の地域文化とも言えるものだった。それが地域全体の食文化に格上げされ、潮汕地域全体の食文化として地域内で普遍化することになった。この地域内の食文化の普遍化という現象は、一つ目に挙げた食文化の無形文化遺産化による観光業の活性化と大きく関わっているだろう。

潮汕地域における食文化の無形文化遺産化が今後どのように展開するのか、予断を許さない。また今回の調査では、このような無形文化遺産化した食文化に対して、飲食店や観光産業関係者以外の一般の人々がそれをどう認識しているのかについて、確認することは

⁴ 汕頭市内にはもともと牛肉火鍋店が多くあったが、潮州市には街角のどこでもあるわけではなかった。

できなかった。この問題については、今後現地での聞き取りを行っていきたい。

参照文献

UNESCO *Creative Cities Network*

<https://www.unesco.org/en/creative-cities> 2025年12月29日閲覧

(よこた・こういち 人間文化研究機構／東京都立大学)

台湾南部におけるアニマルフレンドリーに関する考察

蔡 妍歆

2025年9月3日から8日にかけて、私は東京都立大学社会人類学教室の学部ゼミ調査に調査助手として参加し、台湾南部の屏東・佳冬・高雄の地を踏んだ。半年前、台北の街角で見かけた犬の散歩道や、動物を自然に迎え入れるアニマルフレンドリーな風土に魅せられたことが、私を南部へと引き戻したのだ。

4日に訪れた屏東原住民文化園區では、犬や猫の姿を頻繁に目にした。午前中、スーパーショップの前で一匹の黒い野良犬に出会ったが、聞けば、いつもこの周辺に現れるため半ば飼育されているような存在なのだという。正式な飼い主こそいないものの、周囲の人々に世話を焼かれながら、彼はたしかに現地の一員として受け入れられていた。園區が広大で外部との境界が緩やかであることも、こうした人と動物の関係を可能にしている要因の一つだと考えられる。さらに、台湾原住民の伝統において、動物は隔離して保護される対象ではなく、神話・禁忌・実践を通じて人間と関係を結び、同一の生活世界を共有する存在として理解されている。

午後訪れたルカイ族の村のコンビニでは、長毛のキジトラ猫に出会った。その猫には中国語名とルカイ族語名の両方があり、いずれも「虎」を意味する名前であった。この猫の首輪にも、札が付けられ、狂犬病ワクチン接種済みであることとマイクロチップ登録済みであることが明記されていた。オーナーによれば、当地の郷署¹ではペットに対するワクチン接種やマイクロチップ装着が無料で実施されているという。その後調べたところ、台湾では2014年以降、犬猫などの食肉目動物に対する狂犬病予防接種が法的義務とされ、さらに2025年からは犬猫へのマイクロチップ装着の義務化が進められている。こうした制度を、獣医療資源や交通条件に乏しい山間部や僻地においても実効性のあるものとするため、行政は巡回方式による無料または低負担のサービスを実施し、登録率の向上と公衆衛生上の防疫体制の確保を図っている² (写真1)。

¹ 日本統治時代やそれ以前の台湾において、「郷（現在の町や村にあたる区画）を管理するための役所・事務局」のことを指す。

² 「養犬猫資訊總整理」 https://www.gov.tw/News_Content_37_780821#active2 2026年1月30日閲覧



写真1 虎という猫（2025年9月4日、筆者撮影）

5日の午後には、佳冬にある客家人蕭氏の祖屋を見学した。この祖屋は、清代に六堆客家人蕭氏一族が建て、のちに五進四院³へと拡張された、客家囲龍屋形式の屏東県指定古跡である。見学の際、室内の扉の右下に設けられた「猫洞」と呼ばれる小さな開口部が目にとまった。蕭氏の方の説明によると、この猫洞の上部は波形になっており、猫が通る際に背中が擦られて心地よく感じられるよう工夫されているという。猫を自然に室内へ導くことで、ネズミ除けの役割も果たしてきたとのことであり、こうした住宅設計からは、伝統的な民俗知に基づく人間と動物の共生のあり方が読み取れる（写真2）。

³ 「奥行きが5段階（五進）あり、中庭が4つ（四院）ある、非常に格式高い邸宅」を指す。



写真2 佳冬蕭宅の「猫洞」(2025年9月5日、筆者撮影)

近年、台湾の少子高齢化や単身世帯の増加が進むなかで、犬や猫は単なる「飼育動物」ではなく、家族の一員や情緒的なパートナーとして受け止められるようになってきた。ペットを人間の生活圏から遠ざけるのではなく、むしろ都市のなかにどう受け入れていくのかという問いが、日常生活のなかで立ち上がっている。私は休憩時間を利用して高雄市内でアニマルフレンドリーな施設を探した。6日、ホテル周辺でコインランドリーを探していた際、人間用の洗濯機の隣にペット専用の洗濯機が2台設置されている店を見つけた。また、近くにはペット用の弁当屋があり、自動販売機も設置されていた。弁当屋の公式LINEアカウントによれば、この弁当の自動販売機は高雄市内に13か所あり、価格は一食100～200元⁴とのことであった。こうした施設は、現代の都市生活における新たなアニマルフレンドリーの形を示している(写真3、4)。

⁴ 日本円の495～991円に当たる。



写真3 ペット専用のコインランドリー（2025年9月6日、筆者撮影）



写真4 ペット用の弁当の自動販売機（2025年9月6日、筆者撮影）

7日に、私は墨凡商場というショッピングモールを訪れた。そこでは、高雄 MRT の猫の駅長「蜜柑（みかん）」に関するイベントが開催されており、展示パネルや関連グッズの販売が行われていた。紹介文によれば、蜜柑は高雄のアニマルフレンドリー大使として、ペットフレンドリーな駅づくりを象徴する存在であり、月に一度、橋頭糖廠駅に出勤しているという。また、駅構内の掲示には、台湾の MRT ではペットは手荷物として持ち込み可能だが、バッグから出してはならないという規定が示されており、日本の鉄道における制度と共通点が見られた⁵。なお、私が見る限り、このエリアにはペットフレンドリーなレストランも多かった（写真 5、6）。

短期間の調査ではあったが、台湾南部では文化的背景に根ざした伝統的な共生観から、都市の商業活動に組み込まれた現代的な実践まで、人間と動物の共生が多層的に展開されていることを確認できた。古き良き民俗知と、法整備やサービスといった近代的な枠組み。その双方が機能することで、台湾の日常には人間と動物が自然に共存する豊かな空間が保たれているのだと感じた。

（さい・けんかん 東京都立大学大学院）

⁵ 「新幹線や電車に犬や猫を持ち込むには「手回り品きっぷ」が必要！利用ルールも解説」
<https://media.jreast.co.jp/articles/408> 2026年1月30日閲覧

スナック菓子「乖乖」

—現代台湾の新たな民間信仰？

河合 洋尚

なぜスナック菓子が機械の傍に？

私が台湾を初めて訪れたのは修士課程が終わりを迎える 2003 年の冬頃であったと記憶している。筆者は、それから中国本土で長期間のフィールドワークに従事し、2012 年に入る頃から環太平洋の各地を歩くようになった。ただし、台湾にはその前の 2008 年からほぼ毎年のように訪れている。

台湾では主に各地の客家地域で—そして部分的には閩南人や原住民の居住地で—フィールドワークをおこなってきたが、最近気になりはじめた民間の新たな習俗がある。機械などの横に「乖乖^{グアイグアイ}」というスナック菓子を置く習俗である。中国語で「乖^{グアイ}」とは、「よい子」を指す。「乖乖」は 1968 年に台湾で売られ始めたコーン・スナックであり、これまで様々な種類の味とパッケージが市場に提供されてきた。パッケージが緑色であるココナッツ・クリーム味、黄色である五香（ファイブ・フレーバー）味、赤色であるチョコレート味が代表的フレーバーである。写真 1 にみるように、二つ歯の子どもが青いソンブレロ（メキシコ帽子）を被ったキャラクターが、シンボリック的存在となっている。このスナック菓子は、台湾のコンビニやスーパーなど、いたるところで売られている。



写真1 店頭で売られるスナック菓子「乖乖」（2022年9月、筆者撮影）

私は上述の通りおよそ 20 年にわたって台湾に通っているが、フィールド地で「乖乖」を

目にした記憶があまりない。フィールドワークをするなかで「乖乖」に初めて興味を抱いたのは、2022年9月である。台中市の客家地域にある用水路を見学したとき、機械の傍に緑色の袋のパッケージが置かれていたのだが、それが「乖乖」であった（写真2）。



写真2 機械の傍に置かれる「乖乖」（2022年9月、台中にて筆者撮影）

※「乖乖」の位置を赤で囲った

機械化・情報化時代の新たな信仰か？

なぜ機械の傍に「乖乖」を置くのか。この時フィールドワークに同行していただいた台湾客家の方々によると、それは機械が故障しないための一種のまじないである。このスナック菓子の名前が「乖乖」（よい子）だから、故障をせず「よい子」に機械が動くことを祈願しているのだという。

彼らの説明によると、機械の傍に置く「乖乖」は緑色パッケージのものでなければならない。「乖乖」の緑色、黄色、赤色のパッケージは信号機に見立てられており、緑色（＝青信号）だと機械が順調に働くが、赤色（＝赤信号）だと機械が止まってしまうからである。また、機械の傍に置く「乖乖」は賞味期限が切れてはいけない。賞味期限が切れると、効果がなくなってしまうというのが理由である。まるで生き物であるかのような説明である。私はこの話を客家地域で初めて耳にしたが、同様の習俗は客家の居住地だけではなく、台湾の各地で見られることを後に知った。

では、機械の傍に「乖乖」を置く習俗は、いつから始まったのであろうか。その起源については、次の言い伝えがある。1990年代末頃、ある台湾の大学院生が急いで論文を仕上げ

ねばならなかった時、パソコンが急に壊れてしまった。そこで彼は、机にあった「乖乖」を手に取りパソコンが無事に動くよう祈ったところ、奇跡的に起動したという。もっとも、これは都市伝説の一種と言え、本当にその時期からこのスナック菓子を機械の傍に置く習俗が現れていたのかは疑問である。私は、いつから「乖乖」を機械の傍に置くようになったのか、台湾の同世代（40歳代）の知り合い数名に尋ねたが、大抵は「ここ10年間」であるというのが回答であった。2010年代後半ということになる。「乖乖」の起源については台湾でも諸説があるだろうが、今日のような使われ方をしはじめたのはそれほど古い時期ではなさそうである。

興味深いのは、この新たな習俗は、パソコンや信号機といった機械類が存在していなければ、生じていなかったであろうことだ。私自身まだこの目で確認していないが、「乖乖」を置く習俗は—私がよく訪れる村落や社区よりも—むしろ台湾各地のIT企業やハイテク産業区などでより多くみられるとも聞く。まさに近代の科学技術が生み出した、新たな「信仰」のかたちであるといえるだろう。

民俗宗教の世界へ入り込む「乖乖」

ここ4年ほど、「乖乖」ウォッチをするなかで気になっているのは、このスナック菓子が台湾の宗教世界にも参入しはじめていることである。最近、台湾の廟（神々を祀る建物）における祭祀活動に参加すると、供物のなかに「乖乖」が紛れ込んでいるのをしばしば見かける（写真3）。



写真3 高雄の龍湖廟で催された中元祭の供物。果物などと一緒に「乖乖」が4つ置かれている（2025年9月、筆者撮影）

ここでは「乖乖」は、故障のリスクを防ぐというよりは、神々の前に供物を捧げて加護を祈るために使われている。だが、そうした性質の変化にもかかわらず、捧げられるのはやはり緑色パッケージのそれである。このような「乖乖」の宗教世界の参入は、最近になってますます加速しているように見える。最近では、媽祖^{まそ}という女神のアニメ・キャラクターをパッケージとした新商品も市場に出回っている（写真4）。



写真4 媽祖の絵をパッケージとした新商品

（2026年2月、筆者撮影）

本稿は、台湾でのささやかな気づきをしたための小文である。だが、このスナック菓子の緑色のパッケージは、もしかしたら台湾の信仰世界において新たな景観の一部を占めていくようになるのかもしれない。今後、「乖乖」が台湾の新たな信仰としてどのように広まっていくのか、世界の台湾移民の間でもグローバルに普及していくことになるのか、その動きを見守っていきたい。

（かわい・ひろなお 東京都立大学）

戦前沖縄の周縁地域からの出移民

大島 崇彰

2025年9月、筆者は沖縄県国頭村を中心に巡検を行った。筆者自身これが初めての沖縄県訪問であり、到着後、空港からホテルに向かうゆいレールの車窓に浮かぶ初めての景色に気分は高揚していた。一方で、未熟ながらオセアニア研究者として参加したプロジェクトの巡検において、果たして何の貢献ができるかという不安も抱えていた。そんな中で初日に訪れた場所が、當山記念館であった（写真1）。沖縄県国頭郡金武町にあるこの資料館は、「沖縄移民の父」と呼ばれる當山久三の功績を記念して建設されたものである（写真2）。館内には沖縄の移民事業に尽力した彼の生涯とともに、沖縄移民発祥の地とされる金武町の移民史、そして沖縄から世界へと渡った人々の軌跡を記した資料が展示されていた。私はそこでかつて沖縄から南洋群島へと向かった人々の存在を改めて知ることになった。

本エッセイでは、こうした巡検での経験を踏まえ、既存の移民史研究を参照しつつ、沖縄県、とりわけ国頭村から南洋群島へ向かった人々に注目する。そしてオセアニアと沖縄の海を越えたつながりの一端を整理し、今後の研究の可能性を考えたい。



写真1 當山記念館の外観（2025年9月10日、筆者撮影）



写真 2 當山記念館内にある當山久三氏の像（2025年9月10日、筆者撮影）

沖縄県からの海外移民は、1899年のハワイへの移民を端緒として本格化していった。沖縄移民研究を主導してきた石川友紀によれば、沖縄出身者の移住先は、明治から昭和にかけて、ハワイ、南米、そして東南アジアや南洋群島へと広がっていった [石川 1992a : 3-7]。移住先の傾向は、受入国の政治的状況や日本との関係によって変化してきたが、南洋群島への移民が特に目立つようになったのは第一次世界大戦後、日本が南洋群島を委任統治地域として以降である。ここでいう南洋群島とは、日本がドイツから占領し委任統治領とした赤道以北のミクロネシア地域である。現在で言うと、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島、北マリアナ諸島に相当する。日本の統治下、南洋群島には行政庁である南洋庁

が設置されたほか、サトウキビ栽培を中心とした農業開発のため会社も設立された。当初は東北などから労働者が招集されたが、気候や環境への適応の困難さから、その後亜熱帯環境に適応しやすいと考えられた沖縄県出身者が労働力として招集されるようになった。その結果、南洋群島における沖縄出身者の比率は全国的に見ても高かったとされる〔石川 1992b : 532〕。また統治下の南洋群島への移動は旅券を必要としなかったため、比較的渡航の障壁が少なかったことも出稼ぎ先として選ばれやすかった要因となった。1935年時点での沖縄出身者の在外居住者数を見ても、南洋群島が最多の1万3482人と記録されている〔花木 2025〕。戦前の沖縄の人々にとって南洋群島は主要な移民・出稼ぎ先となっていたことが確認できる。

なかでも、沖縄本島北部に位置する国頭村は、多くの移民を輩出したといわれる。国頭村は戦前から山林が多く耕作に適した土地が少ない地域であり、那覇などの中心地への交通の便も悪く、沖縄本島内でも周縁的な位置にあった。水田や畑地に限られる中で、移民・出稼ぎは生活を維持するための一つの選択肢であった。資料によると、戦前の国頭村からの移民・出稼ぎ先はペルー、フィリピン、シンガポールなど多岐にわたるが、外地への移民も多く、なかでも南洋群島への移民は多数を占めていた〔国頭村海外移民史編さん委員会編 1992〕。これは沖縄全体の流れと同様と言える。とりわけ今回巡検で訪れた国頭村謝敷集落からの移民は、1925年のシンガポール渡航に始まり、1941年までに8人が確認されている。行き先は、フィリピンまたはシンガポールであった〔石川 1992c : 129〕。外地への移民に目を向けると、南洋群島から7人の引揚者の記録が残っており、いずれもパラオからの引揚げである〔石川 1992b : 535〕。統計的には謝敷集落は国頭村他集落と比較して突出して移民が多かったわけではない。しかし、謝敷集落も他の集落と同様、急峻な山地に囲まれた集落であり（写真3、4）、生活基盤は決して恵まれていなかった点を踏まえると、出稼ぎのための移住が生活戦略の一部として重要な意味を持っていたことは想像に難くない。巡検中の聞き取りでも、基本的に土地を引き継ぐ長男以外は生活の手立てが乏しく、次男以降は生活の糧を求めて南洋群島などに出稼ぎに出て漁業に従事したのだという記憶が語られた〔2025年9月10日、70代男性へのインタビューより〕。国頭村海外移民史〔石川 1992b : 536-566〕に掲載されている南洋群島に渡った人々の体験談を見ると、戦前の沖縄の困窮具合と比べて、南洋群島での生活が相対的に豊かであり、家族に十分な仕送りもできたことが語られている。南洋群島は希望を伴う移住・出稼ぎ先として認識されていたと考えられる。

しかし、こうした南洋群島への移民は、第二次世界大戦後には途絶える。戦後、南洋群島はアメリカの信託統治領となり、移住は困難になった。南洋群島から引き揚げてきた人々の中には、再移住を希望したものも多かったようだが、日本からの再移住は困難になった〔花木 2025 : 18〕。戦後の沖縄における海外移民は、代わってボリビアやブラジルなど南米へと向かうことになった。



写真 3 謝敷集落周辺の様子。写真正面は村の裏手にある丘陵。写真背後には海が広がる

(2025 年 9 月 12 日、筆者撮影)

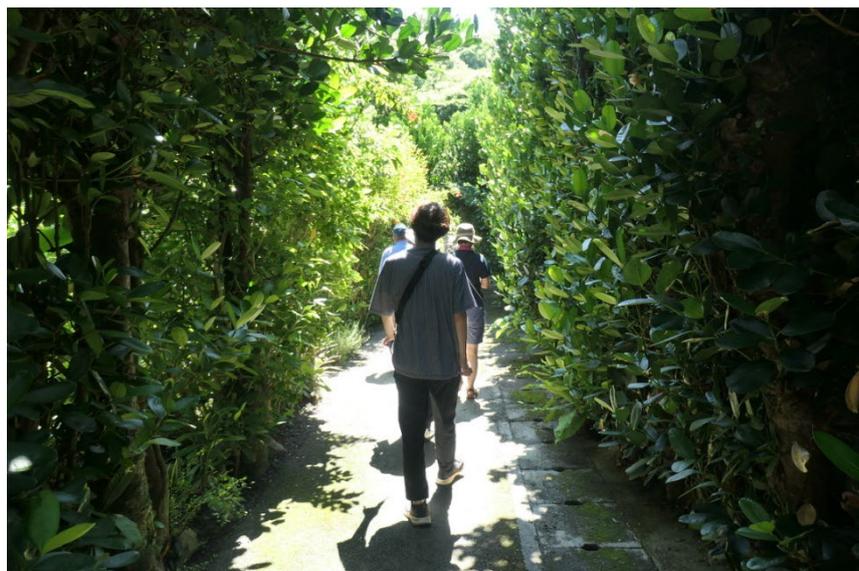


写真 4 謝敷集落内の様子。フクギ並木が集落内を巡っている

(2025 年 9 月 12 日、筆者撮影)

本エッセイでは、戦前の沖縄からの海外移民に関して、とりわけ国頭村からの移民の歴史に注目し、既存の研究と巡検で得られた知見をもとに整理した。上述のように、南洋群島への移民の歴史は、戦前に集中している。しかし、その記憶は今も人々の語りや資料の中にその痕跡を残している。かつて海を越えて働きに出た人びとのこうした記録や語りは、海域を越えて繋がるアジア・オセアニア世界という視座の重要性を改めて確認させる。

他方で、今回の巡検や資料整理を通じて課題も見えてきた。これらの記録や語りは、どうしても移民側の視点に偏りがちであり、南洋群島側の社会や人びととの関係性については断片的なものに留まっている。今後は、南洋群島における移民と現地社会との関係性に焦点を当てた人類学的研究〔例えば 飯高 2009〕や歴史学の文献などを参照しながら、南洋群島側に残る沖縄出身者の記録や記憶、さらには現地社会との関係性にも目を向けることで、海を越えた移動の意味をより立体的に捉える必要があるだろう。それがオセアニア島嶼地域の研究者としての筆者の課題である。

参考文献

- 飯高伸五 2009 「旧南洋群島における混血児のアソシエーション—パラオ・サクラ会」『移民研究』5 : 1-26。
- 国頭村海外移民史編さん委員会編 1992 『国頭村海外移民史 本編』国頭村役場。
- 石川友紀 1992a 「沖縄県における出移民の歴史」国頭村海外移民史編さん委員会編『国頭村海外移民史 本編』pp.3-7、国頭村役場。
- 1992b 「南洋群島における国頭村出身移民の歴史と実態」国頭村海外移民史編さん委員会編『国頭村海外移民史 本編』pp. 532-566、国頭村役場。
- 1992c 「第18表 国頭村字謝敷における年次別国（地域）別海外旅券下付数」国頭村海外移民史編さん委員会編『国頭村海外移民史 本編』pp. 129、国頭村役場。
- 花木宏直 2025 『沖縄出身移民の超域的移動—南洋群島・南米・日本を往来するブラジル移民青年隊員』風響社。

(おおしま・たかあき 東京都立大学大学院)

国頭村の共同店と泡盛

松岡 竜大

祖父が亡くなって約 10 年経った今、私は祖父の育った国頭村へと向かった。沖縄本島最北端に位置する国頭村のある集落に叔祖父とその妻が今も住んでおり、そこに宿泊させてもらった。豪勢な食事でもてなしてもらっていると、叔祖父から「シマー（泡盛）呑むかー？」と声が飛んできた。そこで私は小瓶のまさひろ（まさひろ酒造）を水割りでいただくと、叔祖父はまるた（やんばる酒造）を水割りで呑み始めた。

国頭村において、従来住民たちは各集落に存在する共同店（後述）にて泡盛を購入していた。現在、国頭村内の共同店は減少し、叔祖父の住む集落の共同店も閉業したが、叔祖父がまるたを呑んでいるのは、かつて集落にあった共同店が仕入れていた泡盛が専らやんばる酒造のものだったためである。本エッセイでは、国頭村における共同店と泡盛を巡る諸相について、2025 年現在も営業している共同売店に着目し、その一端を紹介する。

まず、沖縄県北部や離島を中心に存在する共同店について、紹介する。共同店は、小売店における購買事業を主に行っており、集落（字）毎に住民らが共同出資することで運営されている [宮城 2004 : 15]。共同店の歴史は古く、1906 年に奥に設立されて以来、沖縄本島北部を中心に広がり、戦時中は一時廃止されたものの、戦後に再び営業を始めた [宮城 2004 : 15]。日用品や飲食物が販売されており、人々の生活を今も支えている。元々は国頭村の全集落（20 ヶ字）に存在したが、現在では、人口減少などの影響を受けて、浜（写真 1）、桃原（写真 2）、宜名真、辺戸、奥、安田、安波（写真 3）の 7 ヶ字のみが営業している（図 1）。



写真1 桃原の共同店の酒類コーナー（2025年9月12日、筆者撮影）



写真2 浜の共同店の酒類コーナー（2025年9月12日、筆者撮影）



写真3 安波の共同店の酒類コーナー（2025年9月11日、筆者撮影）



図1 沖縄本島北部地図（筆者作成）

今夏、私は全共同店を巡る中で、興味を引いたのは泡盛のラインナップについてである（表1）。ほとんどの共同店で中心的に販売している泡盛と言えば、またや山原くいなをはじめとするやんばる酒造の泡盛である。かつては宜名真や浜にも泡盛の酒造所が存在したが、現在は閉業しており、やんばる酒造が沖縄本島最北端（大宜味村田嘉里）の酒造所

であることによるであろう。

ここで注目したいのは、安波の共同店で取り扱っている泡盛がまさひろ酒造の泡盛のみという点である。なぜ本島南部の糸満市に位置するまさひろ酒造の泡盛しか安波の共同店では売られていないのか？

表 1 泡盛の陳列数（筆者作成）

字	泡盛の銘柄(左から順に陳列数が多い順)	注記
浜	まるた、やんばるくいな、久米仙、残波、海人、美しき古里	
桃原	まるた、やんばるくいな、美しき古里、残波	
宜名真	久米仙、まるた、残波	まるたのみ一升瓶、久米仙は小瓶と紙パック
辺戸	まるた、まさひろ、島唄、久米仙	来訪日休店中だったため、入り口のガラス越しに視認できたものを順不同に記載。
奥	まるた、やんばるくいな、美しき古里、残波、菊之露、久米仙	
安田	やんばるくいな、まるた、久米仙、美しき古里、菊之露、まさひろ、海人、龍泉	
安波	まさひろ、島唄、海人	
<p>補記 1) それぞれの酒造について、「まるた」および「やんばるくいな」はやんばる酒造、「まさひろ」、「島唄」および「海人」はまさひろ酒造、「美しき古里」は今帰仁酒造、「久米仙」は久米仙酒造、「菊之露」は菊之露酒造、「残波」は比嘉酒造、「龍泉」は龍泉酒造。</p> <p>補記 2) 表中記載、「やんばるくいな」は「やんばるくいな」および「山原くいな」双方を含む。</p> <p>補記 3) 浜、桃原は 9 月 12 日訪問、宜名真および辺戸は 9 月 13 日訪問、奥、安田、安波は 9 月 11 日訪問。</p>		

従業員にうかがったところ、沖縄本島東海岸の海を介した交易にその答えが現れる。安波は国頭村の東海岸に位置しており、かつて海上輸送の役目を果たしたやんばる船は、安波と同じく東海岸に位置する与那原とを結んでいた（図 2）。まさひろ酒造のホームページによると、戦前は首里に位置したまさひろ酒造は、1949 年から首里の石嶺に工場を移す 1967 年まで与那原に工場が存在した。安波—与那原間の交易によって、与那原に所在したまさひろ酒造の泡盛が海を渡って安波に届けられていたのである。



図 2 沖縄本島地図（筆者作成）

国頭村史によると、かつては険峻な坂や溪谷、河川によって「陸の孤島」と化していた集落も存在したという。そのような状況で、船が交易に重要な役割を果たしたということは想像に難くない。現在では国道や県道が通り、交通の便が発達したが、安波の共同店の泡盛コーナーには、沖縄本島東海岸の海を介したモノの移動の名残が見いだされるのである。

安波の共同店とまさひろ酒造に関して、最後に一点課題を挙げて本エッセイを締めようと思う。国頭村史によると、安波共同店の酒の仕入れ先について、「戦前戦後を通じて『まさひろ』一本」という記述が見られる。しかし、まさひろ酒造が与那原に工場を移したのは、1949 年と戦後である。この食い違いをいかに解釈すべきかが今後の検討課題である。

参考文献

国頭村役所 1967『国頭村史』国頭村役所。

宮城能彦 2004「共同売店から見えてくる沖縄村落の現在」『村落社会研究』11(1):13-24。

(まつおか・りゅうた 東京都立大学大学院)

社会人類学のフィールドに立つ

—沖縄北部巡検記

高井 美緒

2025年5月末、沖縄への巡検に参加してみないか、と先輩の大島崇彰氏に声をかけられた。まだ入学して1ヶ月ほどしか経っていない時期に、このような機会に恵まれるとは全く思っていなかった。これまで、人類学者とともにフィールドワークをしたことがなかったため、またとない機会だと思って、ぜひ、と強く返事をした。

2025年9月9日から14日にかけて、指導教員の深山直子教授、大学院の先輩である大島崇彰氏、松岡竜大氏と共に、私ははじめて沖縄へと赴いた。今回はあくまでも人類学的調査ではなく、北部を中心に将来の調査のために見て回る巡検、という位置付けだった。それでも、修士課程から社会人類学を学ぶ私にとって、人類学者のフィールドワークを経験できると期待に胸を膨らませ、また同時に、少し緊張もしていた。

今回の巡検の拠点となったのは、沖縄県本島北端に位置する、那覇から車で約2時間の距離にある国頭村である。その中の一集落を中心に、国頭村の北部でフィールドワークを行った。巡検前に、村史などの資料などから勉強会を行った際、拠点となる集落では、村墓という共同墓があることを知り、巡検では、それぞれの関心とは別に、村墓についてはみんな考えてみよう、ということになった。また、共同売店についても面白そう、ということで、4日間の中で情報を集めてみることになった。

私は学部時代より、公衆衛生や医療格差といったテーマに関心を寄せてきた。そこで、巡検前には、病院に行くにも買い物に行くにも遠いこの北部集落において、一般診療や救急医療がどのように機能しているのか、また人々がどのように生活を維持しているのかに関心があった。しかし、実際に北部集落を訪れ、住民の方とお話し、それぞれの集落をめぐる中で、関心は高齢化と過疎化の進む集落で新しく興るビジネスへと移っていった。

初日、現地協力者に挨拶へ行き、夜ご飯をご馳走になった際、私たちは集落に関して話を伺った。話題は主に村墓に関する事だったが、住民が共同で出資・運営する共同売店や、集落にある小規模ホテルについても、興味深い話を聞いた。今回の巡検における現地協力者の住む集落では、かつて、共同売店として使用されていた建物を事務所として改装し、空き

地に宿泊棟を建てたホテルがあることがわかった。ホテルの従業員たちは、集落にホテルを建てるための住民の理解や協力を得るために、集落に広く顔が効く協力者夫婦とのコミュニケーションを大事にしているようだった。就業時間中にも、頻繁に協力者夫妻のところに顔を出しに來たり、お茶をしたりと関係を築いているという話だった。また、高齢化により、実施が難しくなっている七月舞（しちぐわちもーい）などの年中行事にも、従業員が踊り手として参加してくれていることによって、何とか続けることができているとも話していた（写真 1）。

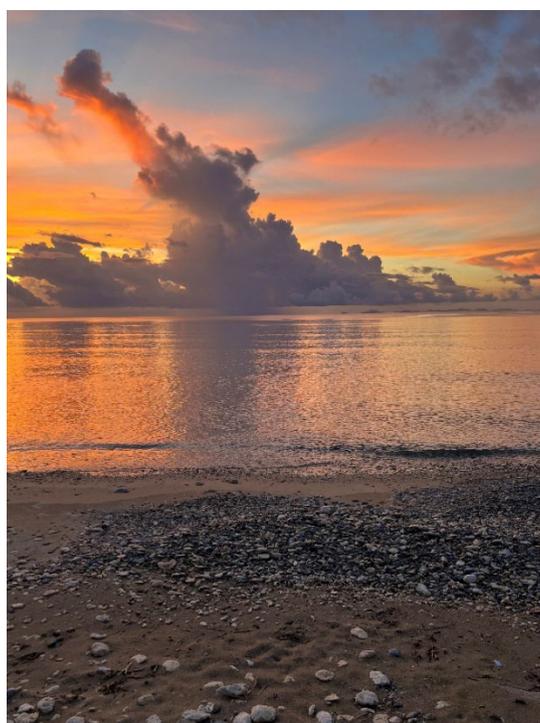


写真 1 集落から見た夕焼け（2025 年 9 月 11 日、筆者撮影）

翌々日、協力者の案内で、村墓や集落内の御嶽、水場などを順に回っていた際、ホテルの宿泊棟の横を通りすぎた。宿泊棟は、集落の中にひっそりと存在していた。高い垣で囲われており、平屋で、遠くからでは他の民家と変わらない雰囲気だが、近くを通ると建物は新しく現代的なつくりになっていることがわかる。また、祭事で使われる広場の近くを案内してもらっていたところ、ホテル関係者一行とすれ違った。なにやら、集落の中を団体に案内している様子だった。

ホテルの従業員とみられる女性が協力者に声をかけ、軽く挨拶を交わす様子がみられた。協力者によると、私たちが案内を受けた御嶽や水場は、集落の人々にとって神聖な場所であ

るため、ホテル関係者の人は立ち寄らないのだそうだ。また、ホテルの宿泊者にも、ホテル従業員が集落内を案内することがあるそうだが、その際にも、くれぐれも立ち入らないように、と伝えているのだという。

集落内をぐるりと一周し、集落の中心に戻ると、ホテルの事務所から先ほどの従業員の女性が、にこやかに協力者のもとに駆け寄って、他愛もない会話を二、三かわしていた。従業員は、私たち一行が何者なのか訝しがっているように見えたが、協力者と知り合いであると知るとふっと雰囲気が変わり、いろいろと話してくれた。

ホテルのパンフレットやホームページを見てみると、観光資源を持続的に活用していくこと、地域活性化に一役買うようなホテル運営を目指すこと、地域のリアルな信仰や文化、食、自然についての体験を宿泊客に提供すること、などが掲げられている。協力者も、ホテルの創設者や従業員は、そのような理念に基づいて取り組んでいる、と好意的に語っていた(写真2)。



写真2 海から見た拠点集落の山 (2025年9月13日、筆者撮影)

協力者の案内で集落内を歩いただけでも、住民の様子や関係性がさまざまみることできて興味深かった。とくに、ホテルがあることによって国内外から人々がやってくることによる経済効果や、高齢化にある集落のこれまでの祭事を継続するためにホテル関係者が関

わっていることを歓迎するような住民もいる一方で、それに対して複雑な思いを抱いている住民もいるようだった。

また、私たちが拠点集落だけでなく、他の集落を同様に散策していると、我々の様子を見つめる現地住民の姿があった。普段は静かな集落で、外からやってくる人は珍しいということなのであろうか。協力者の姿を見たり、協力者の名前を出したりすると、少し安心した様子であった。巡検を通して、このような緊張を目の当たりにするたび、現地協力者の存在の大きさを実感した。協力者がいなければ、立ち入ることができなかった場所、聞くことができなかった話がたくさんあり、このように充実したフィールドワークを行うこともできなかったと思う。

巡検中、どのような医療が行われているかに関しても、興味深い取り組みや出来事と出会うことはあった。しかし、フィールドに入ったことで、それ以上に心惹かれる事象との出会いがあった。たくさんの情報にとめどなく晒され続け、全てをノートに書き留めたいと思っても、なかなか手が追いつかなかった。目の前の風景、話をしてくれる人々と向き合いながら、ノートに書きつけることは難しかった。

すべてを捉えることはできなくても、ひとつでも多くの情報を記録したつもりで帰ってきて、それらを振り返る作業の中で取りこぼしてしまった情報に気づき、自分のやり方の甘さを悔いた。はじめての人類学的フィールドワークでは、反省の方が多い。現にこうして、エッセイとしてまとめている今も、まとまりのない文章と、巡検で得たことをうまく構成するテクニックのなさを突きつけられ、不勉強を恥じるばかりである。

それでも、フィールドで出会った人々、風景、すべてが私にとっては新鮮で、また機会があれば訪れたい、今度はもっと良いフィールドワークをするのだ、トリベンジに燃えている自分もいる。今回の巡検では、私はフィールドワークの醍醐味を学んだ。次の機会には、より理論なども深く学び、今回の巡検よりも成長したフィールドワークを行いたい。

(たかい・みお 東京都立大学大学院)

標示板と巡る昔日の首里

—歴史を学ぶため、まちを歩く人々との出会い

遠藤 なつめ

一 はじめに

私は修士論文執筆に向けた調査のため 2024 年、2025 年に複数回沖縄県的那覇市を訪れた。那覇市内を散策すると度々目に触れるのが、(写真 1) のような石でつくられた案内板である(以降、これらの石製の案内板を標示板と呼ぶ)。この標示板は、1995 年に那覇市歴史博物館の施策として設置された「那覇市旧跡・歴史的地名標示板」である。2026 年現在、歴史博物館の「史跡・旧跡マップ」¹では 117 か所が記載されている。県外から訪れた私はその標示板を見るたびに、記された過去の那覇市²の姿に感嘆しつつも、観光・調査を目的とした来訪者のためのものだろうと、当初さして関心を抱いていなかった。しかし、後に出会う人びとによってそのような考えは大きく覆された。

¹ 那覇市歴史博物館 史跡・旧跡マップ <https://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/spot>
2026 年 2 月 18 日最終閲覧

² 史跡・旧跡に定められている建造物や施設、街路のほとんどは現在の那覇市制定以前には建てられていた。しかし、これらの標示板は那覇市歴史博物館によって 1995 年以降に設置され、現在の那覇市が設置範囲になっているため、ここでは「那覇市の姿」と表現する。



写真 1 首里当蔵町に設置された標示板 (2024年10月31日、筆者撮影)



写真 2 当蔵の標示板周辺 (2024年10月31日、筆者撮影)

二 那覇市旧跡・歴史的地名標示板

私が初めて標示板に目を留めたのは、2024年11月のはじめに那覇市に訪れた時であった。(写真1)の標示板は、沖縄県立博物館に所蔵される絵図とともに、その地の名前の由来や県の文化財に指定された経緯が記載されている。(写真2)は周辺を撮影したものである。複数の団体の案内板が集まっている様子が見られるが、案内の内容はそれぞれ異なる。

(写真3)、(写真4)、(写真5)は首里金城町の標示板とその周辺の様子を写している。金城町の石畳を下りきった、金城川沿いに設置されていた。川沿いの道路は多くの車が走る一方で、人通りはほとんどなかった。標示板には金城橋と南方に広がる識名平が描かれた屏風図と現在の地図が並べて載せられている。



写真3 首里金城町の標示板 (2024年11月2日、筆者撮影)



写真 4 案内板と金城橋 (2024年11月2日、筆者撮影)



写真 4 案内板の隣に設置されている重修金城橋碑文 (2024年11月2日、筆者撮影)

絵図や周辺地図が記載された案内は、私にその地の歴史を伝えてくれた。しかし、標示板を読むために立ち止まる人はほとんどなく、外部者のためにつくられたささやかなガイドに過ぎないのだろうと、私の記憶の片隅に追いやられていった。

三 首里を「見て歩く」

私の標示板への印象が大きく変わったのは、2025年夏の調査時のことであった。修士論文提出を控えた私は、首里城の復興事業に関わる人びとへの聞き取りのために、那覇市内をあちこち訪ねて回っていた。沖縄県立博物館で行われていた首里城復興に関する県職員の講演会にて、聴講者のひとりに声をかけた。聴講者のAさんは首里や首里城に関する市民団体に所属し、首里地域の史跡や旧跡を歩いて巡る活動をしているという。Aさんのご厚意で、後日その団体の定例会に参加させていただくことになった。

那覇市内の会議室で行われた定例会は、男女合わせ13人程度の人びとが集まっていた。普段は室内の活動だけでなく、実際に史跡・旧跡を見るため、首里のまちを巡り歩いているという。その日の定例会は夏の暑さを考慮し、室内での資料の読み合わせが行われていた。読み合わせに使われる資料は、2016年に団体自身が発行したものであった。ただ記載された内容を音読するだけではなく、過去の地名や石碑は沖縄方言で読むことが意識づけられ、土地の成り立ちや歴史について議論する場面も見られた。私が驚いたのはこの資料の各所で挿入される写真に標示板が含まれている、ということであった。標示板の板面がアップで写されたものだけでも、およそ8か所の写真が挿入されており、その多くは現存しない首里の有力者の邸宅や、街中の石碑のそばにあった。周囲と同じような住宅街の一角で歴史を伝える標示板は、首里の歴史に関心を持った人びとによって注目され、散策の目印にされていた。

四 標示板から歴史を捉えなおす

その地の過去の姿を私に教えてくれた標示板は、決して外部者のためだけのものではなかった。同じ市内の関心をもった人びとにとっては、歴史を学びなおす目印にもなっているのである。

標示板が石でつくられ、絶えずまちに佇んでいることも、決して無関係ではないだろう。団体の人々は、資料を携えて実際にまちを歩き、過去の景観に思いを馳せる。その時、古い絵図が描かれた標示板と、同じ場所の現在の様子を一度に目に映すことで、現在と昔日の景観は重なり合う。標示板は紙資料に記載されるものと異なり、移動できず雨や風にさらされても存続する。さらに、標示板は景観の一部として紙の資料に記される。那覇市歴史博物館によってつくられた標示板が、市民に読まれ改めて歴史を認識する大きなきっかけになり得る。

行政によってつくられた標示板が、市民の活動にいかに関わって行くのか。短い滞在期間では、捉えきることはできなかった。しかし、日夜その場にあり続ける標示板は行政と市民、双方による歴史の再認識の鎧になり得る。Aさんと参加させていただいた団体の皆様との出会いが、私に教えてくれたのである。

謝辞：本稿における2025年8月9日から9月5日の調査は東京都立大学社会人類学教育基金による調査研究旅費支援を受けたものです。

(えんどう・なつめ 東京都立大学大学院)

島レモンと海域

—小笠原諸島父島における出会いと別れの物語（その3）

横田浩一・河野正治・李婧

小笠原諸島は一年を通して温暖な亜熱帯気候であり、その気候を生かした様々な農産物が生産されている。父島の二見港の直売所には季節の野菜や果物が並べられており、パッションフルーツやトマトなどが文字通り、飛ぶように売れていく。今回はそんな小笠原諸島の農業に注目して海域との関わりを探ってみたい。

東京都小笠原村の農業生産額を上位から見ると、パッションフルーツ、トマト・ミニトマト、レモン、マンゴーの計5品目で全体の8割を占める。その後、コーヒー、オクラ、シカクマメと続く[東京都 2025]。ここでは生産額第3位のレモンに焦点を当て、小笠原諸島との関わりについて見ていく。

小笠原諸島で栽培されているレモンは「島レモン」と呼ばれる(写真1)。この島レモン(学名：*C. Citrophorum Limonioides*)は、オレンジとレモンの自然交配によってできたマイヤーレモンの近縁だとされている[根角ほか 2002:66]。小笠原では緑の果実を収穫し、レモンサイダーやレモンジャム(写真2)、レモンゼリー(写真3)などさまざまな形に加工され販売されている(写真4)。果実は通常のレモンより大きい。スーパーマーケットでよく売られている私たちが一般に想像するレモンとは色も大きさも異なる。



写真1 直売所に並ぶ島レモン (2025年12月25日、河野正治撮影)



写真2 レモンサイダーとレモンジャムが並んで売られている

(2024年3月16日、河野正治撮影)



写真3 母島で販売されるレモンゼリー (2024年3月15日、河野正治撮影)



写真4 レモンカード、島レモンオイルも販売されている

(2025年12月25日、河野正治撮影)

島レモンが小笠原諸島で栽培され始めたのは1973年である。それ以前は、菊池雄二が1940年にテニアン島から八丈島に持ち帰り、栽培が始まった。テニアン島でのレモンは「ヤップレモン」とも呼ばれ、ヤップ島が起源であるとされており、父島には菊池の娘である沖山ルリ子が苗を導入したことで栽培が始まった〔根角 2002: 62〕。一方、八丈島では「菊池レモン」、または「八丈フルーツレモン」と呼ばれている(写真5)。小笠原のレモンが緑色の状態で出荷されるのに対し、八丈島のレモンは樹上で完熟させて黄色くなってから出荷するという違いがある。なぜ、テニアン島のレモンが八丈島を経て小笠原にもたらされたのか。テニアン島—八丈島—小笠原には海域を通じたレモンと人の移動の歴史があったからである。



写真5 島レモンの苗木。菊池レモンとも呼ばれる

(2025年12月26日、河野正治撮影)

まずは八丈島と小笠原諸島の関係についてである。1862年に農民の男女30名の八丈島島民が父島に移住した〔対馬 2005 : 16〕。これが最初の小笠原諸島への欧米系

(1876年の明治政府による領有宣言以前に外国より入植し、日本の統治下以降も住み続けた島民とその子孫) 以外の住民であった。「おが丸」出港の際に披露される見送り太鼓のルーツが八丈島にあるように〔李・河野・横田 2025 : 78〕、小笠原と八丈島の関係は深い。明治末期頃には小笠原島民の大半は八丈島出身であったとされている〔対馬 2005 : 16〕。

また、八丈島はサイパン島やテニアン島への移住者を輩出した島でもある。サイパン島やテニアン島は、第一次世界大戦時のドイツの敗北によって日本に統治権が与えられ、1919年から国際連盟の委任統治領として日本が統治することになった。この日本統治時代にミクロネシアは、「南洋群島」と呼ばれていた。1927年には、サイパンにある南洋興発株式会社が主としてサトウキビ畑の開拓を行う農民を募集した。1932年に南洋興発が

発行した「農場移民」の農場別名簿によると、沖縄の次に多いのが東京府出身者で、そのほとんどが八丈島出身者であったという [対馬 2005 : 20]。1927 年から 28 年頃には横浜・横須賀を出港し、八丈島、父島、サイパン、テニアン島へと至る航路（東廻線）ができた。それまでは八丈島には寄港しなかった船がこの頃から直接寄港することになったことで、八丈島からテニアン島への移住者は増加した [対馬 2005 : 19]。テニアン島—八丈島—小笠原のつながりは、現在の日本の航空路線や定期航路からは見えてこない。だが、小笠原の初期の日本人移住者は八丈島出身者であり、八丈島出身者はまたテニアン島へ開拓農民として渡った者が多く、そこにはかつて確かなルートが存在した。

現在の小笠原諸島のレモンの大部分は、八丈島の一正園または母島の折田氏が繁殖したものである [根角ほか 2002 : 62]。レモン栽培が始まったのは上述のように 1973 年であるが、それが本格化するのは 1992 年からであるという¹ [小笠原新聞社 2000]。無農薬で緑色のまま完熟して皮まで食べられ、酸味が少なくほのかな甘味があるのが島レモンの特徴である。近年になって栽培品種としての価値を見出されて特産品となった。

小笠原諸島とテニアン島などマイクロネシアとのつながりは、小笠原諸島が内地とマイクロネシア間の交通の要衝として経済的・軍事的意味が見出されたことを端緒としている。つまり、小笠原諸島は収奪の対象であるとともに、さらなる「南洋」に経済的・軍事的に拡大するための〈飛び石〉とみなされたのだった [石原 2013 : 129-131]。テニアン島—八丈島—小笠原のレモンの移植ルートは、日本の帝国主義によって開発された航路に基づいており、海を越えた人やモノの移動は、一方では文化交流をもたらしたが、他方では植民地支配の痕跡も残っている。島レモンの来た道をたどることは、日本の植民地支配の歴史を思い起こすことになると同時に、小笠原諸島からの視点で人とモノの移動の来歴やその背景を現在の私たちが知るきっかけを与えてくれると言えるだろう。

参考文献

石原 俊 2013 『〈群島〉の歴史社会学——小笠原諸島・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界』弘文堂。

小笠原新聞社 2000 「小笠原レモン」2000 年 1 月 23 日

<https://www.ogpress.com/3p/news/remon.html> 2025 年 12 月 24 日最終閲覧

¹ 父島に導入された苗木と母島のレモンは同一の起源も持つとみなされている [根角ほか 2002 : 62]。

対馬秀子 2005 「八丈島から旧南洋群島・ミクロネシア・北マリアナ諸島への「農場移民」——動態的民族誌として」『白山社会学研究』13：13-27。

東京都 2025 「小笠原諸島振興開発計画における目標の設定状況と進捗状況」

<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001900194.pdf> 2025年12月24日最終閲覧

根角博久・原島浩一・和田実・菊池正人・朝長信次・吉田俊雄 2002 「小笠原諸島におけるカンキツ遺伝資源の調査」『植探報』18：57-75。

李婧・河野正治・横田浩一 2025 「「おが丸」出港時に鳴り響く見送り太鼓——小笠原諸島父島における出会いと別れの物語（その2）」『海域アジア・オセアニアNEWSLETTER』3：78-83。

(よこた・こういち 人間文化研究機構／東京都立大学、
かわの・まさはる 東京都立大学、
り・せい 東京都立大学)

【書評】葉山博子著『南洋標本館』

—海域アジア・オセアニア研究の視点から読み解く

河野 正治

葉山博子

『南洋標本館』

早川書房、2025年

本書は、作家である葉山博子の2冊目の著作である。アガサ・クリスティー賞大賞を受賞した前作の『時の睡蓮を摘みに』（2023年、早川書房）に続いて、戦前における植民地統治や戦争の運命にさらされながらも生きる人間のドラマを描いた作品である。著者が紡ぐ物語の完成度の高さについてはすでに多数の書評で絶賛されているが、それを支えるのが日本や台湾を中心とする戦前・戦中の歴史への深い理解であることに疑いはない。

扱っている時代と地域こそ戦前から戦中・戦後に至る海域アジア・オセアニア世界であるが、あくまでも小説であり、伝記的事実や史実とは異なる創作的な描写も多数登場する。それでもなお、この作品は植民地統治や戦争の経験のみならず、海域アジア・オセアニア世界における「地続き」のような「海続き」の交流〔cf. 秋道編 1998〕とそれにもとづく諸個人の複雑な経験を、読者に想像させる喚起力を十分に備えている。

本書評では、そのような海域アジア・オセアニア研究の視点から『南洋標本館』が描く世界の一端を紐解いてみたい。

物語の主人公は、台湾の「本島人」である陳永豊（タン・イェンホン）と、台北生まれの「内地人」である生田琴司（いくた・きんじ）である。小説自体は、いつか南洋植物の標本館を作りたいという二人の青年の約束を基底として展開する。植物採集への情熱自体には政治的要素が希薄なものの、陳と琴司は帝国日本をめぐる当時の政治状況に否応なく巻き込まれていく。

二人の青年の生き方を文脈づけるのは、帝国日本において統治者と被統治者の間に明確に存在していた序列である。陳と琴司が出会った総督府高等学校尋常科では、内地人から本島人への日常的な蔑視があった。そうした非対称な関係性のなかで、陳は植物学者になる夢

を抱きつつも、本島人と内地人の間に存在していた壁を乗り越える期待を背負わされ、内地の帝国大学に進学して医者になるというレールを周囲から敷かれた。一方、陳とは異なる形であったが、台湾生まれの内地人である琴司の生き方も内地と台湾の序列に規定されていた。琴司は、内地生まれの内地人との比較に苛まれ、内地の帝国大学に進学せよという周囲の圧力に晒されながらも、台湾に根を張って生きることを選び取った。同じ内地人であっても台湾生まれと内地生まれの間には暗黙の序列が存在しており、植物学者として台湾にとどまることを選んだ琴司のもとに持ち込まれた縁談は、後に妻となる病弱な澄恵のみであった。琴司は内地人でありながら、内地と台湾という序列のなかで生きていかざるを得なかったのである。

このような背景を視野に入れるならば、陳と琴司が抱いた南洋の植物学者という夢は、純粹な学問的情熱であると同時に、内地と台湾をめぐる日常の政治に対する反転としての非政治的な夢であったと解釈できるだろう。

そのような非政治的な夢を叶えるための交通インフラ自体、帝国日本という政治的文脈と切り離せない。琴司が植物採集を行ったのは、日本による占領下の広東や海南島を除けば、横浜から小笠原諸島を経てマリアナ諸島やカロリン諸島へと至る航路に沿った島々であり、戦前の帝国日本が南洋群島として統治したミクロネシアと本州をつなぐ航路にはかならない。他方、陳が植物採集を実質的な目的として訪問していたのは、戦線の拡大とともに帝国日本のフロンティアとなったニューギニアやインドネシアであった。琴司が帝国日本の領土の内部で、陳が帝国日本の領土拡大の前線で、それぞれ植物採集を行ったという違いはあるものの、二人の植物採集を支えたのは帝国日本という枠組みによって可能となる移動であったのだ。

こうした帝国日本における南方への移動・移住を追跡することは、戦前に京城・大連・パラオに滞在した中島敦（1909～1942年）の越境経験を引き合いに拙稿で論じたように「アジアとオセアニアを移動・横断する行為者の複雑な経験に迫る」ことであり、「国民国家とは異なる地理的な想像力を掻き立てる」ことにつながる[河野 2023:7; cf. 小谷 2019]。

ただし、本書ではそれ以上に、本来は非政治的であるはずの植物採集という学問的探究が帝国日本における統治経験と戦争の発生という政治的な出来事とのかかわりを深めるなかで、主人公が次第に内面的な葛藤を孕むようになる過程が描かれる。

陳の民族アイデンティティは出生の地点から複雑さを帯びている。陳は福建人の父と台湾原住民の母の間に「劉偉（ラウ・ウィ）」として生まれながらも、父が日本人警官に連行

され処刑されるという過去を持つ。その後、陳は、対日協力を契機に富豪になった陳家に引き取られ「陳永豊」として生きることとなる。先述した「本島人と内地人の間に存在していた壁を乗り越える期待」とは、この時期に陳の義父となった陳永勝（タン・イェンシュン）が陳に夢見ていたものにほかならない。陳永勝自身、内地人に対して従順な素振りを見せながら、自身の手掛ける台湾製糖業を本島人の手に取り戻すことを目標としており、彼自身内地人と本島人の狭間で生きていかざるを得なかったのである。

義父を病気で亡くし、日本の財閥に陳家の事業と財産を接収された後、陳は台北帝国大学の教授のもとで植物学者として台湾で生きることとなる。しかし、その歩みにおいて、本島人であることを理由に論文を査読に落とされたり、実父である劉文照（ラウ・ブンチャウ）が台湾民主国の武官として日本と戦ったという来歴を聞かされたり、東京帝国大学在籍時に知り合った福建人から日中戦争が迫る状況での抗日戦線への誘いの手紙を受け取ったりしているうちに、陳は日本国籍を有しながらも福建人にルーツを持つという両義的な属性に自身のアイデンティティを引き裂かれそうになる。

陳は、太平洋戦争の戦線の拡大とともに、陸軍嘱託技師としてインドネシアのジャワ島に渡り、その身分の限りにおいて植物学者としての活動を継続することになるが、当局からの暗黙の要請により「永山豊吉（ながやま・とよきち）」という日本名への改名を余儀なくされる。陳は永山という日本人としての振る舞いを内面化しながらも、帝国日本下におけるジャワの住民を自身のルーツである台湾の本島人と重ね合わせる。彼は日本名を名乗りながらも、日本側が進める農業政策の失敗を予期し、何世代にもわたりジャワの地に根付いてきた農民の知恵を称揚する。その一方で、陳は、スカルノら独立運動の指導者に近い立場にあるラトゥナとの恋に際しては、独立運動の足枷になる華僑華人と同じルーツにあることを隠すために、日本人として振る舞い続けた。陳はここでも自己分裂するのである。

太平洋戦争が終結すると、陳も含む全ての本島人は日本国籍を喪失し、中華民国籍に編入された。だが、陳は本島人でありながらも日本統治下の知識人であった来歴から、国府から狙われ香港への亡命を余儀なくされる。他方、琴司は「日本人」として引き揚げなければならず、生まれ育って以来 37 年間過ごした台湾を離れ九州に移住し、植物学者としての歩み続けることになる。

このように、本書では二人の主人公が内地人と本島人という二重のアイデンティティを抱えながら移動や移住を重ね、それぞれの地点において内面的葛藤を繰り返す様子が描写される。こうして引き裂かれた自己アイデンティティに、わずかな救いが見出せるとしたら、

陳の香港亡命時における「植物学者だったきみは、誰の借り物でもない、きみ自身だったじゃないか」（本書 p. 493）という琴司の台詞と、陳が日本でも台湾でもない北米という第三の地で植物学者として成功を収め、華僑三世の妻と家族を形成したというエピソードであろう。

以上のように、本書は南洋の植物学者の夢という題材を通して、単一民族神話とは異なる「多民族国家」としての帝国日本における移動・移住とそれに伴う越境経験、そして複雑なルーツをもつ自己の内面的葛藤を描いた作品である。戦後 80 年という節目の年に出版された本書は、現代の日本人にとって「忘れられた島々」[井上 2015]とも形容される戦前・戦中の海域アジア・オセアニア世界がいかなる世界であり、その世界で複雑なルーツをもつ個人がどのように自己形成をしていたのかを鮮明に描き出す点に作品としての価値がある。

とりわけ、本書の意義は、海域アジア・オセアニア世界の「海続き」の交流がフロンティア精神によって支えられる肯定的側面ばかりではなく、自己アイデンティティをめぐる葛藤を伴う越境経験という負の側面を持ちうることを、小説という形態で伝える点である。具体的には、台湾における「内地人」と「本島人」という区別を起点としながら、帝国日本における階層的な民族構成とそれに伴う内面的葛藤の問題を、主人公の生きざまに迫りながら浮き彫りにする点である。帝国日本における統治経験に関する研究[今泉 2023: 261-262]では、戦前の南洋群島（ミクロネシア）においても「一等国民（内地人）」・「二等国民（沖縄・朝鮮半島出身者）」・「三等国民（ミクロネシア島民）」という暗黙の序列が存在していたことが指摘されており、台湾以外の舞台でも同様の経験や生き方を描ける可能性は十分にある。

本書の巻末には、多数の学術文献が挙げられているほか、方言指導や、国立台湾大学植物標本館での見学、同館の館長への聞き取りに対する謝辞が述べられている。著者によるこうした丹念な文献調査と取材こそが、史実とは異なる創作部分を含みながらも、二人の主人公の生きざまに迫るようなリアリティと質感をもった読書体験を可能にしているといえよう。

本書は小説であり、主な読者として想定されているのは一般層であろう。だが、オセアニア・東アジア・東南アジアについて学び研究する者こそ、本書を通じて喚起される戦前・戦中の海域アジア・オセアニア世界の物語に触れるべきである。現代の海域アジア・オセアニア世界の底流に「忘れられた島々」としての歴史があることを、本書の鮮烈な読書体験を通じて、より実感を持って批判的に理解することができるはずである。

参考文献

秋道智彌編 1998『海人の世界』同文館。

井上 亮 2015『忘れられた島々——「南洋群島」の現代史』平凡社。

今泉裕美子 2023「太平洋分割のなかの日本の南洋群島統治——委任統治と「島民」の創出」
中野聡・安村直己編、棚橋訓編集協力『岩波講座 世界歴史 19 太平洋海域世界 ～二
〇世紀』岩波書店、pp. 229-245。

河野正治 2023「フロンティアとしての島嶼世界——海域アジア・オセアニア研究のための
予備的検討」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』135 : 1-10.

小谷汪之 2019『中島敦の朝鮮と南洋』岩波書店。

(かわの・まさはる 東京都立大学)

2025 年度海城アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学 拠点研究会・活動報告

講演会：人は食に何を求めているのか：台湾の漁港で食べるマグロとサーモンの刺身か
らの一試論

稲澤 努（尚絅学院大学）

日時：2025 年 11 月 7 日(金)17:00-19:00

会場：東京都立大学南大沢キャンパス 1 号館 206 教室

※対面開催のみ

講演要旨：

ヒトは栄養補給だけを目的に食事をするわけではない——これは文化人類学に親しんだ者であれば（そうでなくとも）、数多の事例から容易に説明できる自明のことである。

本講演で主に取り上げるのは、台湾のある漁港で提供される刺身である。この漁港を訪れる台湾人観光客は、そこで刺身を食している。「フードツーリズム」や、それを念頭においた「テロワール」概念など、観光の目的の一つとしての「食」をめぐる人々や社会の動向は、近年、一般社会でも学界でも注目されてきている。そのため、観光客が漁港で刺身を食するという行為は、少なくとも我々日本人にとっては、きわめて自然なことに思われる。

しかし、かつて台湾においては、魚を生で食べる習慣はほとんど存在せず、海水魚を食べる文化も限定的であった。台湾におけるマグロ漁・カジキ漁・カツオ漁の拡大は、日本による植民地統治と切り離しては語れない。また、寿司や刺身の流行にも日本の影響が大きい。新鮮な魚を求めて漁港を訪れ、そこで食事を楽しむという習慣は、日本の影響を受けて形成されたといってもよいだろう。

ところが、当該漁港で提供されているサーモンは、この漁港はおろか、台湾で水揚げされたものではない。もちろん日本産でもない。にもかかわらず、なぜ台湾の漁港でサーモンの刺身が観光客に積極的に提供されているのだろうか。

そもそも、台湾の漁港における生食の習慣は、いつ・どこから・どのように広まったの

か。また、この漁港に暮らす人々は、いつからそれらを食するようになったのか（あるいは食していないのか）。現段階では、それらを明らかにする資料はまだ十分に収集できていない。

本講演では、まず試論として、現在までに得られた資料をもとに、台湾においてマグロおよびサーモンの刺身が定着してきた経緯を概観する。そのうえで、なぜそれがこの漁港で提供され、食されるのかという問いを手がかりに、「人は食に何を求めているのか」について考察を試みたい。

海域アジア・オセアニア研究プロジェクト（MAPS）2025 年度若手研究者集会

日時：12月14日(日) 14時～

会場：東京都立大学南大沢キャンパス1号館102教室

※対面開催のみ

プログラム：各発表持ち時間の内訳（発表30分、質疑応答15分）

14:00- 14:05 開会のあいさつ

14:05- 14:50 発表① 大津留香織（人間文化研究機構／東洋大学）

「関係修復の「物語実践」の限界と可能性」

14:50- 15:35 発表② 大島崇彰（東京都立大学大学院）

「現代フィジーのカヴァ産業の動態——生産・流通における民族間分業に着目して」

15:35- 15:45 休憩

15:45- 16:30 発表③ 奥田真由（京都大学大学院）

「都市に生きる相互扶助——インドネシアジョグジャカルタ特別州におけるゴトン・ロヨンとアリサンの実践を通して」

16:30- 17:15 発表④ 今村宏之（国立民族学博物館）

「集団体操から「インドネシア武術」にいたる道——「大東亜共栄圏」におけるローカル武術の戦時利用について」

17:15- 17:20 閉会のあいさつ

海域アジア・オセアニア NEWSLETTER 第4号

発行日 2026年3月31日

編集発行 海域アジア・オセアニア研究プロジェクト 東京都立大学拠点

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 東京都立大学人文科学研究科

transnesiatmu@gmail.com